

---

# 神殺しさまの謀略

百華あお（元・白邪アリス）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神殺しさまの謀略

### 【Nコード】

N5348I

### 【作者名】

百華あお（元・白邪アリス）

### 【あらすじ】

【作者、改名しました。詳しくは活動報告へ 元・白邪アリス】  
汝、神を冒すことなかれ—— 罪人《榊神威》、罪状《神殺し》——それは神の眷属である以上、最も重い罪。悪魔の所業と蔑まれ、その身体が呪いに蝕まれても尚、信仰と云う狂気と理不尽と云う公平を破る為に彼は神をも手に掛ける。因果や運命に絡め取られ、半生を失った魔王の物語。

↓ I a m S a t a n . A r e y o u a f r a i d o f m e

罪人【サカキカムイ神神威】——罪状【神殺し】。

三日月が妖しく輝く夜。

魔王と讃えられた男は捕らえられた。

——否、神を殺した男は、魔王と恐れられた。

罪状【神殺し】 刑罰【極刑】。

神を殺し、魔王と成った男は、歴史上にて殺された。  
深い深い、歴史の闇に葬られた。

それ故、男の存在が表に語られることはない。  
ただ在るのは存在を騙られることのみ。

たとえそこに存在しようとも。

生ける死人。しかばね

男は魔王として世に君臨しながらも、ただの一人として、男の存在を認知できる者はいなかった。

それが呪い。

そして。

男は伝説の中でのみ、騙られる。

歴代の魔王の中でも最高にして最強の、【神殺しさま】として――

――汝、神を冒すことなかれ。

【Episode・0】The Story of Satan  
Prologue

「正気……ですか？ 魔王どの」

訝しげに爺は、顰め面を歪ませた。

老い腐り歪な顔のパーツが、滑稽に、膨らむ。

「正気も何もないだろうが。やるって言ったらやるしかない、だろ？」

そんな不細工を嘲笑うように、男は、鮮血のように真っ赤な瞳を細めた。

瞳に宿る暗い狂気以外は、何処にでもあるただの青年でしかない、黒髪の痩身。

けれどその痩身が纏うオーラは、昏く禍々しく、強大な闇の力に帰している。

「そんな……いくら神殺しと呼ばれた貴方と言えど。あの呪いを解こうだなんて、半ば自殺行為にも近い」

「けっ。お前はなめてんのか？ この魔王さまを。人間がかけた呪いなんざ、十秒もありや十分だ」

「いえ、私が言っているのはそういうことではなくてですね……」

子供のように我儘を捏ねくり回す青年に、今度は困ったように顔を歪ませる老人。

はああ、と盛大な溜息を辛うじて呑み込み、青年の瞳をぐっと見据えた。

「呪いを解くには、貴方以外に第三者の協力が必要なのですよ？ それを解つておいでですか」

「ああ、だからお前がいるんだろ」

「私ですか！？ わ、私は全くの第三者と言うわけでは——」

「煩い。黙れ、俺だって本当はこんな阿婆擦れジジイじゃなくてもっと可愛い巫女さんがいいわい。だけど俺が視えるのは今のところ

前しかいないだろ、諦める」

「うつ……賢者たる私にこの仕打ち……いつか罰が当たりますぞ…

…」

「うるっせ。お前如きの罰なんてどんなもんだ、あんまり渋ると殺すぞ」

殺すぞなんて脅し文句とともにその紅い目で睨まれ、爺は堪らなくなつてはあど頭を下げた。

あの鋭い紅い瞳には多分、禍々しい妖しの力が宿っているのである。

仕方のないこと——賢者の名を冠する老体は、諦めて魔王の前に頭を垂れる。

此処は話題を変えなければ。本当に殺されてしまつては堪らない。

「それにしても、あの時からまだ十五年しか経っていないというのに——もう解術を編み出してしまうとは、やはり魔王どのの天才なのでしょうな」

「聞き飽きた。天才なんてありきたりすぎ。イラネ」

「なっ……！ ほ、褒めているのですぞ！ 天才がありきたりなどと——」

「口が過ぎるぞ、ジジイ。今じゃあ天才なんて呼ばれる奴はそこらへんにゴロゴロ転がつてるだろが、そんな名を貰つて何が嬉しいものか」

「ぐっ……で、ですが本当の天才は一握りで」

「あんな、ジジイ。俺は天才って言われるより非凡って言われる方が好きなんだ、そっちの方が魔王っぽい感じがする」

「き、気分だけでしよう！」

「いいんだよそんなのノリで。兎に角俺がそう言つんだから従えボケ」

どすつと額に指を突き付けられ、賢者はおおうとよろめく。  
つつつく、というにはあまりにも破壊的な威力だ。傷口がひりひ  
りと疼く。血は出ていないとは言えど……。

「ていうかな、十五年しか経ってないんじゃないやなくて、十五年もかか  
つちまったんだよ。解術自体は二年で編み出してた」

「な……っ！？ 二年、ですか！？」

「ああ。ただ、迷ってたことがあってな——」

「ごきごきと首を鳴らす青年を見つめ、賢者は信じられないような  
気持ちになった。

あれほど強力な呪いの解術を二年で得たこともそうだが、この青  
年に迷い等という感情があったことに——。

魔王。神殺し。そんな異名まで取る青年に、迷いや容赦といった  
概念は今までなかった。なかった、に等しい。

そもそも、何に迷うというのか。神さえをも殺した男が。

「さ、差し支えなければ教えて頂きたい…… 一体何を、迷ってい  
らっしゃったのでしょうか？」

「あー、そうだな。例えば呪いを解いて世界に復活したとして、俺  
は何をすればいいのかってことだ」

「……はい？」

「まあ簡単にいえば、暇だってこと」

賢者と讃えられた老人にも、その答えは予期できなかった。

否、勿論世界の人間たちが可哀想だから——なんて答えを返す謙虚  
な男だとは思っていなかったが。

まさかそこまで自己中心的な答えが返ってくるとは……。

「復讐を考えても、俺に呪いをかけた奴はもう死んでるし。神を殺

した後に世界征服——なんてしょぼいしさあ」

「は、はあ……」

思わず間拔けな反応を返してしまう。

けれど賢者のそんな反応にも青年は怒ることなく、どうしようかな——と気怠げに呟いている。

世界征服がしょぼい……。まあ、神を殺した者の視る世界は——如何なる賢者であれ、人間には違いなこの老いぼれとは違うのだろ。仕方がなくも思える。

そうだ。それは仕方のないこと。それならばそれで、違う方から<sup>おと</sup>陥落すだけだ。

「……それでは、いい案があります。魔王どの」

一瞬の内に目まぐるしく色んなことを思考しながらも、賢者は口を開いた。

いい案。

嘘ではなかった。ここで渋られ、留まられては困る。

要は餌だ、退屈を紛らわす玩具さえあればこの青年は馬鹿正直に飛び付いてくる——

「貴方を憎む勇者を、じっくりねつとりと嬲り殺すなんて如何でしょう？」

賢者が妖しく微笑みながら告げると、青年の顔は、無表情からゆっくりと色を変えた。

興味。

懷疑。

吟味。

悦楽。

狂気――

「よし、それだ」

そうして青年こと魔王は、尖った犬歯を見せてにやりと妖笑<sup>わら</sup>った。

こうして物語の幕は上がる。

闇をも上回る暗澹を、さながら悪魔の如く食い潰しながら。

↓ I a m S a t a n . A r e y o u a f r a i d o f m e

始めてしまいました、三つ目の連載。

勿論他二つの連載を放棄する気はありませんので、更新は一番遅くなると思います。

ですがちゃんと完結まで持つて行く気持ちはありますので、どうか温かく見守って下さいませ。

もし宜しければ、批評等をお願い致します。

誤字脱字、その他間違いの指摘は非常に助かります。

↑ I a m G o d . D o n ' t b e a f r a i d o f m e .

大陸一の大帝国アシリスでは、見事な満月の下、盛大な宴が開かれていた。

「勇者さまの誕生に、乾杯イー！」

「カンパァー！」

よく通る陽気な声に、カァンと、グラス同士が交わる高い音が響く。

それを合図とするように、おおーっという半ば雄叫びにも近い歓声が上がった。

万もの人が沸き立つ、最も騒がしい夜。

その騒ぎの中心にいるのは、皇帝であるアシリス十三世ではなく、まだあどけない幼さを残す、可憐な少女だった。

「は、はは……」

何処となく引き攣った苦笑いを浮かべながらも、華美に着飾った少女は右手のグラスを高く掲げる。

その動作にちやぶ、とグラスの中の赤い液体が揺れる。

そんな小さな仕草にさえ、集まった人々は歓呼の声を上げた。

「勇者——ねえ」

少女は頬で苦笑しながら、椅子からすっと立ち上がり、同時にしんと静まり返る人々を見回した。

視線が、少女の一点に集中する。少女の新緑の瞳が、摩訶不思議な魅力で人々を惹きつけているのだ。

少女は大衆を一通り見回して大きく息を吸うと、淡く流れる銀髪をなびやかにしならせ、凜と通る声を響かせる。

「我は勇者なり。我は――魔を打ち滅ぼす、光の眷属なり！」

勇者なり――。高い声が、轟くように何度も訝する。

少女が言い切るなり、静寂が、嵐のように歓喜を巻き起こした。拍手が咲き乱れ、囃し立てる声が沸き、欣幸に瞳を潤ませる者さえいる。

まるで誰もがその少女を待っていたかのように。大袈裟すぎるほどに、世界は、満ち足りていく。

その夜は三年に一度の、新たな勇者の誕生を祝う《聖夜祭<sup>イヴ</sup>》だった。

「新たな勇者、東華<sup>トウカ</sup>神名<sup>カンナ</sup>に乾杯ーっ！」

「疲れたわ、黎<sup>レイ</sup>」

「そうだろうね。お疲れ様」

少女は月光を反射して輝く銀色の髪をなびかせて、一人の青年の隣に腰掛けた。

煌びやかに飾られたドレス姿の少女を見て、黎と呼ばれた青年はくすりと温かい笑みを零す。

「それにしても、盛大に飾られたね」

「こんなに着飾ったの初めて。貴族の娘じゃあないんだから、もう裾を踏んで転んでしまうところ」

「女勇者なんて君が初めてだからね。帝国側も混乱したんじゃないかな」

そんな理由で、と少女は肩を竦めた。

確かに勇者を目指す戦士たちは、圧倒的に男が多い。元々、身体能力が平均的には男が優れているからという理由なのだろうが、別に女で勇者を目指す戦士がいない訳ではないというのに。

「そういう理由なんなら、わたし、魔物を滅ぼすより先に帝国を沈めてやるわ」

「こらこら。此処、帝国。口を慎みなさい」

少女は口を尖らせ、でも、と反論しかける。

けれど黎は穏やかな目でそれを制し、ふうと小さく溜息を零した。

「神名は強いだけに、礼儀がなくて困るよ。前、公爵さまの家に招かれた時も、とんだ無礼を起こしたじゃないか」

「あ、あの時は……だって……」

「言い訳は聞きません。この時代、強い者は上へ上へと上がっていく。——それが命取りにならないように、ね」

顔を赤くし、神名と呼ばれた少女はこくと素直に頷いた。

どうやら相当恥ずかしかったらしい。熟した林檎のように赤くなり、しゅうと音を立てて湯気さえ立てそうな勢いである。

けれど黎はそんな神名を気遣う様子もなく、さて、と明るく振った。

「勇者さまがこんなところにいちやあまずいんじゃないかい？ そろそろ戻った方がいいよ」

「……あんなに騒がしいのは、ちょっと……落ち着かないわ」

ぼそりと神名が呟くと、黎は声を立てて笑う。

「何、今に静かになるよ。——何せ、強大な魔力が此处に近付いている」

途中から口調をがらりと変え、低い声で告げると、黎はおもむろに椅子から立ち上がった。

神名も弾かれるように立ち上がり、辺りを見回す。

騒ぎの外側。誰もが宴に酔う中で、黎と神名の二人だけが、警戒心を強めた。

「そろそろ皇帝も気付くでしょうね、っと。けど遅いかな。どうやら相手は相当なやり手のようだよ」

危機感を感じさせない軽い声に、神名はこくりと頷いた。感じる。闇のオーラを。

けれどそれは微弱なもので、よくよく手繰れば強大な力であると

解るのに、それを隠すかのように覆った霧が皆の警戒を薄めている。脳のない、低俗な魔物ではない。身震いするほどの力の持ち主。

「聖夜祭の日に帝国が陥落するなんて冗談じゃあないからね。僕たちで片を付けようか、神名」

「ええ。初日から勇者の名に泥を塗るのは御免だわ」

闇が巢食う人混みを睨むように見据えて、神名は呟く。

上手く捕らえ仕留められれば出だしは順調、けれど、もしも逆ならば——ごくりと唾を呑んだ。

そうして、その闇の、到来を待つ。

——の、だが。

「皇帝っ、怪しい奴を捕まえました！」

そんな声が広間に響き、重いドアが音を立てて開こうとした。動揺。そして嫌疑。ざわめきが立つ。

神名も内心、動揺した。——捕まってる？

けれどそんな動揺を表には出すまいと、神名と黎はちゃっと構え、「皆さん下がって下さい！」と叫びながら最前列へ出た。

「さあて、どんな奴か……」

緊張と期待を半分ずつ含んだ黎の声が、隣で囁いた。

一方神名は警戒心を増し、勇者としての初仕事に胸を高鳴らせるばかり。

敵は衛兵が捕まえられるほどの——けれど衛兵が捕まえたとはいえ——もし此処まで侵入するためにわざと捕まったのだとしたら――

——だけど帝国もそこまで馬鹿じゃ——でも相手がそれ以上の使い手だったら？

ぐるぐると回る思考の中、豪華な仕立ての扉が完全に開き、その正体が姿を現した。

それは——

「うつ、うつうつ……何も縛ることはないじゃないですかあ……ひどいよ、ぐすっ」

……縛られて既に半泣き状態の、情けない男だった。

「……こ、こいつが……怪しい、奴？」

神名は呆けて、思わずこの男を捕まえたらしい衛兵に尋ねる。  
半泣き。大きな蒼い瞳が零れそうに潤んでいる。

「はあ。城門の前で何事か喚き散らしておりまして、皇帝にお会いしたいと……」

「馬鹿。いくら縛っているからとはいえ、此処まで不用心に連れてくる奴があるか」

「す、すみません！」

黎の柔らかかだがいくらか棘のある口調に、衛兵は慌てて頭を下げた。

その顔付きはまだ若い。多分雇われたばかりなのだろう。  
失敗は誰にでもあると、神名は黎を宥める。

「まあまあ黎、とりあえず今は許してあげて。それよりもこの男だけど——」

そう言つて神名は、縛られた男を見下ろした。  
沢山の人の視線に射竦められ、半泣きが嗚咽にグレードアップしている。

……情けない。そう思つて嘆息しかけたところで――

さつきまで満ちていた、闇のオーラが消えていることに気付いた。

「――変だね」

黎もそれに気付いたようで、小さく首を傾げる。

あそこまで膨大なオーラならば、隠そうと思つてもまず隠せるものではない。

魔法の知識が皆無に等しい一般市民になら隠し通せもするだろうが、こちらら一流の魔法使いなのだ。

隠せるはずが、ない。

「……勘違い、だったかしら？」

「いや、そんなことはないはずだ。あそこまで強大な魔力を間違えるはずがない」

「でも現にこの人には、闇のオーラなんて何も――人違い、ってこともあり得るんじゃない？」

「人違い……か」

黎はうつむと考え込む。

神名も首を捻った。今城の周辺を探つても、闇のオーラどころか反応一つないのだ。

先刻までは確かに感じられた波動が、綺麗さっぱり消え失せている。

城から離れたか？ それならば何故、聖夜祭の夜にわざわざこの城に近付いたのか――考えすぎだろうか。

「勇者どの」

ふいに、皇帝の傍に控えていた騎士団の副団長がつかつかと歩み寄ってきた。

神名は思考を一時中断し、彼の方に向き直る。

「その男は何者なのですか？ 見たところ、何の力もない青年のようには見えませんが」

元々厳つい顔を更に顰めて、彼は尋ねる。

神名は頷きながら、感じたことをそのまま彼に伝えた。

「ええ、わたしにもそう見えます。ですが、先程確かに城に向かってくる闇のオーラを感じました」

「闇のオーラ……？ ということは、その男が——」

「だと、思っただけですけど……」

ちらりと青年を見遣る。——完璧に泣いている。

演技、ということもあり得るだろうが、あまりにも情けない。情けなさすぎて思わず不憫になるほどに。

もしかしたら人違いで、この男はただちょっとおかしいだけで、他は無害な一般市民であつたら……。

神名は考える。そうだとしたら、ひどいことをしたと。

「……本人に尋問した方がいいわね。こつこの」

ぼつりと呟いて、神名は青年の前にしゃがみ込んだ。  
何にしる挙動不審の男だ。ただで返す訳にもいくまい。

「貴方——、一体何者なの？ 帝国のひと？」

神名が尋ねると、青年は少しだけ顔を上げた。  
意外にも整った顔立ちではあったが、泣き濡れた顔が、惜しくも弱そうな印象を与えている。

下がった眉、大きな蒼い瞳。泣いていなくても気弱で柔和な顔立ちであることは容易に想像できた。ますます、人違いなのではと思う。

「貴方は誰？ 何処のひとなの？」

神名はもう一度、同じ問いを繰り返した。  
すると青年は完全に顔を上げて、今度はぱつと笑顔を見せた。涙の粒が散る。

「あの、そのつ、勇者さま——だよねっ？」

「え？ ええ——まあ、うん」

突然微笑んだ青年に驚きながらも、神名は事実なので素直にこくりと頷いた。

やっぱり帝国のひとかな、と思う。

こんな浮かれた夜だ。

もしかして、新しい『勇者』を一目見たかったとか——

瞬間、ふいに、ぐらりと身体が傾く。

何、と思う暇もなく耳をすり抜けていく言葉に意識を絡め取られた。

「僕は魔王。君を——勇者さまを、殺しに来たんだ」

囁く声は優しく、蒼い瞳がやけに印象的な青年。  
騙された、と思ったが遅く。

既に神名は、青年に唇を奪われていた。

「は——？」

「ごめんね。怒らないでね？」

悪魔の如く。

それでも尚、蒼い瞳は優しい光を湛えていた。

そうして物語の幕は上がる。

闇をも上回る暗澹を、さながら神の如く塗り潰しながら？

↑ I a m G o d . D o n ' t b e a f r a i d o f m e .

序章終わり。

次から一章に入ります。

## 《誓いと契り》

愛憎。好悪。恋愛。愛恋。哀憐。

亡者たちが口遊ぶ。尊き誓いを果たさんと。

哀憐。憐憫。同情。感情。愛憎。

生者たちが謳歌する。乾いた舌で契らんと。

真つ赤な三日月が昇れば、夜明けはまだ遠い。

誓いは口付け／口付けは契り。

唇同士が触れ合えば、如何なる理由があろうと其は魂を分け合う  
ことに等しく。

故に誓いは呪いなり。契りは縛りなり。

魔王は誓った。

勇者を愛することを。

勇者は契った。

魔王に恋することを。

冥府の鬼籍に刻まれし、異端の証を十字に掲げ。

其と其は結ばれん。

神のもとに十字を切って、誓いと契りを捧げませう。

愛憎。好悪。恋愛。愛恋。哀憐。

亡者たちが口遊ぶ。遠き誓いを果たさんと。

哀憐。憐憫。同情。感情。愛憎。  
生者たちが謳歌する。渴いた喉で契らんと。――それから。そう  
して。

我 ↓ 汝を愛することを誓う。

魔王は云った。

愛するというのは ↑ どういうことかを。

それは ↓ ある種の／殺人衝動。

↓ V o w a n d V o w  
【E p i s o d e . i】T h e S t o r y o f S a t a n



### ↑ 三人の囚人

未だ日も昇らない、静謐を閉じ込めた黒と蒼の境界線。弧を描く雲の下で、帝国アシリスの朝は、早くも喧騒に満ちていた。

「一体どういうことだ！」

がんと響く怒号が空気を震わせ、剣呑な雰囲気更に重くなる。声を張り上げた男は、怒気と疲労の色を濃く含んだ顔をゆっくりと見せつけるように辺りを見回し、鋭い瞳を吊り上げた。

「聖夜祭の日に騒ぎを起こすことの重大さは、お前たちも分かっているはずだ。お前たちの仕事は何だ？ 騒ぎの抑制、つまりは速やかな鎮圧だ。損なえば――首が飛ぶことも覚悟して貰うぞ！」

ひっと、辺りから悲鳴のような細い声上がる。

男の周囲に整列した若い男たち。顔立ちは様々ではあるものの、その顔には皆一様に絶望の色を浮かべていた。

声の上がった辺りをじろりと睨みながら、男は更に声を張り上げた。

「勇者どのがいたからと、弛んでいたのではなからうな。己の立場を忘れたか、痴れ者どもが！」

叱咤の言葉が上がることに、周りの男たちは萎んでいく。

単に怒られたことに対してではなく、その首を切られることを恐れているのだらう。失業――若くも路頭に迷う自分の姿を想像すれば、肝も冷える。それどころか、この勢いでは牢にも放り込ま

れ兼ねなさそうだ。

男たちにとってはそれも、死刑宣告に等しい。  
どうかそれだけは。そんな願いも虚しく、厳つい顔の巨体がもう一度口を開き、またも叱咤の声——或いは、死刑宣告を告げようとする。

しかしそこで、男たちに見れば救世主ともいえる、細い人影がひらりと間に入ってきた。

「ちょっとお、天武<sup>ヨウム</sup>。さつきから聞いてれば、あんたいくら何でも言い過ぎじゃない？ 何を一般兵に八つ当たりしてんのかしら」

「……灰麗<sup>ハイリ</sup>団長」

灰麗と呼ばれた女は鳶色の目を細め、男を軽く睨んだ。

セミロングの髪は亜麻色で、人目を引く整った顔立ちが強気そうな印象をより一層強めている。服の上に羽織ったレザーアーマーは何故か派手なショッキングピンクで、だが、やはり何故か彼女にはよく似合っていた。

「新米なんだから、最初は失敗して当然。それに、今の時期にこれ以上貴重な戦力を減らすわけにもいかないでしょ」

「し……しかし、あれは立派な職務放棄だと私は判断する。罰は必要であろう、団長どの」

「あのねえ。あの男の力を見誤ったあんたに言われたくないと思うわよ、副団長さん」

「ぐ……」

先刻までは男たちに向かって好き勝手喚き散らしていた天武は、灰麗にそう指摘され言葉に詰まる。

それが、その指摘は凶星であるということを暗に示していた。

「ほらほら、分かったら姑の嫁いびりみたいなことはやめる。それよりも今は口止めとか鎮圧とか大変なんだから」

「う……り、了解」

天武はがつくりと肩を落とし、部屋を出ていく。

まるで先程までの巨体が小さく見えた。

灰麗はそれを見送ってふうと溜息を一つ零すと、男たちに向き直った。

「さて、こんなもんかしら。あんたたちは大丈夫？」

「あ……あ、はい！ すみませんっ、ありがとうございます団長！」

灰麗ににこりと微笑まれた男たちは、弾かれたように我に返り、口々にお礼を言いながら頭を下げる。

そんな頭下げなくてもいいからと言われながらも何度もぺこぺこ諂う男たちには、灰麗がまるで天使のようにも見えていた。

あのまま行けば確実に首が飛んでいたのだ。そう考えれば、何度も頭を下げてしまうのも当然のことと言える。が。

そんな彼らの気持ちを跳ね除けるように、灰麗は眉を吊り上げた。

「こーらっ、だからそんなへこへこしないの。それよりも自分の失敗に気付いたなら、今度は失敗しないようにしなさい！」

「は、はいっ」

「返事よし。ほら、じゃあもう行くわよ？ 忙しいんだからね」

灰麗はひらりと優雅に身体を反転させると、カツカツと部屋の外に向かって歩き始めた。

その後ろに、総勢八人の男が続く。皆先程とは違い、明るく高揚した顔で。

「灰麗団長……やっぱりすげえよなあ……」

「ああ……美人だし、強いし、あの副団長が手も足も出ないなんて」

憧れを含んだ声音で、囁く言葉。

灰麗は「んー？」と自分の噂をする部下たちを一瞥しながらも、それ以上は何も言わずただ歩き続ける。

それをよしとしてか、男の一人はまた囁いた。

「灰麗団長は格が違うよ。だって彼女、《神殺し》に唯一抗ったっていう《魔女》だっていう噂だぜ——」

最早崇敬の念にも近い感情を、男たちは目の前を歩く一人の女に向ける。

何の根拠もない流言をまことしやかに囁きながら、燃えるような熱い目で。

魔女は、そんな熱い視線をも軽やかに避けて、亜麻色の髪を揺らし堂々と歩いていった。

「うわああーん……うぐっ、うっ、うっ……」

聳え立つ煌びやかな城の下、地下に広がった暗く湿った地下牢では細いすすり泣きが絶えず響いている。

「怖いよー……暗いよー……じめじめしてる、し、気持ち悪い……  
うくっ、ひくっ」

その声の主は整った顔つきを泣き濡らし、牢の中でギュツと縮こまっていた。

もう長い間手入れされていない黒髪はボサボサで、見る者に柔和な印象を与える蒼い瞳は涙で潤み、恐怖に歪んでいる。

膝を抱えて座り込み、闇に怯えて牢の片隅で震える姿。誰もがその姿を情けなく思うだろう。

一体、何の罪を犯し地下牢に放り込まれたのか。彼のことを知らない者は皆、首を捻った。

「おい、新人リイ！ もうちょっと静かにしてくれ、煩くて眠れやしねえ」

「はっ、はいっ！ ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい……  
うくっ、ひえええ」

丁度向かいの牢の中に寝そべっていた男が、片目を開けて青年を一喝する。

——否、片目しか開けなかったのではない。反対の目、左目があるべき部分には無残に刻まれた傷がくつきりと残っていた。それを見て青年は、更に怯えて縮こまる。

「たっく、兄ちゃんよお……あんたみたいな優男が、何だってこん

な地下牢にいるんだあ？ 虫も殺せないような面しやがって……」  
「ひつ、ごめんさいつ」

怒られたわけでもないのに、青年は震え上がって必死に謝る。その様子に男は、いよいよ呆れた。

「さっきから謝ってばっかだな……おい、そっちの兄ちゃん。あんたも新入りだよな？」

「は、はあ」

「見たとこ、ここの兵士だと思うんだが……何で一般兵なんかが捕まってるんだ？ 暴動でも起こしたか？」

男が尋ねたのは、昨夜青年を捕まえた衛兵の男だった。

継ぎだらけの服は泥まみれで、表情にも、何処となく疲労の色が滲み出ている。

「それ……なんですけどねえ」

けれど衛兵の男は青年のように怯えることもなく、あつけらかと経緯を話し始めた。仕方ないと諦めたか、それとも、この状況を大して気にしてもしないのか。

「俺、新入りでして……ちょっと前から衛兵として雇ってもらってたんっすよ。そしたら昨日、この人が城の前に来て、皇帝に会いた」と

「ほお？ 皇帝にかい、この兄ちゃんが」

「はあ。ですから皇帝のところまで連れて行ったら、勇者さまのお仲間の方に怒られてしまいました」

衛兵の男がそこまで言うと、隻眼の男は唸り声にも似た大きな笑

い声を上げた。

豪快な笑い方は、地下牢全体を揺らすほどに大きく轟く。

そのあまりの勢いに、泣きじゃくっていた青年もぴたりと動きを止めた。

「やるねえ、兄ちゃん。皇帝のどこまで連れてったってか、こんな怪しい奴を」

「はあ……縛ったんで大丈夫かなーって思ったんすけど」

「縛ったくらいで不審者を城の中に入れるたあ、度胸あるなあ。それか単に馬鹿正直なだけか」

「あ、後者だと思います」

「わはは！ 兄ちゃん、気に入ったぜ」

衛兵の男ははあと頭を下げる。

隻眼の男は右目を面白そうに細めると、今度は青年の方に向き直った。

「それであんたは捕まっただんだな？ それにしても何で、皇帝に会おうとなんか思ったんだい」

「う……ぐす、えと、皇帝じゃなくて……僕は、勇者さまに会いたかったんですよ」

「勇者さまあ？ そういやさつきもそっちの兄ちゃんが勇者さまとか言ってたが……」

「あ、昨夜は聖夜祭だったんすよ。新しい勇者さまのお披露目の日で——って言ってもお偉いさん方だけっすけど」

「ほう？ 聖夜祭か……もうそんな時期かい。七年もこんなところにいると時間の感覚が全く分かんねえなあ」

やれやれ、と言って男はまた笑い声を上げる。

その豪快な笑い方はいつそ、気持ちよくもあった。

「それで、あんたは勇者さまに会って何をしたってんだ。まさか皇帝に会いたいつて言ったからってこんな地下牢に放り込まれるようなことはねえだろう」

「う……それで、《誓い》を……」

「誓いだあ？ どういうことでえ、兄ちゃん」

「あ——その人、勇者さまにキスしたんです」

いまいち要領を得ない青年の言葉に、隻眼の男は衛兵の男に説明を求めた。

返ってきたのは簡潔な答え。

隻眼の男は、再び爆笑した。

「キス？ キス！ 接吻か！ 最近の若者はやるねえ、兄ちゃん！  
ってことは何だ、今回の勇者さまは女だったってことか？」

「はあ。あ、美人でしたよ」

「わははははは！ もしかして一目惚れか、ええ？ 勇者さまにキスをかますなんて面白い奴だ、あんたも気に入ったぜ！」

「うう、だから《誓い》だって言ってるのに……」

ぐずぐずと泣きじゃくる青年の声は、調子のいい隻眼の男には聞こえていない。

衛兵の男も相変わらず、はあーとか曖昧な相槌を打っただけだ。

「おっと、そーいや自己紹介がまだだったな。俺は兵童<sup>ヒョウドウ</sup>、見ての通りただの囚人だ。兄ちゃんたちは何てんだい？」

隻眼の男——兵童は自分の胸を指し、にやりと笑った。  
それに続き、衛兵の男と青年が自分の名前を明かす。

「あ、俺甘楽<sup>カンラ</sup>って言います、新入りっス」  
「ぐす……ば、僕は神威<sup>カムイ</sup>って言います……」

兵童は二人の紹介に、ふいに笑みを消して顔を顰めた。笑みを消すと悪魔のように角張り厳つくなる顔に怯えながらも、神威は兵童をじっと見つめる。

「神威い？ 変わった名前だな。つか、それって《神殺し》さまと同じ名前じゃねえか」

「うう、だつて神殺しって僕ですもん」

「はあ？ わははは！ ますます面白い兄ちゃんだなあ、おい」

「冗談じゃないですよー、僕が魔王ですよー。僕が神神威、十五年前に封印された神殺しです」

「おいおい、神殺しさまは処刑されただろうが。生きてる訳がねえだろ」

神威の言葉を冗談として笑って流す兵童に、神威はまたううつと嘆く。

ただ甘楽だけは、神威をじっと凝視していた。疑り深く、探るような視線が神威を刺す。

もしかして——などと思っているのかもしれない。半信半疑、どころか本当ならちつとも信じてはいないだろうが。

「あのー、神威さん神威さん。ちょっといいっスか？」

「何でしょうか……ぐす。言っておきますけど、本当に僕が神殺しなんですよお」

「そうじゃなくて。その、神威さんって、何歳なんっスか？ 神威さんが——例えばですけど、もし本当に神殺しさまだって言うんなら、すごい年になってんじゃないスか」

そういえば、と神威が呟いて、指折り数え始めた。ひい、ふう、  
みい……その数は、既に外見年齢の十代半ばを超えている。

「ええええええええええええ！？」

「んー、神を殺した時はそれくらいだったかな」

「じよ、冗談だなんて……嘘をつく理由なんてないし、僕、本当のことしか言っていないけど……」

その異様な光景に神威は怯えながらも、小さな声でそう告げた。けれど兵童と甘樂には全く信じられなかった。現実味も信憑性も皆無で、そもそも話自体が胡散臭い。

「ありえる訳ねえだろ！ 神殺しさまは処刑されたんだし、こんな虫も殺せないような顔した兄ちゃんが――」

「本当ですってばあ。ううう……、やっぱり信じてもらえないのかなあ…… そりゃあ、僕よりはマーくんの方が魔王っぽいけどさあ…… マーくんは面倒だって言うて出てこないし…… みんなしてひどいよお……」

ぶつぶつと鬱モードに突入する神威を華麗に無視し、兵童と甘樂はわいわい騒ぎ合う。

周囲の囚人たちも何となく話は聞いていたが、この三人ほど元気な囚人は他におらず三人——正確には二人——だけがわあわあ喚いていた。

「つか兄ちゃんよ！ その話が本当だとしたらよお、三十過ぎでその若い女勇者さまにキスって……明らかに幼女趣味じゃねえか！」

「ロリ……っ!？」

「神威さん！ そういう趣味だったんっすか!？」

「違うよおおおお！ 僕は健全だ、潔白だあああっ」

わあーっと呼ぶ神威。

けれど今度はやはり言い逃れは出来なかった。三十過ぎというのは本人が告げたことで、勇者にキスしたのもまた神威だ。

ロリコン決定。二人の中で、神威にロリコンのレッテルが貼られた。

「ていうか！ 本当に違うんです、僕はマーくんがそうやって言うたから——」

「マーくんって誰っすか」

「ま、マーくんは……えと……その、もう一人の僕で」

「もう一人の……？ 今度は二重人格疑惑かい、兄ちゃん。でもそれって結局自分だろ？ はいロリコン決定」

「ロリコンなんてはしたないです神威さん!」

「だから違うんだってばあああああ」

結局誤解は解けなかった。神威はまた頭を抱えて、うわああと泣き出す。

それを見ても尚、兵童はがははと笑っていた。

甘樂もやんやんやと囃し立てる。本来ならば沈痛で剣呑な空気が漂う沈黙の地下牢は、今や喧騒の最中と化していた。

「ロリコン！ ロリコン！」

「変態っスよ神威さん！」

「違っつて言ってるのにいいいい」

地下牢の見張りたちが騒ぎに気付くまで、騒ぎは続いた。

「今日はやけに騒がしいな……」

そんな空騒ぎの中でやつれた目をした囚人の一人が呟いたが、皆、同じ気持ちだったに違いない。

↑ 鳥籠の姫君

「使えんな」

高い空を見上げて、男は吐き捨てた。

憎々しげに細めた目は鋭く、翡翠の瞳には仄暗い光が灯っている。まるでこの世の全てを憎むかのような——そんな目だった。

「騎士団に処理させるなど生温すぎる。箝口令など、馬鹿げているとは思わんか？」

グレーの背広を軽く羽織り、背後に迫っていた影に吐き捨てるように投げかける。

ふわと舞い上がる息に、その向こうの視界が霞んで見えた。突然話し掛けられた背後の影は、その言葉に、びくりと肩を震わせる。

「……気付いていたんだね。相変わらず、鋭い人だ」  
「ふん」

影はまだ若く、精悍な顔つきをひどく歪めて男に笑い掛けた。

皇帝アシリス十三世。彼は人々にそう呼ばれる男だ。五年前——先王の没後、弱冠十八歳にして一国の主の座につき、様々な政策により民から絶大な信頼を寄せられる若き君主。

帝国の中では絶対権力を持つ彼にも、老いた男は恨めしげな視線を向ける。或いは、世界で一番偉いかもしれない皇帝にさえ。

「それにしても酷いな。箝口令を敷いた本人の前でそんなことを言うなんてね、気付いていたならやめて欲しかったなあ」

「いいだろう。別に盗み聞きをしている奴がいる訳でもあるまい？  
皇帝どのよ」

「まあね。——それよりも、用は何だい？ こんなところまで呼び出しておいて無用ということはないだろう、東<sup>アス</sup>？」

東と呼ばれた男は鋭い瞳を更に細め、不機嫌そうに口を結ぶ。

けれどそれが彼の元来の顔であることを知っている皇帝は、特に気分を害した様子もなくただふわりと微笑んだ。

「言うまでもない——か？ だろうね。勇者のことだろう」

「……ついでに言えば、答えるまでもないな」

穏やかな笑みすら嫌うかのように顔を背ける東。けれど皇帝はそれを見て面白そうに笑う。

弱冠二十三歳の青年は、ひどく老獪な表情を浮かべて東の隣に並んだ。

「そういえば、女勇者に反対していたのも東だったね」

「当然だ。女ではどう頑張っても男には劣る」

「それじゃ一昔前の考えだよ、東。男女平等は名だけかい？」

「本当の平等を目指したいならば、差異くらい明確にさせるべきだ。私は、女では勇者に向いていないと言っているのだ」

お互い棘の含まれた言葉にも動じることなく、二人は並んで淡々と言い合いを続ける。

白髪混じりの東よりも皇帝の背の方が高く、柔らかな顔立ちながらも威圧感がある。けれど東は皇帝の方を見ることもなく、用意されたような言葉を並べ続けた。

「箝口令で人の口が塞げるのなら、安いものだ。噂は何処からでも

漏れ出る」

「まあね。それじゃあ、元老院議長さん。そこまで言うのなら、貴方の御意見を聞かせて欲しいものです」

「勇者は早めに始末するべきだ」

「ほう？」

あっさりと返ってきた答えに、皇帝は興味深そうに――或いは面白そうに、目を細める。

勇者の始末。

予想していた答えから大きくずれた東の考えに、皇帝は少なからず興味があった。無言で先を促すと、東はしわがれた声で詳細を語る。

「今度の勇者は女で――しかも、小娘。あれでは大した戦力にもなりはしないだろう。今時勇者など古いのだ、あれは魔物討伐のお飾りに過ぎん」

「お飾り、か。面白いことを言うね、東」

「事実であろう。今は馬鹿正直に力でぶつかる時代ではない、戦略が物を言うのだ」

「けれど、力が必要だろうか？」

「あれ程軟弱な小娘が何の力になるうか」

ふんと鼻を鳴らし、東はそう呟く。吐き捨てるような物の言い方は変わらず、これにはさすがの皇帝も少しだけ困った顔をした。

「まあ、元老院の皆で話し合ってみてよ。正直勇者の処理はそちらさんの方が慣れてるでしょう」

ひらりと手を上げ、皇帝は老いた男に背中を向ける。

東は顔を上げることもなく、ただじつと目を閉じて足音が遠ざか

るのを待っていた。

皇帝もそれを気にすることはない。彼の頭には既に業務のことしかなく、東を肩越しに振り返ることもせず歩いていく。

そしてただ一人、老いた男だけが取り残された。

押し殺したような沈黙が支配する中で。

泡のように沸々と浮かび上がる、憎悪も憤怒もじっと押し殺して

——東は、その世界に立っていた。

神名は言い聞かせる。自分自身に、きつく、強く。

（駄目、まだ駄目よ——我慢するの）

唇をぐつと噛み、顔は真っ青なまま。

淡いパールピンクの袖から伸びた白い腕は、震えを抑えるように反対の手でぐつと強く握られている。

鍛えている割にはひどく細い四肢が、煌びやかでも派手ではない

フォーマルドレスからちらりと覗いた。何だかいつもより蒼白いと、神名は何故だか自嘲気味に思う。

（もう少し我慢すれば、必ず来るから……）

それまで、と小さく呟く。

震える肩を押さえ、蒼い唇を噛み締め、神名はじつと壁の一点を見つめていた。

何があるというわけではない。神名は、ただ強く念じるように変わり映えのしない壁を見据えていた。

奇妙なほどの沈黙と静寂が鬨ぎ合う、城の一角で。

一心に信じ続ける。信じ続けた。彼女は、その到来を――

（絶対、魔王さまが助けしてくれるんだから！）

一方、神名が信じていた《魔王さま》は。

「ぐす、ぐすっ……」

まだ泣いていた。

「神威さん、そろそろ泣き止んで下さいよ。周りの目がさつきから痛いんです」

「それは甘樂さんにだって原因があるでしょう……？ 僕だって、泣きたくて泣いてるわけじゃ」

神威はぼろぼろと大粒の涙を流しながら、甘樂をじっと睨む。

けれど元々柔和な顔立ちだということもあり、実際その迫力は大したものではない。

「おい兄ちゃんたち、そこで戯れてないでそろそろこっちの話も聞いてくんねえか？ 仲良いのは分かるけどよ」

しかも兵童に『戯れ』と一蹴され、神威は拗ねたように牢の隅っこで丸くなってしまった。どうやら、本人は至って本気だったらしい。

けれどそんな神威に既に慣れてしまった二人は、拗ねる神威を気にもしない。甘樂などは鉄格子に指を絡めると、兵童の方に身を乗り出した。

「どうしたんスカ？ 兵童さん。何かありましたか」

「何かありましたかじゃねえだろ。いつまでもこんな暗いとこ居座ってられるか？ 帝国の地下牢は、捕まったら最後生きては出られねえって話だぜ」

「……え」

「知らなかったのか、兄ちゃん」

思わず反応した神威に、兵童はからかうように笑ってみせる。だが、それは笑いごとではなかった。

帝国の地下牢——つまり此处——捕まったら最後——生きては出

られない――

神威の中で一瞬のうちに絶望的観測がなされる。臆病な性格に拍車もとい追い討ちをかけるように、地下には重い沈黙が降りた。

「……こ、こんなところで死ぬなんて嫌だよ……」

「俺だつて嫌つスよ」

「馬鹿言え、俺だつて嫌でえ。もう七年もこんな陰気臭いところに閉じ込められてんだ」

「……え、兵童さん、どうして出なかつたんですか……？」

「出られねえからに決まつてんだろつが」

やれやれと肩を竦める兵童に、神威は困つたように顔を歪める。  
更なる絶望的観測が、神威の脳裏を掠めた。出られない――此処で死ぬ――マーくんに怒られる！

「そ、そんなの嫌だよお！ 絶対出てやる！」

「おー、燃えてるつスね」

くわあと奇声を上げて葛藤する神威に、のんびりと言い放つ甘樂。  
その理由は怒られるという単純な理由からなのだが――神威はすっかりやる気を出して甘樂を睨み、強気に告げた。

「じゃあ甘樂さん！ 出ましよう！」

「……どうやってつスか？」

「それは――」

神威は一瞬押し黙る。

「――牢屋を壊すとか」

「壊せるなら苦労してねえだろ、兄ちゃん。此処は極悪人を閉じ込

めておく牢だぜ？ そんな簡単に壊れるようにはなつてねえつての」

「う……だ、だったら、……頑張るとか」

「具体的にお願いしますよ神威さん」

「うあ……だつて……」

冷めた二人の射竦められ、神威は再び小さくなった。

——神威をじっと見る二人はそんな彼を面白いと認識していたが、今はそれどころの話ではない。

「まあ、そんな心配すんなつて。言われねえでも、七年のうちに方法くらい考えてあるからよ」

「え、でも、そしたら何で兵童さんは——」

「俺一人でこんなところから出てもまた捕まるだけだからな。でもな」

兵童はにかりと笑う。

それは超のつく悪党とは思えない、人の好い笑みだった。

神威は兵童を見据え、じっと黙って次の言葉を待つ。

「そうだな——兄ちゃん、もしあんたがほら吹きなんかじゃあなくて、例えば本物の《神殺しさま》だったとしたならよお」

にかりと明るい笑みが、にやりと妖しく歪む。

閉ざされた片目が、ウインクのようにも見え。

「賭けてみる価値が、あるんじゃないのか？」

それは兵童にとって精一杯の、神威への信頼の言葉であつたに違いない。

神威はそんな彼の言葉を、真摯に受け止めた。

「そう——だね」

神威がこくりと項垂れ同意する。そして彼が再び顔を上げれば、その蒼い瞳には、先程とは打って変わった強い意志の光が宿っていた。

海のように深く、空のように澄んだ瞳。

全てを受け入れる優しい光は、凜として兵童を見据える。

「じゃあ……任せて下さい。僕が貴方たちを、責任を持って逃がしてみせますから」

そしてここに——たった三人きりの、脱獄同盟が結成された。

それをこっそりと見守る影があったのは、また別の話で——。

未だ三人の知ることのない、もう一つの話。

↓ 或る魔術師の提案

不気味な沈黙に満ちた、薄暗い地下。

湿った床を打つ鋏の音だけが壁に反響し、空恐ろしいほどに気味が悪い。

（つたく、此处はいつ来ても気味悪イんだよ……）

地下牢の見回りに来た看守の男は、髪をがしと掻き回しながら地下へと続く階段を下りていく。

胸中とは裏腹にその足取りは慎重で、同時に何かを恐れているようでもあった。長い螺旋階段の下は闇が支配していて、目が慣れるまではよく目を凝らしてみないと壁と通路の判断さえもつかない。

——けれど看守が慎重になる理由はそれだけではなく、実際、彼は『それら』を恐れていたのだ。

無理に前向きに考えてはみるが、地下牢は多くの極悪人を捕らえている場所だ。牢の中とはいえ、恐ろしいものは恐ろしい。

（まあ、石拳<sup>じゃんけん</sup>で負けちまったものは仕方ないからな……さつさと終わらせて切り上げるか）

看守の男は先程交わした同僚とのやり取りを思い出し、密かに溜息をつく。

吐息は空気に溶け、闇と同化してしまう。看守は極力考えないようにと首を振りながら、螺旋階段の最後の段を踏んだ。

——ざわめき。

ふと、看守は顔を上げる。

彼は地下牢の中の雰囲気に、何とも形容しがたい違和感を覚えていた。地下牢が、普段よりも幾らか騒がしいのだ。いつもは諦観し、ただ沈痛な静寂に満ちた地下が、今はどよめきのような喧騒に埋め尽くされている。

（そういえば新入りがいたな、詳しくは知らないが……。やれやれ、一体今度はどんな悪党が来たってんだ……。？）

看守は肩を竦め、細く吐息を漏らした。

新入りは多分聖夜祭絡みの事件ことだろう、と看守の男は目星を付けていた。ここ最近大きな騒ぎはなかったはずだし、もしも表沙汰になっていない事件ならば、聖夜祭絡みのことくらいしかありえないしかし、あんな神聖な祭りの時に——しかも勇者が滞在しているこの時期に事件を起こそうなんて、犯人はまずキチガイでしかないだろう。また厄介な奴が来たものと、看守は思う。

壁越しに感じる騒ぎの理由をその新入りのせいだと勝手に決めつけ、彼は階段と地下牢を隔てる分厚い扉に手を掛けた。

震える指は冷やりと漂う寒気のせいにし、幾重にも鎖された鍵穴に錆びた鍵を差し込んで。

扉は震える音を立てて、ゆっくりと開いた。

「——あれ」

ぼつりと落とされる声と同時に、視界に黒が弾ける。

「もしかして——……、マモリ眞守さん、じゃないっすか？」

男が地下牢を見回しもしない内に、扉の先から聞き慣れた声が飛んできた。

未だ暗闇に慣れてない目をぱちくりと瞬かせながら、眞守と呼ば

れた看守は声のした方を見る。

広がる闇。声の主の姿は、影もつかめないが。

「その声……甘楽、か？」

眞守はこの場にいるはずのない、新入りの衛兵の名を呼んだ。

聞き間違いかとも思ったが、自分のことをそう呼ぶ奴は他にはそういない。

甘楽だ。——看守はそう、確信した。

それでは何故、こいつがこんなところにいるのか。首を傾げたまま眞守は一步踏み出し、小さくざわめく地下牢の中に声を放った。

「お前、何でこんなところに——」

けれど、その先の言葉は続かない。時が止まったような空白がよぎる。

「……………お前、何でこんなところに」

「二回も言わなくてもいいじゃないっスか」

闇に慣れてきた目が、見慣れた後輩の姿を捉える。

眞守が見た信じられない光景は、真面目で正直な後輩が牢の中に座り込んでいるものだった。

その口元には笑みすら浮かんでいる。一瞬、眞守は何かのジョークなのではとすら思ったほどだ。

「ちょっとやらかしまして、こんなところに捕まっちゃったんスよ」  
「おま、だけど地下牢って……何をやらかしたんだよ？ 聞いてねえぞ」

眞守は非難するように声を上げる。けれど後輩——甘楽の口元にはただ笑みが浮かぶだけで、けれどそれが彼の素の顔であると知っている眞守は、はあとわざとらしく溜息を落とした。

「ったくよ……勇者絡みだろ、お前。若いからって後先考えずに行動するなっつったろ」

「鋭いっスね眞守さん……。まあ、そんな気にしないで下さい」

誰だって可愛がつていた後輩が理由も分からず牢に入れられていたら気になるだろう。

眞守はそう言いたかったが、今はあくまでも勤務中。相手がただの可愛い後輩であるならまだしも、それが地下牢の『キチガイ』ならば余計、雑談を交わしている場合ではない。

「……とにかくお前は捕まったのな？ 兎にも角にもねーけどよ。——で、それで？ 隣で騒いでるのは何だ」

がしがしと頭を掻きながら、眞守は甘楽を睨みつけるように見た。髪をぐしゃぐしゃに掻き回すのは眞守さんの困った時の癖ですよと前に甘楽に言われたことを思い出しながら、眞守は口をへの字に曲げる。

甘楽の隣に位置する牢屋に閉じ込められているのは、——多分まだ若い青年であるう人影だった。

多分というのはその青年らしき人物が蹲って呻いているからで、若い青年だと予想したのは呻いているというよりはすすり泣きに近い声がまだ若い男のものだったからで、ついこの間見回りに来た時にはいなかったことからやはりそいつが新入りなのだろうと眞守は推測する。

しかしどうしてだろう、と眞守は首を捻った。地下牢に入れられ

るのは、犯罪者の中でも極悪に分類される悪党だ。だがその青年の影は蹲って怯えるように泣き続け、まるで極悪人とは思えない。

何かの間違いか——或いは、やはり聖夜祭絡みの『キチガイ』か  
と思いながら、眞守は隣の牢へと近付く。

「あー……眞守さん。可愛い後輩の頼み、一つだけ聞いてくれませんかねえ」

ばつが悪そうに呟く声。

先程の質問に答えないといいいい自分で『可愛い後輩』などと吹くところといい、この後輩には本当に可愛げがない。

「何が可愛い後輩だ、自分で言いやがって。——ったく、頼みって何だよ？ 手短に話せ。それから、お前の話し相手になるのはお断りだぞ」

やれやれと思いながらも、眞守は目を合わせずに答えた。

蹲る青年の牢の前にしゃがみ込みながら、聴覚だけは甘楽の方によく澄まし。

「あの……そいつのことなんすけど」

「そいつって……こいつか？」

眞守がただただ泣きじやくる青年を指差すと、甘楽ははあとイエスともノーともつかない答えを返した。

相変わらずはつきりしない答えだ、と思いながら眞守は尋ねる。

「で、こいつがどうしたって？」

「診てやって欲しいんです」

予期せぬ言葉に、眞守は思わず甘楽の顔を凝視した。

けれど、眞守が何かと聞き返す前に、甘楽は後の言葉を続ける。

「そいつ、さつきから具合悪いみたいで。悪い奴じゃないんでちょっと……心配なんスよ」

——犯罪者に向かって何が『悪い奴じゃない』だ。

眞守の頬には苦笑が上ってきたが、それを何とか噛み殺して眞守は視線を戻す。

目に入るのは、依然として弱々しい泣き声を上げている青年。

こいつの所為でざわめいていたのか、とようやく眞守はようやく合点がいった。極悪人であるはずの地下牢在住者がこんな風に泣いていたら、それは騒ぎにもなるだろう。

それにしても具合が悪いだけで泣く男なんてなあ、そう思いながらまた眞守は頭を掻く。

確かに、これはこれでキチガイとは言えなくもないだろうが――

「おい、あんた」

がしやりと牢に手を掛けて、眞守は中の青年へと呼び掛ける。

哀咽の声は段々と弱まり、たまにしゃくり上げる声が響くくらいに静まった。

けれどその肩はまだ震え、顔を上げる様子もない。

「大丈夫か？」

眞守がもう一度声を掛けると、びくりと青年の方が震えた。

そして弱々しい声がぐぐもったまま、小さく眞守の鼓膜を震わせ

る。

「……あの……う、ぐす」

「悪いが俺は医者じゃないし、極悪人のあんたを診る義務も持ち合わせてない。たとえあんたが死にそうだって言ってもな」

鉄格子に手を掛けたまま眞守がそう言い放つと、青年は一度だけ身体をびくりと震わせてしんと動かなくなった。

その様子につい慌ててしまうが、平常心だと自分に言い聞かせて眞守はもう一步前へと出た。

捕らわれし者と捕らえし者、牢屋の境目ぎりぎりまで。

思えば眞守は、油断していたのだ。

相手をただの『キチガイ』と思い込み、所詮鉄格子を隔てた向こうと高を括り、その悪党のあまりの情けなさに微かな憐憫さえ覚える。それが如何に危険なことが、彼も知らなかったわけではない。だが――。

しゃがみ込んだままで彼はじつと青年を見下ろしていた。すると、ぴくりともしなかった身体が、何の前触れもなく跳ね上がる。

「――何だ、冷たいな」

薄暗い闇の中に響き渡る声と、唐突な衝撃。

それは先程の弱々しい声と同じ低さではあったが、まるで同じものとは思えない声音で、眞守の心臓を凍りつかせた。

ぞくり。彼の全身を駆け巡った感覚は、そんな表現が正に相応しいだろう。

「――なっ!？」

ひやりと背筋に寒いものを感じたかと思えば、引っ張られるような感覚に腰が浮く。

けれど一瞬後にはそれも重力に倣い元の軌道へと返り、眞守は冷たい地に尻餅をついた。恐怖を覚える暇もない一瞬ののち。

そこでようやく眞守は、先程の引っ張られるような感覚の正体に気付いた。

「な……あ、鍵が!？」

慌てた頃にはもう遅く。

先刻まで泣きじゃくっていたはずの青年は勝ち誇るように眞守を見下ろし、得意気に指先で振り回している輪は、眞守が腰につけていたはずの地下牢の鍵だった。

赤い。赤すぎるほどに紅い目に射竦められ、眞守はびくりと後ろへ下がる。全部演技だったのか——そう思った瞬間にある事柄が浮かんできて、眞守は甘樂の方へと思わず目を向けた。

「お前……まさか」

「すいませんした、眞守さん。だけど——魔王が行くなら、俺も行かなきゃならないんで」

糸のように細い目は相変わらず笑っていて、眞守を馬鹿にしているようにも見える。

けれどそれを叱りつけることも騙したのかと喚き立てることもせず、眞守はただ迫り来る恐怖に息を呑んだ。

「悪いな、眞守……つつたか、お前。ま、名前なんてどうでもいいさ」

紅い目を細めて、黒髪の青年は言う。こんな状況でなければ、気

が触れているとさえ思っただろうことを。

「俺は忙しいんだ、こんな戯れに付き合ってる暇はない。——ああ、因みにこれでお前が首になっても俺の責任じゃあないぞ、いいか？」

「え……あ……ひっ」

「そう怯えるなよ。お前は一応恩人なんだ、まだ殺しやしないさ」

つかつかと牢の中から歩み寄ってくる影に怯え、眞守は悲鳴のようなか細い声を上げた。

先程と同じ人物とは思えない、屹然とした態度。眞守は返す言葉もなく、震える頭を持ち上げ魔性の紅い目を見上げる。

青年は自分を閉じ込めていた狭い檻の中から外の世界へと歩み出すと、隣の牢、向かいの牢と鍵を外し始めた。けれどそれを止める勇気や気力さえ眞守にはもうない。

「まあ、せいぜい頑張って次の仕事でも探すんだな。今度は何処か平和な町で、パン職人にでもなっていればいい」

そして吐き捨てるように青年は言い——二人の男とともに、光に満ちた階上へと姿を消した。

「おい、兄ちゃん。一ついいか」

「うん？ 何だ、誰だお前」

「何で俺の牢を先に開けなかった？」

「どうでもいい不満だな。そして俺の質問に答えていない。だから却下」

「まあまあ、神威さんも兵童さんもそんな見るからに対立しないで下さいよー」

一方、闇の世界から一転、光の世界へと這い上がった三人はさながら迷宮のように続いていく廊下を走りながら本気とも冗談ともつかない会話を淡々と続けていた。

「中年より若い方がいいってか？ あ？ だから甘楽の兄ちゃんを先に助けたのかい」

「どういう思考だ。別に順番に差異などない、助けてもらったんだから有難く思え貴様」

「だから、二人とも仲良くして下さいよー」

所謂脱獄犯である三人だが、捕まる可能性など考えていないのか焦っている様子は全くない。

しかも三人の足は一樣に城の外へと一直線に向き、見つからないように静かに移動することなどやはり考えてもいないようだ。そのためにわざわざ遠回りをする必要さえ、三人の頭にはなかった。

「やれやれ、強情な兄ちゃんだ。しっかし本当に二重人格とはねえ……さすがに目の色が変わった時は驚いたぜ？ ありゃ手品か詐欺だと思っただな」

「馬鹿を言つな、疑つてたのかこのジジイめ。俺はともかく、あいつは嘘なんてあまりつかないぞ」

「……あまりつてところが微妙だろうがよ。それと俺はジジイじゃないぞ、そんなに年は食つてない」

「しかもともかくつて。何気に自分は嘘をつくと公言してるようなもんスよ」

「そりゃあつくからな」

「うわあ、この人言っちゃったよ」

「んー、やっぱりさっきの兄ちゃんとは違うよな——」

雑談を交わしながら駆けて行く先。

会話の内容は若干物騒ではあるが割と平和な雰囲気で雑談を続けていた三人だった——

広い城とはいえど人も多い。誰にも出会わずに入口まで辿り着けるはずもなく、

「——おい！ お前たち何者だつ、止まれ！」

突如として兵士たちの姿が廊下の突き当たりに浮かんだ。

見回りのためであるう簡単な武装を施した装備、琢磨された素早い反応と構え。帝国兵というだけありかなり鍛えられているようで、俊敏な動きで三人の方へと向かつてくる。

「邪魔だ」

けれど、三人からは焦る様子も慌てる仕草も驚く言葉一つさえ出ない。

ただ紅い目を光らせた神威がそう呟くと、ふっと残像を残して神威の身体が消えた。

そして神威は次の瞬間には宙を舞い、城内の見回りを任されている

た男の顔面にその長い足が直撃する。

「——ッ！」

悲鳴も上げられず、兵士の一人は床へと崩れ落ちた。

神威はすとりと着地するなりしなやかにその足を回し、驚愕に声も上げられないもう一人の兵士の頭を薙ぎ払う。もがくような兵士の微弱な抵抗をもともせず、長い足は真横へと振り切られた。

そして薙ぎ払われたそれは鈍い音を立て先程の男と同じように崩れ、床に赤黒い染みを広げた。

「……運動にもならんな」

「格好つけやがって」

唾を吐きつける神威に、兵童がからかうように声を上げる。

けれど神威は当初のようにあわあわと慌てることも泣き出すこともなく、紅い目で兵童をぎろりと睨んだだけだった。

「——まあ、あんなのがさっきの兄ちゃんな訳はないわな。二重人格つてのも若干無理があると思うがね、俺は」

「兵童さんですか？ 偶然っスね、俺も今そう思ってた」

「偶然つつつか普通そう思うだろありゃ」

遠くでしみじみと交わされる会話にも、神威は興味を持った様子もない。

ただ「行くぞ」と呟くと、先に歩き出した。

「さっきの兄ちゃんはおつと女々しくて弱かったよな」

「可愛かったっスよね」

「その言い方はどうかと思うけどな。別人だろ別人」

「むしろ種族からして違うんじゃないスカ？　人間ですらないでしょうあれ」

遠くでしみじみと交わされる会話にも、神威は興味を持った様子もない。

ただ淡々と二人の前を歩いていた。

「ていうか乱暴だな。神殺しっていうよりただの人殺しじゃねえのか」

「言えてますね。神殺しって言うって伝説っぽいですけど人殺しって言うってただの犯罪者ですよね兵童さん」

「そうだな——」

「そうですね——」

遠くでしみじみと交わされる会話にも、神威は――

「ええい何だお前ら！　さっきから聞いてれば散々人を侮辱しやがって……若い女じゃないから許さん！　殺すぞ！？」

「若い女だったら許すのかい、兄ちゃん」

「勇者さまじゃなくてもよかったってことですか神威さん。最低つスよそんなの。神威さんは勇者さま一筋に決めたんでしょ？」

「誰が決めたか！」

激した反応を示していた。

甘楽と兵童はこれは案外からかい甲斐があるものだと思いきや、神威は二人に華麗な飛び蹴りを食らわす。――勿論加減は十分にしており、三人にとってはじゃれ合いのようなものだったが。

それは傍から見れば帝国兵士二人が床に倒れ伏せている以外は割と平和な光景ではあったが、そんなねじ伏せた安定が長く続くはずもなく。

「——ようやく見つけたよ」

ぎゃあぎゃああと喚いている三人の間に、凜とした若い声が割って入った。

三人は全ての動きをぴたりと止め、視線を徐々に前方へと滑らせていく。

「……誰だ、お前」

ざわつくような低い声を轟かせ、神威は尋ねた。

長い廊下の先に立っていたのは、端正な顔立ちをした青年。くすみのない鮮やかな金髪と帝国特有の澄んだ碧眼を併せ持つ——神威と甘楽にとっては、いつしか見覚えのある顔だった。

「失礼。自己紹介が遅れたね」

腰に差した剣を主張するかのように左足を踏み出し、青年は小さく笑みを浮かべる。

「僕は樋宮黎<sup>ヒノミヤレイ</sup>。勇者一行の《魔術師》<sup>ウィザード</sup>——と言えば、何となく分かって頂けるかな」

柔和な笑みであるにも拘らず、威厳を感じさせる荘厳な態度。戦いを知らない一般市民ならば、見ただけで竦み上がってしまいそうな鋭い眼光が三人を射抜く。

「《魔術師》<sup>ウィザード</sup>……」

けれど神威はそんなものは一切ないかのように、じっと相手を凝

視した。

警戒するように、或いは推し量るように。あくまでも好意的とは言えない視線が、黎と名乗った青年を吟味するように睨め回す。

魔術師<sup>ウィザード</sup>。それは勇者一行の一員に与えられる《役》だ。その名の通り魔法を駆使し魔物を討伐する役割であり、ある意味では勇者一行の要とも言える。

それがこんな男ほどのものとなれば尚更だ。一体何が目的か——神威は一層目を細めた。

「……そうだな。さつきは世話になったな？」

けれどそれを怒りの表情に変えることなく、神威は口元を笑みの形に作り上げる。

先程のことを根に持っているような態度ではなく、むしろ面白がっているような口調だ。

それに続くように甘楽も、おどけたように肩を竦めた。

「やだなあ。この人にはさつき怒られたばっかなんスよ、神威さん何とかして下さい」

「それはてめえの責任だろうが。俺を城の中まで入れたてめえが悪いんだよばーか」

「……俺が入れなかったらどうするつもりだったんスカ、神威さん」

「んー、お前を殺して無理矢理にでも入ってたな」

「うわあ軽い口調でそんなこと言わないで欲しいっス……」

勇者一行の一員——つまり宿敵であるはずの男を前にしても、神威は軽口を叩き続ける。甘楽も大して堪えた様子はなく、一頻りの会話を終えると、黎の方へと目を戻した。

不気味な沈黙。平穏とも不穏ともつかない微妙な空気が、二対の間に流れた。

「……それで？ 何の用だい、魔術師の兄ちゃん。——まあ、言わなくても大体、予想はつくがな」

そんな微妙な沈黙を破り、兵童が一步前へと出る。

それはつまり、『自分たちを捕まえに来た』と言いたいのだろうと指摘するような、挑発的な態度で。

神威と甘楽もそうだろうと信じ込み、疑わなかった。

そんな三人の思いを知ってか知らずか、黎は兵童の方へと目を向けにこりと笑った。

「それは話が早い。まあ、端的に言っと——」

澄んだ碧眼が僅かに歪み、三人を順番に見回す。そして。

「当代魔物討伐隊隊長《勇者》——つまり神名を、助けて欲しいんだ」

——その唇から紡ぎ出された言葉は、三人にとって全く予想外のものだった。

↓  
**或る魔術師の提案（後書き）**

相変わらずグダグダだなあ、と読み返して恥ずかしくなるこの頃。

次回は12月中にもう一度更新出来るかどうか。

ちなみに次回は【↓ 責任取って下さい！】です。ようやく勇者の真骨頂。

それまでお付き合い頂ければ、幸いです。

↓ 責任取って下さい！

冬特有のものであるすじ状の雲が、大空の真ん中を横切っていく。頑丈に閉ざされた窓ガラスにそつと手を添えながら、ほう、と少女は息をついた。

少女の名は東華神名。

当代魔物討伐隊隊長——即ち《勇者》に任命された、弱冠十六歳の少女剣士である。

数字だけを聞けば頼りないことこの上ない稚い子供ではあるが、その顔立ちは端正で大人びており、見る者には幼いというよりも若いという印象を与える。実際の年齢よりも数歳早熟した艶麗なつくり、何処となくあどけなさを残す大きめの緑眼がよく映えていた。

「あと、少し……」

神名はガラスの向こうの空を見据えながら、呟き、そつと瞼を下ろす。

長い睫毛が震え、それは何処か泣いているようでもあった。  
焦燥と深い悲哀<sup>かなし</sup>み。神名はくつと唇を噛み、耐えるように俯く。

それは言わば、保護という名の軟禁だった。

「失礼しますぞ、勇者どの」

祈るように目を閉じる神名の許に、こんこん、と無情なノックの音が響く。

驚いて振り返れば、既にドアは開け放たれ、恐らく五十代半ばであろう小肥りの男が、ニツと後ろで笑っていた。

脂ぎった顔を一杯に歪ませ、歪に大きな鼻を更に大きく膨らませる。生来のものなのであろうアンバランスな顔のパーツを、まるで化生か何かのように動かして。

その気味の悪い様子に神名は思わず、一步ほど後ずさった。

「どなた……でしょう、か」

「これは失礼を。私は帝国元老院議員、スドウ須藤と申します」

男はにやにや笑いを引つ込めないまま、神名を一瞥する。

否、それは一瞥では済まず、全身をくまなく観察するようなねつとりとした視線だった。

神名はその舐めるような視線の居心地の悪さに身体を硬くしたが、小さく息を吸うと、覚悟を決めて相手の濁った目を見据える。

「そうでしたか。それで……須藤さま。わたしに何の御用でしょうか」

出来るだけ敵意を込めず、控えめに尋ねる。

すると須藤と名乗った男は、口の端を裂けるほどに歪め、下卑た笑みを浮かべて一步前へと足を踏み出した。

神名がびくりともう一步後ろに下がろうとも、須藤は気にも止めない。

「あのですなあ、勇者どの。非常に申し訳ない話なのですが、実は貴女に、皇帝から解雇命令が来ておるのですよ」

「か……解雇？」

神名の言葉にええ、と頷く須藤。

その言葉の意味を完全に咀嚼する前に、須藤の大仰な振りと悲哀の色を込めた声が、更に話を押し進めた。

「いやはや、非常に申し訳ない。私の発言力がもう少し強ければ……己の無力が身に染みるようです。皇帝もまだ若いものでね、女子供は頼りないと言ひ張るのですよ。確かに貴女はね……魔物の討伐に出すにはか弱く思えますが。それにしても全く、情けない話です」

それは……どういう。

手を広げ大きく天井を振り仰ぐ男の姿を見ながら、神名はただひたすらに硬直していた。

解雇。その言葉が胸中で、何度も反響する。——その意味が分からないわけではなかった。けれど。

か弱いなんて、そんな——自分は勇者なのだ。沢山の候補の中から、選ばれたはずなのだ。なのに。

そんな神名に止めを刺すように、須藤は一層深く笑みを刻んだ。

「傲慢なこと極まりないですが、皇帝に逆らえば私も危うい。そこで貴女には申し訳ないが、どうか討伐隊隊長の役を降りて欲しいのです」

「——！」

にやにや笑いから紡ぎ出された科白に、神名は一気に真っ青になった。

ようやくその真意が知れる。

『勇者をやめろ』。自分は暗に、そう言われているのだ。

——信じられなかった。信じたくなかった、が。神名は慌てて、その言葉に反論する。

「そ、それはどういう……！ 皇帝はわたしを認めて下さったのではないのですか！？ 現にわたしは、試験に合格して今此処に——」  
「だから申し訳ないと言っておるのです。勇者が就任から三日と経

たずにクビなど、正直異例の事態」

「そんなの——！」

民を混乱させるつもりですか、と言いかけたその時。

卑しい笑みをようやく引つ込め、須藤はひどく残酷な表情で神名を見下ろした。冷たい目には、見下すような色が混じっている。

「何、それなら箝口令を敷けばいいだけのこと。勇者は死んだとでも言っておけば、次の勇者などいくらでも立つ」

「——っ！」

冷たく、ナイフのように鋭く尖った声。

その言葉を聞いた瞬間、例えようのない怒りと悲しみをないませにした灰色の感情が神名の胸を貫く。

——何て汚いのだろう。

権力ばかり振り翳し、民のことなど全く考えてはいない。所詮、それは醜いエゴイズムでしかないのだ。

気付いてしまった事実の<sup>こと</sup>菌痒さと悔しさに、神名は思わず涙を零しそうにすらなった。

「……まあ、そう落胆なさないで下さい。次の勇者は貴女のお仲間にに任せることにしています、懸念することもないでしょう」

ぽん、と馴れ馴れしく肩に手を置かれても、振り払う気力さえない。

ただ脱力感と絶望感だけが、虚ろになった神名の中に満ちていた。

（……分かった。帝国がこういうところだっていうことは）

溜息の一つすら漏らさず、神名は睫毛を伏せる。

分かってた。——分かっていたはずなのだ。

この国は腐っている。そんなことは、とうの昔に知れている。だからこそ神名は、ある程度の地位が約束されるという《勇者》になろうと決めたのだ。

自分がせめてもの権力を持てば、腐ったこの国をどうにか出来るのではないかと信じて。

だが——。

「それに、貴女の今後の生活のことならば、この私が保障致しましょう。それがせめてもの償いというものです。一生暮らしていけるようには——ですから」

須藤の視線が、神名の身体を滑っていく。

硬直する神名の気持ちも知らずに、舐めるように全身を味わい尽くすと、その目元の緩んだ邪な目付きが神名と数秒見つめ合った。

「……解りますな？ 神名どの」

期待するような、弾んだ声。それでいて、低く舐め上げるような目。

神名はそれに、嫌悪感よりも先に何とも言えぬ恐怖を覚えた。腐っている。国だけではない。人の、人間の根本から——だ。

（き、気持ち悪い——！）

本能的な恐怖に神名が身を引くよりも、先に須藤が素早く動いた。まるで獲物を逃さんと目を光らせる獣のように。

その短い腕を伸ばし、須藤は神名の細い肩を捕まえようとする。先程のシヨックで混乱していた神名は咄嗟のことに反応できず、その腕を避け切れずに迫ってくる顔を怯えの目で凝視した。

そしてこれから何をされるのかという恐怖に、身体を硬く強張らせる。さすがの神名にも、多少の想像はついた。そして――。

「死ねこの色ボケ爺イ――っ！」

「うぼふっ！？」

「きゃあっ！？」

目の前の巨体が、突然弾けた。

――否、弾けたのではない。そう見えただけだ。  
けれどそれと似たような衝撃に、神名は思わず声を上げてしまった。

「あーっ、ム力つくム力つくム力つく！ 腐った豚の分際で若い女に手エ出しやがって！ 死ね！ いっそ死ね、地獄に堕ちろ！」

がすがすがすと妙に乱暴な音が、鼓膜を震わせ音として脳に届く。

けれど、思考がスパークし一時停止中の神名にはそれが何の音なのか判別がつかない。更に言えば、何だか妙に不機嫌なその声も実のところ何を言っているのか神名には全く理解できなかった。普通に聞けばただの嫉妬の言葉に違いなかったが。

――何？ 今、何が起きたの？

ただぽかんと口を開け、神名は目の前の光景を見つめる。ただし思考回路が停止中の神名には視界に入るもの全てが理解不可能なものであり、脳内で上手く処理することはできなかった。

神名の目に単なる色として映る、床にめり込むほどに伏せた須藤の身体と、それを容赦なく足蹴にする黒髪の青年。

（――こ、これって……）

ようやく頭が冷え、現状を呑み込んだ神名は、いつの間にかそこに立っていた青年に視線を移して息を呑んだ。

「あ……あの……っ？」

「ふう……すっきりだ。あーいい憂さ晴らしだった」

そこで青年は、ようやく床に転がった肉の塊を蹴るのをやめる。

普段の神名だったらそんな乱暴をと叫ぶところだったが、事実神名自身がこの地に伏せた男に乱暴を働かれるところだったので何も言えない。——というか、神名の頭は未だ混乱していて、青年に対する諫言すら持ち合わせていなかった。

ただこの青年が誰なのかという、好奇心にも似た疑問ならばある。神名は震える声で、誰何の言葉を告げた。

「あ、貴方は一体——」

途中まで言いながら、はっと神名は気付く。

長い間櫛を通していないのだろう跳ねた黒髪、圧倒的な存在感を持つ血染めの瞳。

——デジャヴ既視感だ。

つまりは、それが自分の待っていた、その人なのだろうと。

だから神名は言葉を止め、違うことを尋ねた。頭一つ分も高い青年を見上げて。

「——魔王さま、ですか？」

言葉にすれば、それは確信へと変わる。

「ああ……、うん？　そういえば……そうだったな」

——けれど、返ってきたのは何とも曖昧な返事だった。

だが神名は確信していた。目の前の青年が、《魔王》その人である。

しかし青年はそれ以上その話題には触れずに、ただ少々面倒そうに神名の顔をじーっと凝視する。

「ところで、あんたが神名だよな？　俺はあんたの連れに言われて、あんたを助けに来たんだが——」

青年は神名と目を合わせ、小さい子にするように同じ高さまで屈んだ。

「……大丈夫か？　何もされてないな？」

柔らかで、何とも優しいような声。

その予想外の言葉に、神名は思わず顔を赤くした。

まさか、青年の口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかったのだ。——そんな、あまりにも優しい言葉。

神名は頬を紅潮させたままこくと頷くと、じっと、青年の目を見つめる。

「わたしは……大丈夫です。それよりもあの、魔王さまこそ、大丈夫なのですか？　地下牢に捕まっていたとお聞きしましたけれど——」

「……あんた」

我知らず不安な声で尋ねる神名に、青年はぽつりと呟く。

「……いい子だな……」  
「——はい？」

とても会話の脈絡がつかめず、神名は首を傾げた。

——いい子？

じーんと感動したように目を細める青年を困惑しながら見るが、まるで思い当たるところはない。そもそも神名は自分のことだとは一瞬たりとも思わなかった。

「やばい、感動しすぎて涙出てくる。魔王を心配する勇者なんて初めて見たし……何これ。俺、生きててよかった」

「え、あ、あの？」

「しかも可愛いし賢いしさあ。うわどうしよ、俺こんないい子殺せるかって。殺せるわけねえだろこの野郎」

何やらぶつぶつと呟き始める青年。

神名は訳が分からず目を白黒させるが、青年は未だ何かに感動しているようで神名のことなど気にも留めていない。ただ何か同じような言葉を、ぶつぶつと呪文のように呟き続けている。

「ていうかそんなことしたら俺悪者じゃん。……つかあれだな？あの爺騙したな、こんな子殺せるわけないって知ってて交渉の条件にしたな……くそ。あの野郎、次会ったら絶対殺す。ところで抱きしめて撫でていいかなこの子」

——しかも、その内容がなかなかに物騒である。そして最後の件くだりは若干おかしかった。

神名は時折呟かれる単語が何のことかよく理解出来ないながらも、目の前の青年が《魔王》という名の通りに、正常な類ではないことを理解していた。アブノーマル。それも、明らかに度を越すほどの。

(……ううん。それよりもちゃんと、さっきのお礼言わなきゃ。危ないところを助けてもらったんだもの)

けれどまずは助けてくれたことに対するお礼だろうと、神名は首を振って思い直す。

相手がどれだけ異常であろうと、助けて貰ったのは事実だ。

未だ何か呟き続ける青年に向かい、神名はすうと息を吸って、深く深く頭を下げた。

「……え？ えーと……あれ？ 何で俺頭下げられてんの？」

「先程は、危ないところをありがとうございました。それとこの間はごめんなさい……わたしのせいで、地下牢なんかに関じ込められてしまつて」

きつく瞼を閉じながら、神名は一気に捲し立てる。

この体勢では青年の顔は見えないが、言葉がないところを見るとやはり驚いているのだろう。——当然か、と思った。

これでは誠意が伝わらない。もっとちゃんとお礼を言おうと考え、神名はもう一度息を吸う。

「あの」

「——偉いっ！」

そうして言葉が続けようとしたところに、突然称賛の言葉が飛んできた。

むしろ神名の方が驚いて顔を上げると、青年はまた言い知れぬ感動に震えている。

……感動屋？ 神名は思わずそんなことを思った。

「何この子、いい子すぎるだろ……！ 何だろうだってこれ絶対俺が悪いパターンじゃん。普通だったら『貴様よくも！』とか言って斬り掛かってくる場面だぞ？ なのにむしろ謝るとか……俺本当こんないい子初めて見た。美人は腐るほどいるけどその上性格いい子なんてなかなかいないからな……あ、感動で涙が。あと抱きしめて撫でていいかな」

……以下エンドレス。

呆気にとられ何も言えずにいる神名の向かい側で、青年はぶつぶつと呟き続ける。

どうやら青年の癖らしい。感動すると何事かを呟き始めるという——おかしい癖ではあるが。

「……え、えーと……？」

「あ、すまんすまん。つい感激してた。それにしてもあれだ、別にあんたは悪くないぞ？ むしろ俺が悪いっていうか……キスなんかしたのは俺なわけだし。あ、いやあれは厳密に言えば俺じゃないけど……まあいい。細かいこと気にすんな俺！ えーと、とにかく、悪いのはあんたじゃなくて俺だってことだ」

つまり言いたいことは『あんたは悪くない』——ということらしい。その割に話が長かったが。

若干話がずれているような気もしないでもなかったが、神名は青年の優しさなのであろう言葉に、こくと素直に頷いた。

「つーか、俺が謝んなきゃな……ごめんな。俺……いや厳密に言えば俺じゃないけど、まあとにかく俺があんなところ行ってキスなんかしなきゃ、あんたはこんな事態に巻き込まれずに済んだわけだ」

巻き込まれた——なんて。神名にはそんなつもりは全くなかった

ので、今度は頷かない。

けれど青年は、勝手に一人ごちて続ける。

「ていうか初対面の女にキスするなんてありえないだろあいつ……いや確かに《誓い》のキスしろって言ったの俺だけど。それは相手が男であると予想しての言葉であって——そもそもそんな言葉真に受けるか普通。ただのジョークだよジョーク……どつきりでしたて済ませればいいんだよあの野郎。それが本当にキスする奴があるか」

またも、ぶつぶつ呟きモードに突入する青年。

神名はついていけずにぽかんとして聞いていたが、その中に、キスという単語を耳聴く聞き取り——

「……あの。こんなことを言うのは変ですけど……わたし、ファーストキスだったんです」

そう、告げた。

——瞬間、空気がフリーズする。

「……………マジで？」

「あ、う……………はい」

ファーストキスの味は何とやら。真っ赤になりながら告げた神名に対して、青年は真っ青になる。

恥ずかしながらも告げた言葉だったが、青年にはやはり逆効果だったらしい。……別段何の効果を期待して言ったわけではなかったが。

「うわああああ！ あいつ死ね、むしろ俺が死ねっ！ 初対面の女のファーストキス奪うとかもう駄目だ！ 俺最低だ！ きるみい

「いいいいいい！」

「がらがらがらん。」

壁に頭を打ちつけ始める青年。――さすがに止めた方がいいのかな、と神名は思う。

額から血が出ている様子はないが、傍目的にもまずい光景である。正直怖いというのもあった。

「あの、魔王さま……？」

小さく、呟くように呼ぶ。すると、青年の動きがぴたりと止まった。一瞬の沈黙。

そしてぎぎぎ……と機械的な動きで、青年の首が神名の方を向いた。目には生気がない。若干ホラーな光景に、神名は思わず一步身を引く。

「……神名、って言ったよな？」

「あ……は、はい」

神名は困惑顔のまま頷く。

すると青年は覚悟を決めたように大きく息を吸い、そして、神名に向かって勢いよく頭を下げた。

「ごめんっ！」

「えー!?」

頭を下げられたことなんて、片手の指で数えられるほどしかない神名である。

出し抜けに頭を下げられ、仰天して飛び上がってしまった。

「まさかそんなつもりじゃなかったんだ……しかもあんたみたいな子を巻き込むなんて。ごめん、絶対責任取るから」

「え、あの、別にそんなのじゃない、です……！ そんなつもりで言っただけじゃ……」

「こればかりは俺が悪かった。責任取らなきゃ気が済まない」

《魔王》という名にそぐわない紳士的な態度に、神名は赤くなりながらあわあわと慌てて弁解する。

けれど青年はもう決めてしまったらしく、梃子でも動かない。神名は困り果て、頭を下げ続ける青年をじっと見下ろした。

「えと、魔王さま。顔を上げて、ください」

拙い口調で、神名は青年に告げる。

何故か照れ笑いのようになってしまったのは、恥ずかしいからかもしれない。

「わたし、気にしてませんから。それよりも、そんなに謙られた方が申し訳ない……です」

「——でも」

青年は伏せた目を上げながらも、まだ不満そうな口調で反論しようとする。

けれど神名は続けた。先の言葉を翻し、『提案』という名の押し付けを。

「けれど、どうしても言うのでしたら、その……一つ、お願いしたいことがあるのです」

「お願い？」

こくと頷いて、神名は微笑む。

どくどくと高鳴る鼓動を自分で聴きながら、両手の指を胸の前で組み合わせ、頭を上げた青年の目をじっと見つめた。

「——俺に、できることなら」

断れる訳がないと分かっているのは、ずるいと思っていた。  
この人はとても優しいひとだ。どれだけ驚いても、神名の言うことをはつきり断ることはできないだろう。——分かっているのは、ずるい。

それでも神名は告げる。一目見た時から言いたかった言葉を。

「わたしを——貴方の、お嫁さんにして下さい」

——瞬間。

またも、二人の間に流れる時間が止まった。

### 【誓いのキス】

口付けによって相手を虜にする呪術の一種。

失敗する確率が高い為に呪術のリスクを背負ってまで行使する者は少ない。

けれど失恋の怨から呪術師まで堕ちた者にとっては一つの目標にもなり得るという。

反面、成功すれば両者の魂を分け合う危険な呪いでもある。

互いの相性が良ければ良いほど成功する確率も高いが、同時に同<sup>シ</sup>一化しすぎる可能性も高くなる。

それに加え、真偽は定かではないが、相手が異性であることと、相手が初めてであることもこの呪術を成功させるには大切な要素であるという。

注・極めて強力な呪いであるため、成功すれば二度とその契りが解けることはない。

↓ **責任取って下さい！（後書き）**

コメディーなのかシリアスなのか……でもコメディーです。うん。  
新年初の更新です、皆様あけましておめでとうございます！  
更新がすっかり遅くなってしまい申し訳御座いません……今年はまだ  
少しペースを上げて更新していきたいと思っています。

↓ 猿と豚と化け物と

燦々と照りつける太陽の熱は地上まで届かず、寒気ばかりが空気中を漂っている。吐く息は白く、男は本格的な冬の訪れを、ひしひしと感じた。

「神威さん、上手くやれてますかねー」

甘楽。

そう名乗った男は糸のように細い目を更に細め、一人虚空に向かい呟く。

——そう。それは単なる、独り言である。

壁に背を預けた大男からは、大きな欠伸の返事と。

端正な顔をぴしりと引き締めた魔術師の男に至っては、何の反応すらも返さない。

それを横目で見遣った甘楽は、これは独り言なのだと虚しくなる自分に言い訳していた。

脱獄囚の二人は今、勇者一行の一人である《魔術師》<sup>ウィザード</sup> 黎の案内に続いて、膨れ上がる騒ぎの中を抜け城外へと出ていた。

ばたばたとひどく慌ただしい城内とは違い、外では青空が顔を出し、長閑な昼下がりが過ぎようとしている。ちらほらと浮かぶ薄い雲が温度を閉じ込めてくれずに肌寒いことを除けば、とても過ごし易い日であろう。

「それにしても、あんな抜け道があつたなんてねえ……」

甘楽はぼうつと空を見上げながら、またもぼつりと呟く。  
今度こそは独り言のつもりだった。城外へと抜ける裏道。通って

来た複雑な道筋を思い出しながら、ふあ、と漏れそうになる欠伸を噛み殺す。

けれど止め処もなく溢れる無意味な思考を堰き止めたのは、あまり聞き慣れないテノールの紡ぐ言葉。

「何かと知っておいた方が便利だからね。そういうのは」

抑揚の足りない、自覚なしにも退屈そうに聞こえる声。

それが黎の声だと理解した途端、甘楽は不思議そうな表情になった。そして、それを見た黎の目が丸くなる。お互いにおかしなものを見たように。傍から見ればそれは滑稽な光景だったが、あえて兵童は何も言わない。

「……意外……、っスね」

甘楽は呆けた声を零した。

何かと瞬きをして聞き返す黎に、甘楽は驚いたような、ぽかんと抜けた表情で答える。

「黎さんって、もっと厳しい人かと思ってました」

「何だい、それ」

甘楽の正直な言葉に、黎は頬で苦笑する。

「んーと、こういうと失礼かもしれませんが……真面目でびしっとしてて、ユーモアが足りないっていうか。こういうところで喋ったりしたら、うるさくするとバレるぞ、って脅すような」

「……つまり、君の目から見たら僕はそういう風に見えていたんだね？」

「いやいやいやとんでもない。そんなことないっスよねえ兵童さん」

「俺に振るなよ、兄ちゃん」

ふわと白く上がった息を弾けさせ、兵童は笑った。

黎は相変わらずじつと真っ直ぐに甘樂を見据えている。……話を逸らせない。

観念して甘樂は、目を細めた笑顔のまま溜息を吐いた。

「偏見、かもしれないっすけど……勇者一行の人って何か、怖いんすよね。正直——帝国の手駒みたいなイメージがあつて、あ、一介の帝国兵士としてこんなこと言うのも何なんすけど」

煤に汚れた金髪をくしゃりと掻き上げ、甘樂は笑っていた口元をへの字に曲げる。

それは本音だった。別に何も、それは今回の黎たちに限ったことではない。甘樂の中で、勇者一行は『怖い』ものなのだと、いつの間にかそんなイメージが染み付いてしまっていた。

「小さい頃はそれこそ、勇者一行なんて英雄だと思ってましたから——えと、何かすみません、黎さん」

表情を崩す黎を怒っているものと勘違いし、甘樂は小さく頭を下げる。

けれど黎は口元を覆う手を外すと、くつと喉を鳴らした。

「はは。いいんだよ、別に。僕もそうだと思ってたからね——子供の頃は」

優しい碧眼を細め、黎は微笑む。

英雄なんて十二分な表現だが、子供の頃は誰もが夢見たものだ。  
魔物を倒す正義の味方。なんて十分すぎる英雄譚。

その裏に隠された実情など知らずに、子供たちはただ憧れる。勇者という、作り物の英雄に。

「それはそうと、関係ない話なんだけどさ。甘楽君は帝国外の人間だよな？ それも、帝国に来てそう長くない」

「——え？」

「あれ、違ったかい？ 帝国の人たちって自国愛が強いから、甘楽君みたいな人間は大抵他の国の人なんだけど」

くすりと笑って、さらりと告げられる言葉。

甘楽はその言葉の意味に頬を冷や汗が伝うのを感じながらも、黎の目を逸らさずに見据えた。

「それとも、勇者ゆうへい一行みたいな訳有り？ それならそれで、納得が行く」

——訳有り。

その言葉に胸中では敏感に反応しつつも、顔には出さない。ただきょとんと目を丸くして見せると、ゆっくりと、細めた。

「……まあ、訳有りっちゃあ訳有りなんスけど……」

惚けるような声で曖昧にごまかしながら、内心で黎の様子を窺う。けれど黎は深く追求することなく、そうかと言って微笑んだ。

「ついでに聞くけど、兵童さんは？」

「おいおい、魔術師の兄ちゃん。七年も地下牢に捕まってたような奴が一般人ですなんて答えると思うかい？」

「……それもそうだったな。失礼」

口調は馬鹿にするようでも、本心では単にからかうような言葉に、  
黎は激することなく柔らかく笑う。

どんな罪を犯した悪党なのかは知らずとも、そんなことは一言も  
口に出そうとしない。まるで疑問になど思っていないような口振り  
だった。

「それにしても神威君、本当に遅いね……」

少しだけ翳りの差した口調で、黎が言う。

甘楽も、少し不安に思っていた。遅い。予感が不安へと芽吹き、  
ぼつぼつと、靄になって胸の辺りを埋める。

兵童だけは心配していないかのような素振りで大きな欠伸をした  
が、内心では心配しているだろう。

「帝国の警備兵だって馬鹿やっちゃいないだろ。それとも何だ、帝  
国兵は無能ばかりなのか？」

「うーん、まあそうだね。僕が見たところ、猿と豚しかいなかった」  
「おいおい。仮にも勇者一行の一員がそこまで言うか」

冗談で言った言葉にあっさりと返され、兵童は苦笑とも嘲笑とも  
取れない微妙な笑みを漏らした。

「まあそれでなくても、あんちゃんが捕まるとはとても思えねえけ  
どな」

「二重人格で気が触れているだけならまだしも、目の色変わっちゃ  
ったし兵士あっさりと倒しちゃいましたしねえ。人間業じゃないで  
す」

酷い言い様だと、甘楽は自分で思った。

だが、地味に化け物扱いをされている本人は知る由もない。

「魔王、なのかねえ」

兵童は呟く。

——魔王。

御伽噺の中のような、響きだった。

黎は小さく首を傾げて、兵童の方を見遣る。

「魔王——か。確か魔王は、十五年前に処刑されたはずだと聞いたけれど」

「まあな。けど、そんなもん伝承でしかねえだろ。真実を知ってんのは処罰を決めたお偉いさん方だけだ」

真実は闇の中、か。甘楽は目を細める。

彼らにとつて《魔王》というのは、十五年前に神殺しの罪で処刑された、《神殺しさま》——神神威のことだった。

別に魔王という単語が彼だけを指すのではない。長い歴史の中には、魔王という名は幾度も残されている。だが、《魔王》という存在の、その詳細を知る者はいなかった。あつたとしても、真偽も疑わしいような絵空事のような伝説ばかり。

ただ人々の中のイメージは魔を統べる王ということばかりで、畏怖の対象として慄くことしかなかったのだ。

——そんな中で現れたのが、神殺しさまとしてその名を轟かせた魔王である。

神殺しという偉業を成し遂げた彼は、人々の中で、ただ一人の《魔王》として昇華されていた。

「あの兄ちゃん、大胆さとふてぶてしさは正に魔王級だぞ。威厳はねえけど、まあそこは措いといてもな」

そこには甘樂も同意した。

「態度だけ大きい奴なんて今の世溢れてるからね。まあ、彼が何者だろうといいさ。神名を助けてくれるなら恩人には違いない」

黎は肩を竦め、小さく笑う。

別にそれは神威を馬鹿にしている訳ではなく、単なる本音であると甘樂は分かっていた。

……まあ、本人が聞けば激昂するかもしれないが。

「そついえば黎さん、何で神名さん捕まっちゃってんすか？ 仮にも勇者でしょ？」

「まあ……そうだな。言うなれば、庇護という名の軟禁かな」  
「庇護？」

ああ、と黎は頷く。

その目にもう笑みはない。

「聖夜祭の夜、神威君が神名にキスをしただろう？ まあ、あの事件の犯人として神威君と君は捕まっちゃった訳だけだ」

「……すみません」

「はは、謝るなら神名に謝ってくれ。僕は別に怒ってないし——神名も怒ってないだろうけど、ね」

思えば、自分が神威を城の中に入れてしまったのが発端だった。思い出せば、申し訳なくもなる。

肩身が狭い思いを感じて、甘樂は肩を竦めた。それを見て黎は笑う。

「神名が勇者になるまでも色々あったんだよ、今更気を揉むことで

もない。そもそも、女勇者っていうのはこれが初めてでね。賛否両論色々あった訳さ」

「はあ……」

「ま、と言っても反対意見の方が圧倒的多数だったんだけど」

くすくすと笑って言うが、その目は全く笑っていない。——怒っているのか。

そのことに恐縮しながらも、甘楽は言葉の続きを待った。

黎は目を細め、話を続ける。

「だけど、勇者は実力で決めるものだから仕方がない。技量的に一番優れていた神名は、めでたく当代魔物討伐隊隊長に任命された」

そんな経緯があったのか、と甘楽は半ば感心もした。

勇者になるには勿論、それ専用の試験がある。誰でも簡単に勇者になれる訳ではない。

その試験に今回合格したのが神名だということは、勿論甘楽も知っていたが。

「でもね、神名の力はダントツって訳でもなかったんだ。言わば実力伯仲、ずば抜けて高い戦闘能力とか、百発百中の命中率とか——そんなものを神名は持ってた訳じゃない」

顔を僅かに曇らせる黎。

確かに、聖夜祭の前から初の女勇者として様々なところで話題になりはしたが、何が優れているだとかそんな話は話題には上らなかった。

かといって弱いのだと蔑む声はなかったが、そう言われてみればそうだ。妙に納得してしまう。

「だから……お偉いさんは、神名さんを引きずり落とそうと？」  
「ま、そういうことだね。元老院の豚どもなんて、神名の何処に隙がないかっていつも探してた」

それを聞いた甘楽は汚いな、と純粹に感じた。  
元老院は帝国の柱ではあるが、正直悪評しか聞いたことがない。  
いつの時代でもそんなものなのかもしれないが。  
それにしても元老院の面々には黎の言う『豚』という比喻がやけに似合っている気がして、何だか滑稽だった。

「まあ、神名は元から戦闘以外に長けた子じゃない——ボロなんてすぐに出る。それで、先の事件さ」

うつすらと笑みを浮かべながら黎は言う。  
先の事件。——神威のことだ。  
勿論自分にも責任があるのだが、それは棚に上げて甘楽は思った。  
考えてみれば、元老院の面々にとってはこれ以上ない好機だろう。  
過失は相手にあっても、頼りないだの何だの言い掛かりをつけて神名を引きずり落とすことができる。

「……汚いつスねえ」  
「まあね。だけどすぐにクビを切らなかつただけマシなのか、どうなのか……」

黎は睫毛を伏せ、目を閉じる。  
ただそれだけの仕草すら美しいのだから、人は平等じゃないかと甘楽はそんなことをふと思った。

「何せ、聖夜祭のすぐ後だ。帝国側も混乱を煽りたいわけではない

だろうからね、神名をすぐクビにするんじゃないくて、庇護という形で部屋に押し込めた」

それはそれで汚い話だろう。

助けている振りをして神名を軟禁したのだ。よくやる、と半ば呆れずらす。

すると黎はそこで甘楽の方を振り返り、不敵に微笑んだ。

「ま、そんなに心配することはないさ。だからこそ僕は余所者らしい神威君に任せただから」

それはどういう意味か、と甘楽が目丸くすると、黎は微笑を消さないまま。

「別に僕も神名も魔物を討伐するなんて正義感から討伐隊になっただんじゃない。だから僕はこの国を抜けることを決めたんだ」

「この国を抜ける——っすか？」

「ああ。どうせこのままなら神名は解雇され、次は勇者の役が僕に回ってくるだけさ」

静かな怒りを滾らせた瞳を細めながら、黎はさざりと言いつ切る。

確か黎は凄腕の魔術師——それもありませんかと甘楽は思った。が。

次に黎の口から発された言葉は、甘楽をフリーズさせるに十分な威力を持った文句だった。

「実力はともかく、これでも帝国貴族の出なんですね。鼻肩目があるのは間違いないだろう」

「……容姿端麗、頭脳明晰、それに加え地位と力まで……つくづく人って平等じゃないっすよね」

「うん、何の話だい？」

明かされた目の前の男の出生に、甘樂はそう言うことしか出来ない。  
い。

負けた。何にだかよく分からないが、甘樂はそう思った。

と、唐突に二人の後ろで間の抜けた音が響く。眠たそうに目を擦る、兵童の欠伸だ。

「ふああ、話は終わったかい？ 兄ちゃん方。そろそろ神威の兄ちゃんも来る頃だろ」

丸太のように太い両手を伸ばし、晴天に向けて伸びをする兵童。欠伸のせいなのであろう涙が一筋、その頬を伝った。

「眠そうですね、兵童さん。ていうか遅すぎるくらいじゃないですか、神威さんってば——」

苦笑いで答えようとして、甘樂の言葉が止まる。

何処か抜けた沈黙。

だが三人の目は同じように、ある一点に釘付けになっていた。

——空。

よく晴れた空から、何かが、降ってくる。

「待たせたな愚民どもーっ！」

「はあっ！？」

反響する聞き覚えのある声と途轍もない嫌な予感に、三人は声を合わせて聞き返した。

愚民ども？ …… いや、突っ込むべきはそこではない。  
信じられない速度で空から降ってきているのは、人影、二つ。  
——それが神威と神名であることは、疑いようもない。

「ちよつ、兄ちゃん、あんたどつから……っ！」

瞠目して叫ぶ兵童の問い掛けにも、落ちてくる人影はただ笑む。  
それにお姫様抱っこで抱えられている影も、どうやら叫んでいる  
様子はない。——怖すぎて叫べないのかもしれないが。

さすがの黎も口を開けたまま硬直し、ただ空を見上げている。そ  
れはそうだ。

甘楽も焦った。だがまあある程度予想していてもいいことだった  
かもしれない、と同時に思った。

そう思う間にも人影は猛スピードで落ちてきて、今にも地面に激  
突しそうになる。——が。

「到着っ！」

勿論、心配は無用だった。

ぼすん、と割には軽い音を立てて無事着地する人影——神威。

その瞳はまだ紅く、だが行く前よりもハイテンションである。ま  
るで小説の中の主人公か何かのように華麗に決めてみせた神威に、  
三人はまだ石像の如く固まっていた。

これは奇跡か何かか。そんな思いよりも前に、派手な登場だとい  
う感想が甘楽の脳裏をよぎる。

化け物染みているとは思っていた。だがまさか、こんなことをや  
らかされるとは夢にも思っていなかった。それは人として当然のこ  
と、なのだが。

「……何っーか……これ以上なく心臓に悪い人っスよね」

まるで無傷でどうだーと子供のように無邪気にVサインを突き出す神威に、甘樂はそんなことを言いたいんじゃないかと思うながらも  
かろうじてそう呟いた。

↓ 勇者は魔王に盟約を

「逃げたか」

老爺は何の感情もなく呟きながら、ぐるりと辺りを見回した。十数人も人間が行き交えそうなほどに広く、豪華な調度品で飾られた廊下。

そこにいるのは、倉皇とする薄っぺらい顔の兵士たちばかりだ。慌ただしく右往左往していても、この擾乱に対して何か処置を施しているようには見えない。使えない兵士コマだなど、老爺は何気なしにふと思う。そう思ったことを失礼だとも彼は思わなかった。

だがその事実を裏付けるように、老爺の姿を認めるなり、兵士の一人が僅かに安堵したような表情で彼の方に駆け寄ってくる。それはまだ若い、けれど疲弊し切った表情を浮かべている青年だった。

「こ、侯爵どの……！ こんなところまで、御苦労様であります」

「口上はいい。現状は？」

「は……、はっ。嚴重に施設しておいたはずの勇者どのの部屋の扉が開いており、待機されていた勇者どのの消息が不明となっております。最初に到着した第一隊の目撃情報によると、黒髪の男に拐引されたとか——第三隊の報告と照合し、黒髪の男は先日捕らえた猥褻犯かと」

侯爵と呼ばれた老爺——東は、青年の報告に元々険しい顔を更に顰めた。

逃がしたのか。

東の表情には暗に、そんな意が込められている。

そんな失望を汲み取った兵士は、顔を青くしながら、その場に叩頭した。そして慌てて、取り繕うように言葉を続ける。

「も、申し訳御座いません、直ちに追跡し——」

けれど東はもう、そんなことには興味がなかった。こつりと一歩踏み出すと、兵士たちが忙しなく出入りする例の部屋に視線を投げる。

「いや。いい、お前たちはもう下がれ。お前たちが追いつけるような相手ではない」

「は、し、しかし……」

「これ以上言わせるな。時間の無駄だ。それよりも、部屋の扉が開いていたとはどういうことだ？ あ部屋の扉は魔術式で封を施してある。打ち破れるような硬さでもなかったと思うが？」

「は、それは——」

東の尋問に兵士は頭を上げ、ちらりと部屋の方を見遣ると、一瞬間を顰めたのちにその訳を話し出した。

「勇者どのが消息を絶った代わりに、部屋の中に子爵どのが倒れておりまして……」

「須藤が？ ……それは厄介だな」

「は。恐らく子爵どのが勇者どのと談話している間に、例の賊が侵入してきたのかと」

兵士の言葉に、東はあからさまに顔を歪める。  
嫌悪。

それが正に相応しい、苦々しげな表情を浮かべて。

「あいつは確か魔術には通じていなかったと思うが……解術のかの字も知るまい？ それに、解錠<sup>キテウ</sup>式を所持しているのは陛下と私だけ

だったと記憶しているぞ。どうして彼奴に開けられた？」

「そこが、いまいちはずきりしないところなのですが……状況から推測するに、子爵どのは被害者です。今はとりあえず犯人の捕縛と勇者どこの保護が先決では」

まるで須藤を庇うように、兵士の青年は言い立ててくる。

目先の物事しか捉えられない兵士の物言いに、反吐が出そうになった。ふざけている。東の目にはそうとしか映らない。

——共謀<sup>グル</sup>だと疑われても知らんぞ。

胸中で忠告すると、東は兵士の横をかつかつと通り過ぎる。驚く兵士の横顔を振り返ることもせず、彼は唾を吐くように言い捨てた。

「もういい。下がれ、須藤どのは医務室まで丁重にお運びしろ。無用とは思うが医者に診てもらっておけ」

取って付けたように『どの』などと呼び敬いの形を成すと、それ以上は言わずに部屋の方へと歩いていく。

更に濃くなる人波。それらを威令で掻き分けていくと、部屋の相貌がようやく露になった。

倒れている肉の塊は須藤だろう。東は一瞬だけ視線を落とし、それ以上は関心を示さない。

それよりも、ひやりと肌に触れる薄寒い空気の方が彼にとっては問題だった。理由は一目瞭然、砕けた窓ガラスが飛び散り豪華なカーテンは風に靡いている。窓が割れているせいだった。

（窓から飛び降りた、か……）

散った破片を踏まないように気を付けながら、窓へと近付いていく。

そよ風と呼べるほどの弱い風が頬を撫でていくが、幾分冷たい。

肌を刺すような冬の空気に、東は目を細めた。

（派手なことが好き、とは噂に聞いていたが——流言だと思っていた。だがあながち嘘でもないようだな）

やむを得ずに飛び降りた、という感じではない。

そもそもいくら追い詰められたところで、この層楼にも似た造りの高い城から飛び降りられる訳がなかった。しかもここは最上階である。無事着地する自信がなければとても無理だ。そしてそんな自信を持てるような馬鹿は、そうそういない。

「——おい。お前」

「は、何でしょうか」

ふと思いつき、近くに控えていた兵士に声をかける。先よりはマシな反応を返したのでこれでいいかと東は思った。

完全には振り返らずに横目で兵士の姿を認めると、東は、聞いたかったことを淡々と尋ねる。

「ここに勇者どのが控えていたのを知っていたのは誰だ？ 無論、部外者には知られていなかったはずだが」

「はい。ええと——皇族の方々は勿論ですが、元老院の皆様や貴族の方も御存じのはずですし、我らのように城に仕える者も皆存じ上げております」

「そうか。他は？」

「一般市民には部屋まで知らせる必要性は御座いませんでしたから……あ、申し上げるまでもないかとは思いますが、勇者御一行の方も御承知のことでした」

「……そうか。そうだな。ふむ、御苦労だった」

もういいぞ、と兵を下がらせると、東は一人考え込む。

いくら愚鈍といえども、必要性のないことを漏らすほど兵たちは馬鹿ではない。それに念のために滞在部屋は数日のうちに変えてい  
るのだ、事前に調べられたとは思いいくない。

（だからといってまさか、偶然ここに辿り着いたとは思えん。城から出たいならば上に上がってくることはないだろう）

風が吹き込む窓枠の向こうの空を鋭い視線で捉え、顎をさする。  
見据えた空は高く、憎いほどに青々しかった。

（誰かが手引きした、と考えるのが妥当か……それも勇者賛成派のならば大体目星は付くな）

ようやく窓に背を向け、東は歩き出す。

そんな老爺をからかうように、冬の冷気は、ガラスのない窓から容赦なく吹き込んできた。

冷たい風にうなじが晒され、彼は思わず肩を竦める。

（――何にせよ、気遣いだな。魔王というのは）

微かな吐息。

険しい顔を少しだけ緩めると、さしもの東も老いが剥き出しになる。疲労の色が、誰もの目に見えていた。

けれど、そんな表情もただ一瞬。

東がすつとまた目を吊り上げると、顰めっ面が、無愛想な雰囲気  
を辺りに振り撒き始める。

「元老院議員を集める。早急に議会を始めたい」

そして廊下に留まっていた兵士に一言そう告げると、華美に飾られた部屋を後にする。

見据えた先は遠く。

暗い翡翠の瞳が、世界を妬むように、仄暗い闇を灯していた。

暗く、昏く、冥く――

「さてと。此処まで来ればもう平気かな」

人の影が疎らにちりばめられた人相の街を、連れ立った数人の集団が横切っていく。

その内の三人はまだ若い青年で、顔立ちは勿論様々だ。一人だけまだ成熟し切っていない幼気な少女を連れている為にそういう類の集団かと取れないこともないが、先頭に立つ青年の柔和な顔立ちのお陰か、そういう印象は打破されていた。

「随分日が落ちてきたなあ。久々に拝んだお天道様もすぐに見納めか」

「どうせ明日になればまた拝めるさ。……捕まらなければね」  
「そう願うばかりだな」

そんな集団の中の一人——大きな図体を軽々しい足取りで進めていく男は、橙の光を地上に投げ掛ける陽を右目を細めて懐かしげに見つめながら、ふっと淡く微笑む。

兵童と名乗った隻眼の大男は、七年もの間帝国の地下牢に拘置されていた極悪犯罪人だった。

どんな罪を犯したのかということとを本人は語ろうとしないが、地下牢に収容されていたくらいだ——それは当然重い罪を犯したのだろう。誰もがそんな思いを抱いていたが、誰一人口にしようとはしない。そんな事実とは裏腹に、彼には無情で冷酷な雰囲気など持ち合わせてはいないから。そして、此処にいる面々は誰もが脱走犯という罪を背負った、同じ裁きの元の罪人であるからだった。

「それよりも、これからどうするんスカ？ 帝国を出てしまえば、行き場がないのは皆同じなんじゃないんスカ」

元々糸のように細い目を更に細め、青年の一人、甘楽は言う。  
色素の薄い金髪は、暮れかけた太陽の光を反射して淡く輝く。こんな時でもにへらつと頼りなげに笑っているのは、それが元の顔だからなのかもしれない。

「んー、まあ……でも彼はそうでもないんじゃないかな。ねえ、神威君」

「——は？」

懸念するように尋ねる甘楽の言葉に、けれど先頭を歩いていた青年はそう言って振り返りにこりと笑う。突然話し掛けられた、神威と呼ばれた青年は、目を丸くして先の青年を見返した。どうやら、

二人の話など全く耳には入っていなかったらしい。

そんな彼の為というように、青年は激昂することもせずに穏やかに言葉を重ねた。

「神威君は確か、リンドグラスセの方の荒野に城を構えていたんじゃないかったつけ。古文書の中の記述が間違っていなければ、だけど」  
「古文書って俺はどんだけ古い時代の人間なんだよ。いやまあ確かにこの間目覚めたら国一つなくなってたが……たかが十五年だろうが。たく」

ひょいと肩を竦める、神威と呼ばれた青年。けれどその言葉の内容はそう軽いものではなかった。

たかが十五年。

その言葉に誰もが目を丸くする。この青年は、どれほど時間の流れの感覚が違っているというのか。それは確かに時代が変わるには短すぎる時間だが、世界が変わるには十分な時間だ。

「まあ、それはともかくとしてもさ。君には帰るところがあるはずだよな？　君が君の言う通り、魔王だっていうんなら」

挑発するように目を細める青年の言葉に、神威は腹を立てることもなく肩を竦める。

「んー、まあな……結構ボロいけど。建てたのは俺が十歳の頃なんだけどな、放っておいたらよくもあんなになるもんだ」

「十五年も手入れなしじゃそうなるのは目に見えてるけどな。——  
つてことではい、甘楽君、行くところの心配はいらないみたいだよ」  
「……は？」

二度目の疑問符を零す神威。

それもそのはずだった。彼はただ、自分の帰る家はある——とそう言っただけなのに。もう青年の言葉の矛先は違う方を向いている。しかも、自分を巻き込んで。

「……おいお前、どういう意味だ」

神威は青年に怪訝な目を向け、腹の底から出したような低い声でそう尋ねた。

けれど青年は神威を肩越しに振り返ると、いともあっさりと答える。

「どういう意味も何もないよ。折角共に脱獄した仲なんだから、一緒に住めばいいじゃない」

「ふざけるな。別に俺は一人でも出られた、もう一人が単に不甲斐ないだけで」

「そんなこと言われても、ねえ。別に僕がお世話になるって言うてるわけじゃない、神名とプラスアルファを預かって欲しいって言うてるだけ」

「いや、神名はいいけど」

「神名を預かるならプラスアルファもよろしく」

即答した神威に、青年は追い討ちをかけるように更に言葉を被せた。神威はぐつとつまる。

彼にとっては、女性に住むところがないというのは死活問題らしい。女性に関しては。先程までは一欠けらの躊躇いもなく斬り捨てたものを、今は頭を抱えて悩んでいる。

「……神威君、出来れば周りの目を気にして悩む体勢を取って欲しいな？」

「シャラップ！ 黙れ！ 俺は今人生最大の岐路に直面しているん

だ！」

「……そこまでか。神名、頼んだ」

青年はまるで暴れるように悩みのポーズを取り続ける神威に向かつてため息を零すと、最後尾で遠慮がちに二人を眺めていた少女に声をかけた。

少女は最初驚いたように翡翠の目を零れそうなほど見開いていたが、やがてこくりと頷くと、今にも地面に頭を打ちつけ始めそうな神威にそつと近付いていく。

「あの、魔王さま」

「くそ俺って奴はそんな薄情な——……って、ん……？ えと、どうした？」

「まだ会って間もないのに厚かましいお願いだとは承知しておりますが、皆様を、一時の間だけでも魔王さまのお城に住まわせて頂けませんか？ あの、えと、……お願いします」

「おけ。むしろ永遠にでも住んでくれ」

「うわあーあんなにあっさり」

先刻まであそこまで悩んでいた神威が、今度はあっさりと頷く。よかった、と神名がほっとしたように呟くが、後ろで聞いていた青年は呆れて肩を竦めていた。それも当然のことだろうが。

「まあ、何はどうあれそういう訳で。甘楽君兵童さん、異存はない？」

「ええ、どうせ行くところもないんで」

「右に同じ」

「神威君、依存は」

「ある」

青年は自分で若干イントネーションを間違ったかなあと思いつつ最後の返答は無視した。

「じゃあ、そういう訳で。——僕はしばらく行けないから、くれっぐれも気を付けてね神名」

「う、え、うん……？　しばらくって、黎はどうするの？」

「帝国の擾乱を放っておく訳にもいかないからね。まあ、捕まるよくなへマをしないつもり。追い詰められたって白を切り通してやるさ」

ひらりと手を振って、黎と呼ばれた青年は微笑む。

神名は不安そうに黎を見つめているが、彼はあえて見ない振りをして。

「じゃあ神威君、神名のことは頼んだよ」

「任せろ」

「……肩を抱くのはやめてくれるかな。えーと、プラスアルファは

……煮ようが焼こうがどうでもいいけど」

「よくないっスよ！？」

「どうでもいいけど。それじゃ、僕はこの辺で」

金の刺繍に飾られたマントを翻し、城の方へと帰っていく黎。神名はまだ憂慮の色を濃く残していたが、引き止めることはせずに後ろ姿を見送っていた。

黎の背中が見えなくなった頃、神威が仕切り直すように、黎を見送っていた三人に声をかける。

「よし、じゃあ、此処からは俺がお前らを案内するからな？　俺の命令に逆らったら殺すぞ。ちゃんとしてこいよ」

「うわ、神威さんあんまりですよそれ……」

「うるせえ。野郎に優しくする義理はねえし」

「うわああー……」

呆れたような声を上げて非難する青年を爽快に無視して、神威は歩き出す。

街の外れに出たせいか、人影は全く見当たらない。堂々と歩んでいく神威の隣に、とててと小走りで神名が並んだ。

「あの、魔王さま」

「ん、どうした？」

相変わらず神名には優しい態度である。その遠く後ろから甘樂が小さく非難の声を上げたが、神威はびくりとも反応しない。

「えっと……あの、遅くなりましたけれど、助けて下さってありがとうございました。それから、その——あの時言ったことは、……忘れて下さい」

神名は俯き加減に、捲し立てるように告げる。そして神威が何を言う間もなく、神名は、彼の後ろへとててと戻っていった。

神威は一瞬呆然として目を瞬かせたが、意味を理解しても、答えられる訳もない。

——わたしを貴方の、お嫁さんにして下さい。

助けた後の少女の声が、胸中で反響する。

あの時は帝国兵に見つかったお陰でうやむやに出来てしまったが

神威は頭痛にも似た鈍い痛みと、微かな頬の火照りを感じて、オレンジに染め上げられた空を仰いだ。

（――誓い、か）

《魔王》は何処かで恐れていたのかもしれない。《勇者》の手を  
取り誓約キスをする、神に弓引く謀反の行為を。

誓いは契り。契りは誓い。  
魔王は誓った。勇者は契った。

誓いの口付けは、果たされた。

我  
↓  
汝を愛することを誓う――。

↓ **勇者は魔王に盟約を（後書き）**

第一章はこれで終わりです。

……うーん、話を上手くまとめるのが苦手なのです……。

次回からは舞台が魔王城に移ります。伏線はまだまだ残っておりますがー。

## 《魔王の花嫁》（前書き）

今回から第二章入ります。

プロローグですので、短いですがどうぞー！

## 《魔王の花嫁》

誓いは契り。契りは誓い。

魔王は誓った。勇者は契った。

解ける事ない、まやかしのままの盟約を。

それでも亡者たちは祝福する。

青年と少女が巡り会う、何より幸福な運命に。

それでも生者たちは狂喜する。

雄と雌が惹かれ合う、何より寿ぐべき欣幸に。

それでも神々は恐怖する。

——勇者と魔王が結ばれる、保たれてきた普遍の狂氣的平和が崩れることに。

誓いを契り、少女は青年を愛することを誓った。

神が築き上げてきた遊戯盤セカイを叩き割る、謀反の歩兵ポーンが呪いの腕を振り上げる。

虚像の鏡をも砕き割る魔王の指は、しなやかに弦へと絡み天上の神へと弓引いた。

——罰されるべき存在。一体それは、何人のことであろうか。

罪の名は神。神は罰されるべくして生まれた、人の落とし子。

勇者は魔王の贄となりて、神を掲げるものではない。  
少女は青年の光となりて、神を打ち滅ぼすものなり。

(——この身が光の眷属<sup>ゆゑい</sup>である以上に、わたしは貴方<sup>あなた</sup>の何かでありたい)



## 《魔王の花嫁》（後書き）

第二章はコメディーよりになると思います。

↑ 白い小鳥が鳴く朝に（前書き）

二章は《神名の章》になっています。サブタイトルにもある通り、ですが。

一応各章ごとにそういうキーパーソンを決めているのです（\*、  
、  
（  
ノ

↑ 白い小鳥が鳴く朝に

目覚めれば、朝日が白いカーテン越しに煌めいていた。

見慣れない光景に、神名は何度も目を瞬かせる。

無風に揺れるカーテンだけではない、壁も、シーツも、天井に吊られたシャンデリアも。

白に埋め尽くされた景色は、神名の身にはとても覚えのないものだった。

（此処は……）

まだ完全には覚醒していない思考に、不安と恐怖が傾れ込んでくる。一体、此処は何処？

神名は震える手で自身の銀髪をさらりと梳いて、それが自分自身のものであることを確かめた。そんな何気のない仕草で多少の安心を得るが、漠然とした不安は未だ心の中で渦を巻いている。

「起きてたんだね。おはよう」

いまいちはずきりとしなない神名の思考に、澄んだ声がふいに凜と響いた。

はと目を上げれば、扉を放ち優しげな青年が佇んでいる。

——艶のある黒髪に、蒼穹よりも澄み深海よりも深い碧眼。

「貴方は……」

「僕は神威。——神名ちゃん、って言ったよね？」

神名の疑問を汲み取り、優しく微笑む青年。それは人懐っこく、

見る人を安心させるような笑みで、神名は不用意にもこくりと頷いた。

——ああ、そういえば、わたし。

青年を目にして、ようやく目覚める前の記憶を取り戻した神名は、ようやく自分が此処にいる訳を悟る。

そんな神名の様子に満足したのか、神威と名乗った青年は一層笑みを深め、ベッドの上に座り込んだ神名に手を差し出した。

「えつとね、とりあえず——朝ご飯を用意してあるから、一緒に食べよう?。」

その“城”は、広大すぎるほどに広がった。

幅広い廊下を飾る調度品や派手な装飾等はないものの、それは城と呼ぶに相応しい威厳と広漠さを兼ね備えている。

まるでそれ自体が古美術品アンティークのような、古色蒼然なりとも堂々とした佇まい。

神名は失礼かと思いつつも、荘厳な雰囲気思わず身を竦め辺り

の様子を横目で窺っていた。

(すごい……)

帝国の城のような華美な装飾はないにしろ、此処には飾らない美しさがある。

前を軽快に歩いていく神威の背中を懸命に追い掛けながら、神名は城の内装の美しさに目を奪われていた。

「えーと、気に入ってくれた……かな？　ごめんね、マークくんが壺とか壊しちゃって、今何もなくて……」

「へ？」

きよろきよろと見回す神名に、神威が少しペースを落として、何処か申し訳なさそうに呟く。

——壊した？

確かに調度品などは何もないが、敢えて置いていないものなのだと思います。それが、壊したなどという言葉が出てくるとは……。

「マークくんはあんまりインテリアになんて興味ないから、貰い物ばかりだったんだけどね。それを昨日、帰ってくるなり『女の子が暮らす城として相応しくない！』とか叫んで床に叩きつけちゃって」

「え……お、女の子って、わたしですか？」

「うんー。ごめんね？　マークくん女好きで」

「あ、い、いえ、わたしこそごめんなさい！　何だか、そんな価値のあるものを……！」

相手が振り返って困ったように笑うのを見て、神名は慌ててぺこりと頭を下げた。

それを見て、神威は再度くすくすと笑う。けれど、決して悪い気

はしなかった。馬鹿にされているなどという、そんな嫌な感触はない。

「神名ちゃんはいいい子なんだね。よかった」

「え、あ、あの、わたし別に……！」

神名が畏まるのも気にせず、神威は自分のことのように嬉しそうに微笑んで、軽快な身のこなしで前へと向き直る。

「マーくんは女の子だったなら誰でも連れて帰ろうとするから。……見る目がない、って訳じゃないんだけど」

「え……」

「節操はないよね」

困惑する神名に、神威は柔らかく笑った。けれど神威が前を向いているために、彼の表情までは窺えない。

神名はただ懸命に、歩幅の違う神威に着いていこうと、早足に駆けっていく。

心なしか、先程よりも、ペースが早い。

「——まあ、そんなの、僕が言う科白でもないか」

矢庭にふつと声のトーンを落とし、神威が呟いた。

そしてぱちくりと目を瞬かせる神名を肩越しに振り返り、柔和な笑みを浮かべる。

「ごめんね？ 歩くの速かった？」

「え、あ、……少しだけ。でも大丈夫です、気にしないで下さい」  
「駄目だよ。女の子に合わせなきゃ」

眉尻を下げ、諭すように言う神威。

女の子、というだけで識別されるのは、神名にとってあまり嬉しいことではなかったが、ペースが早いというのは正直なところだったので黙って俯いた。……が。

「僕がマークくに怒られちゃう」

「……え？」

出てきた予想外の言葉に、神名ははと顔を上げる。

「昨日も散々怒られたんだよ。てめえ初対面の女の子にキスなんてどういうことだって」

「あ……あう、あの、あれは……」

「ごめんね？ 他意はなかったんだけど」

それが他の人ならば他意も何もないだろうと怒るところだが、神威の無邪気な笑みに、神名は赤面しつつもこくりと頷いてしまった。怒るに怒れないのだ。それはまるで子供の悪戯のような感覚で、確かに他意など別がない。

「そ、それより——その。マークんとか、それって……どういう、ことですか？」

「う？」

「その……貴方は魔王さま、ですよ。でも、昨日のひとと少し違うというか……全然違うというか」

「完全に別物だね。そっか、マークんからは何も聞いてないんだっけ」

含み笑いを漏らしながら、ちらりと視線を投げる神威。  
神名がこくと小さく頷くと、神威は目を前へと戻した。

「うん、それも含めて色んなこと、僕から説明するね。だけどりあえず、お腹空いたでしょう」

「……はい」

神名は確か、昨日の昼から何も口にしていない。

倒れるほどに、という訳ではないが、さすがに身体が空腹を訴えていた。

この長い廊下だって、何処まで続くものか。見当が付かないのだから恐ろしい。

「ごめんね、歩かせちゃって。この先曲がったらすぐだから」

それでも、どうやらようやく終わりが来るらしかった。

ほっとして頷きつつ、神名は少しだけ足を速める。

「——ほら」

笑顔で神名を振り返る神威。

永遠にも思えた道程の向こう、やっと訪れた突き当たりだ。

そこを神威について左に曲がれば、相応の豪華な扉がどんと構えていた。

「甘楽君と兵童さんは先に待ってるよ。先に食べないようにってマ

ーくんが釘を刺しといたから大丈夫だと思っけど」

「あ、ごめんなさい……皆さんもお腹空いてるのに、わたしが遅かったせいで」

「ううん、気にしないで？ 甘楽君も兵童さんも文句一つ言わないで待っててくれたんだし」

取っ手に手を掛けながら軽快に笑う神威を見ながら、神名も釣られて笑った。よかった。何となく、上手くやっていけそうだ。

それに、昨日は成り行き上一緒にいただけの話だったが、甘楽や兵童という人たちも悪い人ではないらしい。

安堵して開かれていく扉の向こうを待ち望む神名。――が。

開かれた両扉の先方の光景を見て、神名の笑みが、固まった。

「……あの、えと、神威さん」

「う？ なあに？」

「……釘を刺すって、……比喻じゃなくて？」

「あーうん。マーくん短気だから」

そういう問題じゃないんじゃないかなという呑気とも現実逃避とも思える感想が神名の脳裏をよぎっていく。

そう。何と、隔てるものがなくなった部屋の中では、二人の男が釘で椅子に固定されていたのだ。確か二人の名前は、甘楽と兵童と言ったんじゃないかと思う。

釘を刺す。それは念を押すことでは決してなく、言葉通りの意味だったのだ。

「じゃ……、じゃなくてっ！ あの、大丈夫ですか！？」

神名ははっと正気を取り戻し、慌てて二人に駆け寄る。釘で固定されているのは服であつたために外傷はないようだが、二人とも何処かぐったりしていた。

「鬼……鬼っスよあの人……」

「鬼畜やら外道やら悪魔やら思いつく罵詈雑言を全て並べ立てても

足りねえぞ」

「お、お二人とも、しっかりして下さいー……っ！」

二人は何やら呪詛の言葉のようなわごとを呟き続けている。

そして助けを求めようと振り返れば、この騒動の張本人なのであろう神威が気まずげに目を逸らしていた。

それからおよそ二分後、二人に外傷はなかったものの、どうやら使われていたのは呪術によく使われる五寸釘であり、二人が疲れ切っているのは体力を徐々に削っていく呪いが釘に染み付いていたからだということが発覚した。

そうして、肝心の五寸釘が全て抜かれたのは、それから三十分近く後であったという。

閑話休題。

「じゃあ……改めて、自己紹介から始めようか」

にこりと微笑んで、神威はティーカップを静かに置いた。

ようやく落ち着いた食堂。先程までの慌てた空気はなく、何処か神妙に静まり返っている。

神威の提案に反対の声はなく、彼自身はそれを賛同と受け取った

のか、満足したように笑みを深めた。

「僕は神神威。えーと、一応この城の主……ってことになるのかな？ 魔王とか神殺しとか……色々呼ばれるけど、できれば普通に呼んでくれると嬉しいな」

人懐っこい笑みを満面に湛え、他の三人を見回す神威。それはもう聞いたことだったので、一種の社交辞令として、三人も適当に流す。

どうやら、流れは自己紹介という形に収まったらしい。

次に皆の視線が行ったのは、少ないメンバーの中で唯一女性である、神名の方だった。

慌てて神名は顔を上げるが、緊張しているらしく、僅かに肩を竦めている。

「えっと……わたしは、東華神名っていいいます。えと、昨日までは一応、魔物討伐隊隊長……でした」

昨日の出来事を思い出しながら言っているのだろっ、表情に一瞬だけさっと思が差した。

彼女が怖い体験をしたのであろうことは、他のメンバーも口にせずとも理解している。

そんな神名の様子を繕うように、次は甘楽が口を開いた。

「はいはい、俺は甘楽って言いますー。ってまあ……他に言うこともないんすけど。一応新入り帝国兵として働いてましたー」  
「てめえら“一応”って多いんだよ」

底抜けに明るい甘楽の言葉に、嘲笑とも苦笑とも取れない笑みを浮かべ、兵童が突っ込む。

甘楽が仕方ないじゃないっすかと抗議の声を上げると、兵童は呆れたように肩を竦めた。

「ま、とりあえず、だな。俺は兵童、見ての通りの脱獄囚だ」

傷の刻まれた左目は閉ざされたまま、ウインクにも見えるような表情で兵童はぐるっと三人を一瞥する。

確かに悪人面という言葉が相応しいような厳めしい顔をしているが、それでも何処か茶目っ気のある、子供のような無邪気さも持ち合わせているように思えた。

「兵童さん、ところで一応とりあえずってあんまり変わらない気がするんですが」

「ほっとけ」

甘楽の揚げ足取りにも、兵童はただ小さく苦笑を浮かべるだけで。

「——それで？ 自己紹介なんか適当に済ませたところで、一体どうすんだい」

右目だけの鋭い視線を神威にぴたりと定め、兵童は微かに笑みを浮かべたままで尋ねる。

それは他の二人にとっても疑問だった。聞きたいことや言いたいことは色々あるものの。

けれど神威はそれを見て制止するように無邪気に微笑むと、ぱつと人差し指を立てた。

「ちょっと待ってね。もう一人、まだ紹介が済んでないから」  
「もう一人？」

今度は甘樂が尋ね返す。神威は沈黙で肯定の意を返すと、おもむろに目を閉じた。

およそ、三秒。

そんな微妙な静寂が過ぎると、何が起こるのかと口を開けないでいる三人を前に、ゆっくりと神威が瞼を持ち上げる。

そしてその光景を目にして、三人が、小さく声を上げた。

——紅。

先刻まで空よりも澄み渡った青だった瞳が、血染めの紅に染められているのだ。

口元に浮かぶのは不敵な笑み。明らかに、先刻の神威とは違う。それは誰にでも感じ取れるほどの、異様な変化だった。

まるで別人——三人にはそうとしか取れない。が。

「そんで、俺が神神威——まあ一応同一、ってことにはなってるけどな。あ、マーくんなんてふざけたあだ名で呼んでいいのは神名だけだからな」

神神威。

魔王であり、神殺しさまであり、先程の男と同じ名前を名乗った青年は、そう言って軽々しく神名の肩を抱き寄せた。

↑ 白い小鳥が鳴く朝に（後書き）

更新遅れまして申し訳御座いません……！

部活がない日はもっと早く帰れるかと思っていたのですが、存外に帰宅が遅く（――；）

ですがそれなりに楽しかったです。三人称は相変わらず苦手ですが。

↑ マーちゃんとカーくん

「えーとまあ、僕とマーくんは一応同一人物だから……分かり辛いだろうけど、神殺しのかでカーくんって呼んでくれると嬉しいな？」

無邪気に笑って、神威は蒼穹の蒼さを湛えた瞳を細める。

主に自分に向けられたその言葉に、彼の目まぐるしい変化にも段々と慣れてきた神名は、こくりと殊勝に頷いた。

“カーくん”。先程の紅い目の彼がマーくんならば、確かによく似合う名前だと思う。

「しかし、分かんねえなあ」

どかりと椅子に何の遠慮もなく腰掛けた兵童が、溜息交じりにそう零した。

「二重人格つてのは他にも見たことあるけどよ、瞳の色が変わるなんてな」

「それに、お互い名前を付けて呼ぶなんて何か不思議っスよね。……まあ、名前を付けてるのは、カーくんが一方的にっただけみたいスけど」

甘楽は既にちゃっかり教えられたあだ名で神威を呼んでいる。

だが、確かにそれは不思議な話だった。“マーくん”と“カーくん”はまるで、別人物のようだ。

神名は小説の中でしか二重人格なんて言葉は聞いたことはなかったが、確かに何処か変だなと思う。

彼には二重人格というよりも、神威という人間の中に、二人の人がいるような印象を受けた。瞳の色が変わるということもそう。ど

ういう理屈で目の色が変わるのかは分からないが、ただの人格の問題ではないということは分かる。

「ま、考えても始まらない……か」

それでも口を開こうとしない神威をちらりと横目で見遣って、兵童は長い息を吐いた。

それよりも、と加えた煙草に火を付けながら、伏し目を上げる。

「これからどうするか考えなきゃな。魔王の住居に居候なんて、我ながら命知らずだぜ」

「べ、別に、取って食べたりしませんよ？」

「そうじゃねえよ、兄ちゃん」

慌てて両手を振りながら弁解する神威に、兵童は声を立てて笑った。

「嬢ちゃん、勇者ってのはつまり帝国で組まれた魔物を討伐する部隊の隊長のことなんだろ？」

「あ、はい。帝国で編成された魔物討伐隊の隊長のことを、略して勇者と呼びます」

「帝国は魔物討伐に一番力を入れてる国だからな。そこから逃げ出して魔王の城に匿ってもらうだなんて馬鹿の極みだぜ。しかも元勇者さままで一緒に来た」

兵童は愚痴を零すように呟いて、肩を竦める。

それを聞いて神名は、何だか申し訳ない気持ちになった。自分が一緒に来たせいで、事を大きくしてしまったのだ。

「……ごめんなさい」

「気にすんなよ、嬢ちゃん。あんたも切羽詰まってるんだし、あそこで帝国に留まるなんて言ったらそれこそ阿呆だ」

「それに、神名さんがいなかったら俺たち此处にお邪魔できませんでしたしね。結果オーライです」

けれどそんな神名の暗い気持ちごと、兵童や甘楽は笑い飛ばしてくれる。

彼らは帝国では一応罪人として捕まっていたが、神名には、彼らはそれほど悪い人たちには思えなかった。

——というかきつと、帝国の腐った貴族たちよりもよっぽど善い人たちのだろう。

「大丈夫だよ、神名ちゃん。たとえ帝国から追っ手が来たって、きつと何とかなるって」

「……案外楽天主家ですね。カーくん」  
「だって負ける気がしないもん」

当初の気弱さとは打って変わって、自信ありげに朗らかに笑う神威。確かに魔王や神殺しなんて異名を取るくらいなのだから、それは強いのだろう。

最初の出逢いからして、彼が只者ではないことは神名も理解している。が。

「帝国は軍事に関してはとても優れた国ですから……本気になれば重戦車での攻略などの近代的な武力行使もありえるかと思えます。そうなったら生身では太刀打ちできないかと……」

「おいおい、俺が牢に入ってた間にそんなに近代化してんのか。ま、ずいなあ、魔法ばかりに頼ってた時代は終わっちゃったってことか」

ぺしりと額に手を当て、兵童は顔を苦渋の色に歪めた。

帝国アシリスは魔法に長けている訳でも優れた武器職人がいる訳でもないが、戦争に関しては無敗を誇る強国だった。

進んで近代化を受け入れる国であり、未だ魔法に頼り切っている他国とは違う。兵一人ひとりとしては強くもないが、その策略や兵器については世界一と謳われるほどである。

「城を壊されるのは困るけど……建て直せばいいよね。戦車でも何でもドンと来いだよ！」

けれど、それでも神威は楽観的に笑う。単に世間知らずなのか何か策略でもあるのかは分からないが、多少は頼もしくも感じる。

「だって僕は神殺しだし、神名ちゃんは勇者さまだし、兵童さんは何か強そうだし、甘楽君は……うん」

「うんって何なんスカ」

「しぶとそう」

「褒めてないっスよね？」

褒めてるよーと笑う神威に、甘楽は納得できなさそうに眉を顰めている。が、そんな彼らを傍から見ていると何だか悩むのも馬鹿らしくなってきた。神名も一緒になって笑った。

何とかなるさと打開策を考えるのをやめるのは問題だが、少しくらい気を抜いてもいいのかもしれない。

「それより僕は、家事を分担したいなあ。さすがに四人分の生活を一人で負担するのは辛いし」

「あ、わたし、お料理とお洗濯はできますよ」

「はいはい、俺は掃除好きでーす」

「おい兄ちゃん、悪いが俺は何もできねえぞ？」

「大丈夫。兵童さんは元々頭数に入れてないから」

「入れてねえのかよ」

そう言って兵童は苦笑する。失礼だが、確かに彼に家事ができそうにはとても見えない。

思っ、神名は小さく吹き出した。気持ちが何となく明るくなっている。

「ま、帝国のことは後々考えようよ。それよりも僕は魔王城の中を案内したいなあ、お城の中は広いから」

神威は嬉々としてそう言う。どうやらうずうずしているらしい。子供みたいだ、と神名は思う。

けれど此処で生活するのなら、確かに城の構造くらい知っておいた方がいいだろう。この年で迷子になるというのも恥ずかしい話だ。そう思っ、神名はそうだねと賛成の声を上げる。実際、神名も楽しみではあった。城での生活は二回目だが、飾り過ぎないこの城は住むには心地いい場所かもしれない。多少広すぎる気もするが、それはそれだろう。

「やった、じゃあ行こう！ 兵童さんも甘楽君も早くっ」

無邪気に喜びながら、とてと神威は駆けて行く。

ぴょんぴょんと跳ねるその姿が微笑ましくて、神名は思わず顔を綻ばせた。か、可愛い。

「な、何だか、弟ができたみたい……」

「神名さん、あの人三十過ぎですよ」

そんな神名を見て、甘楽は呆れたように、そう呟いた。

城内はただただ広大で、同じ作りの扉がいくつも並んだ終わりの見えない廊下は、まるで迷路のようだなあと神名は思った。

「――あれはダンスホール。あと、あつちはギャンブル場だよ」

「ギャンブル場！？ な、何のためにあるんスカ」

「マーくんの趣味。マーくんも人を雇って経営すればいいのにねー、男は嫌だつて言つて聞かなくて。一体どんな女の子がマーくんみたいな胡散臭い人と二人きりになることを望むかって話んだけどね」

紹介された部屋の数々は、既に両手でも数えきれないほどになっている。一度説明されただけでは、とても覚えられそうにない。

広い部屋は目印として覚えておこうと神名は最初に決めて、今も神威の指差す方向を懸命に追っている。

「あ、あとあそこは女風呂」

「へえ、そんなものまであるんですねー。ところで男風呂は？」

「ないよ」

「はい？」

「ないよ」

神威は二度もあっさりと言い切った。甘楽は目を丸くして神威を見つめている。

神名はいくらか予期していたことではある、が。

「マーくんが野郎なんて部屋についてるバスルームで済ませとけっ  
て」

「ちょ、カーくんは反対しなかったんスか!？」

「広いお風呂は何だかお金が掛かってそうで怖い」

「この貧乏性!」

神威はひどく小心者だった。

二人の漫才のようなやりとりに、神名は思わず笑みを零す。

「面白い兄ちゃんたちだなあ」

そんな神名の思いに同意したように、兵童がぼつりと呟いた。  
彼もその敵つい顔に、微かな笑みを浮かべている。  
きつと優しい人なんだなと思いながら、神名は頷いた。

「何だか……微笑ましいですね。弟みたいです」

「……どっちも嬢ちゃんよりは年上だけだな」

「男の子って何だか、精神年齢低いですもん」

だろうな、と兵童は笑う。

勿論黎のように落ち着いた人もいるにはいるが、神威や甘楽は落ち着いてない人間の代表格である。

神名が生まれ育った平民という階級の男の子は、大抵精神年齢の低い子供ばかりだったと思う。甘楽や神威も平民の子だったのだろ

うか。

「なあ、それよりよ。嬢ちゃんに一つ、聞きたいことがあるんだが」  
「？ 何でしょう？ わたしに答えられることならば喜んでお答えします」

微笑んで返すと、兵童は何故か驚いたように目を丸くした。  
何か悪いことを言っただろうかと首を傾げていると、兵童は微苦笑を浮かべて。

「本当にいい子なんだな、嬢ちゃんは。城にいる奴なんて大抵嫌味な奴ばかりかと思ってたが」  
「ありがとうございます。……変わってる、とはよく言われるんですけどね」

はにかんで答えると、そりや違いないと兵童は声を上げて笑う。

「いい意味で変わってるよ、あんた。俺は好きだぜ？ そういうの」  
わしゃりと頭を撫でられる。

子供扱いだとは思ってたが、悪い気はしなかった。何だか父親みただ。柄は悪いが。

そんな神名の心情を知ってか知らずか、笑ったままで兵童は続ける。

「ああ、それでさっき言った『聞きたいこと』なんだが——まあ、答えたくなかったら答えないでいいぜ」

兵童の質問ならば出来るだけ答えるつもりではいたが、彼の不器用な心遣いに、神名は素直にこくと頷いた。

「嬢ちゃんは元でも一応でも勇者だった訳だよな？」

「あ、はい」

「まあ、つまりは魔物討伐隊に加わりたいと自分から志願した訳だ。つてことは魔物に恨みがあるんだよな？　で、魔王つてのは魔物たちを束ねる王だ。魔物に恨みがあるつてんなら、魔王は宿敵じゃねえのか？　何で神威の兄ちゃんに着いてくる気になったんだい？」

鋭い隻眼を神名の方に向け、淡々と尋ねる兵童。

神名は思わず、返答に詰まってしまった。

何処から説明すればいいものか。勿論、理由がない訳ではないのだけれど。

「……ええと、わたしは……その。上手く言えないんですけど、何か魔物に恨みがあつて勇者に志願した訳じゃないんです」

「と、言うത്？」

「わたしが勇者になろうつて思ったのは、帝国貴族の民を顧みない政治が嫌だったからなんです。わたしは平民の出で、教養もないし権力もない。でもせめて持ち前の運動神経を活かして勇者まで上り詰めれば、政治での発言権もいくらかは与えてもらえるかと思ったから」

「……成程ね」

煙草をふかしながら、兵童は渋い顔をする。

「でも、事実はそうじゃなかった。だろ？」

「はい、勇者だったのはほんの数日でしたからよく分かりませんが……多分。貴族はみんな自分中心で、わたしに発言権なんて全く与えてくれませんでした」

神名は目を閉じて、数日間の出来事を思い出す。神名が出しゃばることにいい顔をしなかった元老院の面々や、調子に乗った公爵のにやけた顔。

帝国貴族は傲慢でプライドが高く、その上意地汚い人間ばかりだった。黎がいなければ、本当に暴れていたかもしれない。

「勿論わたしが失礼だったことも分かっていますし、こんな小娘に政治のことにまで口出しされたくはないでしょうけれど……」

くつと唇を噛む。悔しい。

思い出せば思い出すほど、無念で仕方がなかった。

「よしよし、事情は分かった。あんたは優しい子なんだな、嬢ちゃん」

「……兵童さん」

わしわしと頭を撫でられ、小さな子をあやすような猫撫で声で諭される。

「あんまり思い詰めるな。そんなら多分、兄ちゃんに着いてきたのは正解だ」

「え？」

「何たつて魔王だからな。真偽はともかくとしても、本人がそう言ってるんだ」

笑みを口元に深く刻み、兵童は目を細めた。

悪戯っぽい光が宿るその目元に、神名はぱちくりと目を瞬かせる。

「実を言つとな、俺も帝国貴族には借りがあるんだ。皆で思い知らせてやるっぜ？ 帝国の豚どもによ」

そうしてはちゃんと、兵童は不細工なウインクを一つした。

↑ マーちゃんとカーくん（後書き）

今日だけで全て書き上げました。頑張ってるんだか頑張っていないだか分からないですね（。 。 ） うわーい。

うう、三人称苦手なんです……。毎回言ってますが。

でも後半は筆の乗りがよく、案外時間がかかりませんでした。帝国貴族がめったんこに貶されているのは仕様です。

今回は多分マーくんのターン。コメディーまだまだ続きます。

↓ 魔王と罠と謀略

「りんごー」

「五悪趣」

「えと……シュークリーム」

「無悪不造」

「う……うに」

「二化螟蛾」

「ああもう何かどつから突っ込めばいいのかわかりませんがさつきから何なんスカそれ!？」

「最後は何か気持ち悪い虫の名前だ。思い出すだけでおぞましいぞ」

あつさりと言い放ち、神威は暇を持て余したかのように軽く目を瞑る。

そんな彼の様子に、何でこんな人を誘ったんだろうと甘楽は思わず深いため息を零した。

甘楽たち三人が半ば強制的に押し掛けて魔王城に住み始めてから、もう六日目になる。

時の流れとはかくも早いもので、帝国からの追っ手が来ないかと警戒するもそれらしき影は見えず、何だかんだで過ごすうちに五日間が過ぎていた。

勿論平和なのはいいことなのだが——それを甘楽は物足りなくも感じる。正直なところ、甘楽は退屈で退屈で仕方なくて、まず常識的な答えなど期待できるはずのない神威としりとりを始めているほどだった。

「ていうかお前も何だ食い物ばかりで。もつとないのか、何か色気のあるもん」

「……神威さんの言ってるものに色気があるようにも俺には思えないんすが……」

「あるだろ。五悪趣とか……ああ、口に出すだけで何て素敵な響き」

「気持ち悪いっスよ!？」

「冗談だタコ。真に受けるな」

神威の冗談とは思えぬ口振りと物騒な言葉に、いちいち大仰な反応を示す甘楽。

しりとりならば神名や兵童とでもできそうなものだが、神名は正午が近い為か厨房にこもってしまっているし、兵童は朝から何処かへ出掛けてしまって不在である。けれど甘楽はそれを心配することなく、ただ感想は『しりとり相手の相手がいなくなっただけであつた。』

「ていうか神威さんって、色んな意味でつくづく謎ですよ……いや、神威さんとしりとりなんかしようとした俺は馬鹿ですけど。分かりますからみなまで言わないで下さい」

「何も言つてねえよ。婉曲に馬鹿にしてんじゃねえぞこら」

「まさか、誤解っスよ! 遠回しなんかじゃなくて堂々と馬鹿にします」

「……はっ倒されてえか？」

甘楽は再びまさかと呟いて震え上がる。冗談などではない。

神威の異常な身体能力は帝国の城を抜ける時に十分なほどに目にしている。二人の兵士をいとも容易くのしてしまったことといい、その矛先が自分に向くなんてとんでもないことだ。からかっていて楽しいのは紛うことなき事実だが。

「いや、冗談じゃなく、ですね。神威さんってぶっちゃけ何なんスか? そこらへん聞きたいんですけど」

「神」

「今の戯言は聞き流してあげますので真面目に答えて下さい」

甘楽は笑顔で流した。ちっと神威が舌打ちをするのが聞こえたが、それもあえて聞かなかったことにする。

「だから魔王だ、つつつてんだろ？ あー、お前みたいな小僧が知ってることといったら……そうだな、十五年前に処刑された“神殺しさま”って言えば分かるか？ あの頃は結構高名だったんだぞ」  
「今も十分高名でしょう……子供の頃聞かされましたもん。『悪戯すると神殺しさまが迎えに来るぞ』って」

「俺は死神か。恐怖の対象かよ」

「結構怖いもんっスよ？ 俺親に散々脅されて泣いた覚えあります」  
「……………どんだけだ……………」

呆れたようにがっくりと肩を落とす神威。

甘楽は成長した今でも、そんな風に言われた記憶はまだ残っていた。神殺しさまと言えば親の躰け文句で、子供にとっては畏怖の対象である。

と、そこまで思い出して笑いそうになっていたところで、ふと疑問がふつりと沸いてきて甘楽は思わず首を傾げる。

「そっいえば神威さん。神威さんっていうかつまり神殺しさまは、十五年前に処刑されたんですよね？ それじゃあ何で今此处にいますか？ それっておかしくないですか。亡霊ですか、地縛霊ですか？ それとも何かあれですか、自分が神殺しだとか信じ込んじやった電波系のイタイ子ですか」

「……………てめえ亡霊さまに対する態度がなってねえな。呪い殺すぞ？」  
「あああ、やっぱり亡霊なんですか！ 悪霊退散ーっ、亡霊は大人しく成仏して下さい！」

「ふざけんな。てか塩かけんな、ちょっと試みてみただけだろ。俺は亡霊じゃねえっての」

「え、じゃあ何なんですか」

心底不思議そうにきょとんと目を丸くする甘楽に、神威は盛大なため息を吐いた。明らかに呆れられている。

「だーかーらーな！。お前、考えてみろよ。神殺しさまが処刑されたなんて、誰が言った戯言だ？　そもそもその事実にも矛盾を感じねえか？　神を殺したような奴を、誰が処刑できるんだよ。まあ俺なんだけど。神殺し<sup>おれ</sup>が嫌だと言って暴れたらそんなの手に負える訳ねえじゃねえか」

「……ああ。言われてみれば」

「お前、軽いな……」

明らかに感嘆ではなく呆れから出た皮肉だったのだが、甘楽は何故か照れたようにいやあと頭を掻く。

もう訂正する気も起きずに神威は肩を竦めると、続きの言葉を紡ぎ始めた。

「つまりな、俺は処刑されてない。死んでなんかいないんだよ、そもそも。分かるか？」

「……成程。でも、そしたら何でそんなデマが出回ったんスかね？」

神威の説明に素直に頷きつつも、感じた疑問を甘楽はそのまま口に出す。

知らない者からしてみれば当然の疑問だった。

処刑されてもいないのに『処刑された』なんて流言が世間を賑わせる。火のないところに煙は立たぬと言うが、まさか何の根拠もない噂がそこまで出回ることはないだろう。だから余計に不思議であ

ったのだ。

「あー……それはだな。処刑……はされてないが、えとな、複雑な事情があつて……」

「複雑な事情つて何スカ」

「そこは……あれだ。………お前空気読めよ！ 空気読んでそこは触れるなよ！」

「ええ！？ そんな理不尽な！」

言い難そうに表情を歪める神威に、先を催促する甘楽。けれど神威は困ったように眉尻を下げたかと思うと、突然逆に怒り始めた。どうやらそこまでしても話したくないことらしい。

そんな神威の変貌ぶりに焦った甘楽は、意味もなく手をぶんぶんと振る。傍から見ていれば、なかなか滑稽な光景であつただろう。けれど神威もそれが馬鹿らしくなったのか、一つため息を零すと、ぽつりと言葉を押し出した。

「……いや、まあ、正直言つとな、あれだ。処刑つつうか封印されてたんだよ」

「封印……、っスカ？」

「つて言つと、また語弊があるんだけどな。まあ、俺は捕まつて――その、呪いをかけられたんだ。所謂……神なんて存在への反逆の罪でな」

「えええ、神威さんだっさい……。捕まっちゃうつて……捕まっちゃうつて」

「そこ黙れ！ 仕方ねえだろ、油断してたんだから！」

「油断してたのが仕方ないんスカ？ ていうかそれでも十分矛盾ですよ。神殺しじゃなかったんですか？ うわー、そんなんじゃ神名さんに嫌われちゃうんだ」

「うるっせえつつつてんだろこのスケコマシ！」

「すけこまは神威さんでしょう!？」

ひどく幼稚で短気な二人は、自分の非をお互い認めようとせず  
ぎゃあぎゃああと騒ぎ出し叫び合う。

神威などは、仕舞に手元にあった椅子を持ち上げ投げつけようと  
する始末だ。

「ちょ……っ、神威さん神威さんそれはさすがに反則っすよ!？」  
「う、る、せ、え。てめえなんて椅子の角に頭ぶつけて死ね」

あまりにも幼稚な言動だったが、そんなことを言えば本気でその  
手に持ち上げられた椅子を投げつけられるのが目に見えていたので  
甘樂は何も言えずただ沈黙する。

幼い子供と違うのはただ一つ、その力の差だ。幼い子供は二人掛  
けの椅子を持ち上げて投げつけたりなどしない。その分神威は性質  
が悪いとも言えるだろう。というか性質が悪すぎる。

「そ、それより、それよりもっ! 何で呪いかけられただけで処刑  
なんてデマが流されたんスか!？ そ、そこら辺詳しく聞かせて下  
さい! お願いします!」

気を逸らす為に、先程の話の続きを催促する甘樂。

が、それを疑問に思っていたのは本当のことだったので、神威も  
分かってくれたのかふむと椅子を下ろしもう一度腰掛ける。

「ん、まあいいさ。話してやろう」

上からの物言いではあったが、今更指摘する気にはならず甘樂は  
黙って先を促す。来て五日目で早くも殺されたくはない。

「——まあ、つまりはその呪いの性質がな、多少厄介な奴だったんだよ」

「厄介？」

「ああ。んー……何て言えばいいのかな。端的に言っちゃえば、存在を消す呪いっつか……」

「それってつまり、殺すってことじゃないんすか？」

「いや、そうじゃなくてな、生きながらに世界から存在を排除する——ってああもう面倒くせえ！ 何だお前！ 呪術を知らない相手に呪術のことなんて説明できるかつ！ 勉強してから出直してこーい！」

「そ、そんな理不尽な！」

先刻も交わしたようなやりとりを繰り返す二人。内容は決して軽いものではないはずなのに、彼らの功績によってそれらはとても軽い会話になっている。

「だからな、つまり！ 術者以外の人間から存在が認知されなくなるってことなんだよ！ 簡単に言っと！」

「何で切れながら言うんすか！？」

「野郎にこんなことを一から説明してて何が楽しいか！」

「女の子だったら楽しいって言うんですかこの変態！」

「ああ楽しいさ！ 楽しいに決まってるだろ！」

またもや二人は椅子から弾かれるように立ち上がり、ぎゃあぎゃああと騒ぎ出し叫び合う。

止める者が今この場にいないことが不幸だった、と言うべきか。だが、神威の言っていることはとても神名に聞かせるべき言葉ではなかった。

「ああもういいです神威さん！ この女誑し！ それより、だった

「何で今こうやって認知されてるんですか」

「んなの決まってるだろ！ 呪いを解いたんだよ」

「へー」

「……。……軽いなお前」

「疲れました。叫ぶことに」

へにやりとソファに倒れ伏し淡々と告げる甘楽に、神威ははあとため息を吐いた。

彼もまた何かを言う気力も失せたらしい。

前髪をぐしゃりと掻き上げると、ぽつりと心情を吐露し始める。

「本当はな、二度とこの世に出てくる気なんてなかったんだぞ？」

「へー」

「……。……お前のその軽い反応ムカつく。もっと驚いてみせろ下等種族が」

「いや、その扱いもあんまりなんスけど……」

今度は甘楽が呆れる番だった。

けれど神威は知るかよと唇を尖らせて一蹴する。

「じゃあ何で出てきたんですか。出てこなくていいのに疫病神」

だが軽い反応の代わりに余計なことを言っただけに、甘楽は神威に軽く爪先で蹴飛ばされた。

「だーかーらーな！。お前本当にムカつくな！ 蹴り飛ばすぞ！？」  
「もう蹴ってます神威さん」

どうやら神威は口と足が同時に出るらしい、と甘楽は思う。  
けれどそれではあまり意味がない。が今更そんな説教を神威にし

たところで無駄だろう。

「俺はな、騙されたんだよ！ あ爺……畜生、何が俺を憎む勇者を罫り殺すだ。ふざけんなよ……」

「え？ 勇者？」

思い出して憤慨しているらしい神威の言葉に、甘楽は思わず目を丸くした。

勇者。神威は確かに、そう言った。

魔王を憎む勇者——と言えば——。

「甘楽さん、マークン！ お昼ご飯できましたよ！」

ちらりと目を移したキッチンの方から、タイミングよくと言うべきか、白いエプロンを身につけた神名が姿を表す。

今では魔王城などに世話になっているものの、彼女は紛れもなく勇者であつた身だ。

神威の言いたいことはいまいち要領を得ないが、彼を恨む勇者とは彼女のことなのだろうか。

「おー。よし、甘楽、とりあえず話はここまでな」

「え、ちょ、神威さん、まだ聞きたいことが」

「知るかよ。俺の下らない過去話と神名の作ってくれたご飯とどっちが大事だてめえ」

「下らないって！ ていうか神名さんってところをさりげなく強調しないで下さい！」

けれど神威は既にそれ以上話す気はないらしく、食卓の方へとついてしまっている。

——どうやらこれ以上は何も聞けそうにない。

甘樂はそう判断すると、彼もまた昼食にありつくべく、仕方なくソファから腰を上げた。

「あのう……そういえば、兵童さんは？ 朝から姿が見えないみたいですけど……」

「あー気にすんな。あんなオヤジ、いても目の毒にしかならん。俺は神名が見えてればいいんだ。眼福眼福」

「え……」

「神威さん、それセクハラっスよ」

何だかんだで和気あいあいと昼食を賞翫する三人。

そうこうしているうちに、甘樂は先程までの疑問と違和感をすっかり忘れてしまっていた。

（勇者ってことは……つまり、神威さんは神名さんを殺す気だったんすかね……？）

（——というか。騙されたと言うならば、つまり、それは誰かが神名さんを殺そうとしているんじゃない）

↓ **魔王と罾と謀略（後書き）**

二化螟蛾…メイガ科の蛾。大害虫。何か気持ち悪いの。

甘楽くんは頭は悪くないはず……と信じてます。たぶん。  
神威くんはそんなに頭よくないと思います。きっと。

次回更新は来月、になると思います。

↑ 荒野の上に浮かぶ城（前書き）

次回更新は5月中と言ったのに、予定よりも大幅に遅れてしまい申し訳御座いません！

すみません、言い訳にすぎませんが定期テストや修学旅行など色々学校の方が忙しく、

次回からはまたいつも通りに更新できると思います……！ 待っていて下さった方、本当に申し訳御座いませんでした！

では、第二章四話です。いつも通り、貴方様のちょっとした暇つぶしになることができれば、それが何よりもの幸せです、

↑ 荒野の上に浮かぶ城

眼前には、灰色の風が吹き荒ぶ見渡す限りの荒野。

広大で荒漠とした、世界の果てまで続いていくんじゃないかというほどの平坦な大地に、神名は目を凝らした。

世界は静寂をも呑み込み、地平線までも流れていく。優しく、いとおしく、——そんな世界。神名の深緑の双眸には、そんな流れていく世界の一端が映っている。

神名は今、城の三階に据え付けられたバルコニーともいえないようなただっ広いバルコニーで、鍛練——つまりは剣の稽古のことだが——を終えたところだった。

鍛練は彼女の昔からの習慣というかどちらかというともしる癖に近く、十にもならないうちから剣を取り懸命に振り回していた神名にとっては、それは食事や睡眠をとること、さらに言ってしまうば呼吸をすることと同じようなものだった。それ故に、神名は雨の日だろうが雪の日だろうが毎日欠かさずに鍛練を行っている。

そして最近、その後の慣行である剣の手入れの前に、暫く静寂の中でただ荒野を眺めるのが彼女の新たな習慣となっていた。

この荒野は風こそ吹き荒れ砂塵を巻き上げるが、砂色の雲から降る光はとても柔らかい。朝晩は冷え込むものの、昼頃には心地良いほどの温もりを残すこの温暖の大地を、神名はひどく気に入っている。

そのために神名はいつも眺めのいいバルコニーで鍛練を行い、それが終わった後は、暫くの間白い手摺りに凭れて遠い地平線を眺めていた。

（綺麗だなあ——）

寂寞の地。風が舞い上げる銀砂だけが囁き合う。秘密の群れたち。此処は、十数年前のある晩、突如として消えたという“亡国”リンドグラッセの面影だ。

その頃の神名は自国を出たこともない——と言っても出たのはこれが初めてだったのだが——稚い子供だったためにリンドグラッセという国のことを含む事件の詳細までは詳しく知らなかったが、それは人間の叡智と驕る学者たちの手によっても未だ解明されていない、史上最大且つ最悪の失踪事件だ。当時帝国とも張り合うほどの大国であつたリンドグラッセは、何の前触れもなく、その住人たちとともに一夜にして消えたのだ。聡明で俊秀であつた孤高の王の突然の消失には、世界中が尋常ならざるショックを受け、十五年前のある事件による“神の不在”も相まって、世界は一時期崩壊寸前までも追い込まれたという。

人も、作物も、動物も、建物も、全てが奪われた後に残ったのは、ただ砂が舞い上がる荒漠の荒野と。

——それに、それより前に建てられたというこの“城”だけ。

(……思えば、ふしぎな話)

御伽噺みたいだと、馬鹿にする気は全くなく純粹に神名は思った。消えてしまった住人たちや、その他に残された遺族——消えた住人は数年にわたる審議を経て一応死亡扱いとなっている——には申し訳ないが。

自分が今立っているこの城の周りも、かつては人々の喧騒で賑わっていたのだ。

風の音さえ鮮明に聞こえる今ではそんなことはまるで想像できないが、此処に国が存在していたのは疑いようもない確かな事実だ。では、何故それらは一夜にして消えてしまったのだろう——。

ひとり黙想に耽る。そんな時間が神名は好きだった。

気が付けばいつものかなりの時間が過ぎてしまっているのだが、それでも誰かが神名の時間を邪魔することはない。たまに神威が心配して無事を確認しに来ることはあるが。

今、黎はどうしているだろう。捕まってはいないだろうか。残してきた家族はどうだろう？ 自分のせいで罪に問われていたりしないだろうか。圧政や重税に苦しんではないだろうか――。

ふと脳裏に浮かんできた、とりとめもない思考が流れ込んで消えていく。吹いては去っていく砂色の風のように。舞い上げられた砂はきらりと日を反射して輝いて、掴む間もなく神名の視界から流れていった。

一瞬。時は、一瞬なのだ。待つてはくれない。

「……わたしが、頑張らなきゃ」

誰にともなく呟いて、神名はようやく立ち上がった。腰には細身のレイピアを。右手で探り寄せた、汗を拭くためにと持つてきていた白いタオルはいつの間にか砂にうずもれている。

一体どのくらい沈思していたんだろう。思いながら神名はそれを空いた左手で払い、砂の流れる荒野に背を向ける。明日も来るよと誰にともなく口にして、彼女は寂寞のバルコニーを後にした。

「おかしいっスねえ、カーくん」  
「な、何が？」

甘楽は心底不思議そうに呟いて、首をゆっくりと傾けた。  
そんな甘楽の科白にびくりと肩を震え上がらせる神威を、ぱちくりと瞬きながらじつと彼は見つめる。あえて感情を込めていない明澄な双眸。

「俺はたしか昨日、冷蔵庫にショートケーキを入れておいたはずなんですが……？」  
「……う……っ」

冷蔵庫の前に立ったまま、甘楽はまたもぼんやりと呟いた。  
呻くような声を聞いたのはきつと間違いではないだろう。現に苦虫を噛み潰したような、というかむしろ泣き出しそうな表情がこちらをふるふると震えながら見ている。

「おかしいなー。一体何処にやったんでしょね？ 気のせいかな。  
折角神名さんに作ってもらったのに」

「……う、えう……」  
「そっついえばー、昨日は神威さんが甘い物食べたと言ってた気がしますけどー。関係ないっスかね？」

あうあうと何故だか半泣きになっている神威に向けて、甘楽は首を傾げておかしいなあと何度も繰り返した。そして、冷蔵庫の前からわざとらしく歩き出し、神威がちょこんと正座しているソファ―

の左端に腰掛けてさらに同じ言葉を零す。

おかしいなあ。何処やったんだろうなあ。誰かが食べちゃったのかなあ？

何度も反復するうちに、甘楽の予想通りに神威はふるふると震え出し、やがて、ついにがばりと甘楽の前に身を伏せた。

「ごっ、めんなさああああい！ 僕がつ、ていうかマークくんが食べちゃったんですうっ」

「やっぱりっスか。……てか、他に食べちゃう人はいないだろうと思ってましたけどね」

「ふえええごめんなさいいい、マークくんが昨日の夜こっそり……神名ちゃんの寝顔を覗き見た後に！」

「うわああの人相変わらず気持ち悪いことを」

罪悪感に揉まれたか、小さく丸まったまま自白する神威。だがむしろ聞きたくない事実まで聞いてしまったような気がした。相変わらず犯罪染みたことを。

今は沈黙しているもう一つの人格の自信満々の笑みを思い出して、甘楽は思わず嘆息した。まさか、こんな無法の地では犯罪も何も関係ないともいう気か。……というかむしろ、そういう目的でこの地に城を建てたのではないかと疑ってしまう。城を建てたのはまだこの地に国が存在していた頃のはずだから関連性は認められないだろうとは思うが。

そんな割と失礼に値するようなことを考えながら、甘楽は神威を見下ろした。神威はまだ小動物のように震えている。

「まあいいっスけど。今さらカーくんを締めたって意味ないですし」「ほ、本当ごめんなさい……」

しょんぼりと頭を垂れる神威。悪いこととは分かっていたらしい。

随分と殊勝な態度だ。

「……神威さんとカーくんって本当に同一人物ですか？」

「ふえ？ い、一応そうだよ……？」

「一応って何スか。何だかあんまりに怪しすぎるんですが」

ふと思い、甘楽はそのままを口にして尋ねた。けれどきょんとする神威に、もう一人のことを“マークくん”だなんて呼んじやうし、と愚痴っぽく呟く。

そもそも性格が違いすぎるだろう。二重人格で済まされるレベルなのだろうか。

今甘楽の目の前にいる青年は、これでもかというほどに弱気で感傷的で腰抜けで腑抜けだ。

「い、今甘楽君、僕のこと何かすごく馬鹿にしなかった……？」

「え？ 気のせいじゃないっスか」

そして、ばつさり斬り捨てられると強く出られない。

……それに比べ、今この場にはいない、というと多少語弊があるかもしれないが——とにかく今は顕現していない目の前の青年のもう一つの人格は、暴力的で、女好きで、自分勝手に、加え自意識過剰。そして言動が限りなく犯罪に近い。

今眼前で不安そうに甘楽を見上げている青年とはまるで違い、強気で強気で強気でとにかく強気だ。強気どころじゃ表せないようなナルシスト自分信奉者だ。まるで別人のように違う。——否、正反対だからこそ、二重人格と呼べるのかもしれないが。

だがまあ、そんなことはいい。考えても分からないし、本人も教えてくれないのだ。それよりも。

「……ま、それじゃカーくん。食べてしまった物は仕方がないんで、

神名さんに新しくワンホール分貰ってきて下さい」

「……え？」

「勿論ちゃんと事情は説明して下さいね。それから、俺はもういいんで、ワンホール分全部一人で食べて下さい」

「……か、甘楽君？」

につこり。陳腐だが確かにそんな擬音がつきそうな満面の笑みで、甘楽は神威に向かって告げた。

勿論、そんなことをすればどうなるか、甘楽は微細にわたってシミュレート済みである。

神名は普段の生活においては心優しい少女であり、彼女が目に角を立てるなどということはまず想像できない。……が。

彼女は貧困層とまではいかないものの、人並みに貧しい暮らしの中で物資を分かち合いながら生きてきた少女だ。それ故、ルールや平等などということにはとても厳しい。

何日ともに過ごすうちに、他の三人の中で神名はただの“心優しい少女”の印象を打破しつつあった。

「あ、勿論勝手にケーキを食べちゃったのはもう一人の神威さんなんで、そっちの方で謝ってきて下さいね？」

「う……えうえう……」

「あれ、まさかできないなんてことはないっすよねえ？ 《神殺し》さま」

甘楽が笑って止めを刺すと、神威はついに跳ねる勢いで立ち上がった。ぱつと大粒の涙が散る。

「じつ、めんなさあああい！ 僕っ、神名ちゃんに謝ってきますすっ！」

そしてそのまま走り去ってしまった。……やはり罪悪感には勝てなかったらしい。

それかもしくは、甘楽の怒りを鮮明に感じ取ったせいかな。

「ま、何にしる面白いからいいんすけどね」

甘楽は独り言ちて、ソファアの背もたれに体重を預けた。

「——やれやれ、兄ちゃんも結構な悪党だなあ。あえて弱い方の兄ちゃんを虐めるなんてな」

「あれ、兵童さんじゃないスか。いたんですか？」

「さっきからな」

古い煙管をふかしながら、しみじみと呟いた兵童もソファアの背もたれに腕を乗せる。

いつの間に部屋に入ってきていたのかは知らないが、それならば分かっていて見ていた兵童も十分な悪党だろう。とは、甘楽は口にはしなかったが。

二人とも同じく視線を神威が走り去った方へと交差させ、どちらからともなく、ため息を零した。

「……一体、何なんだろうな？ 神威の兄ちゃんはよお」

「さあ。……二重人格なんて生易しいものじゃないのは確かだと思えますけど？」

甘楽のおどけた口調に確かなな、と皮肉混じりに兵童も呟く。神威が何かを隠している様子は伝わってくる。彼が抱えているのが二重人格などという障害ではないということも。

神威は自分たちの宿主である以上に、言葉は悪いが、危険な要観察対象であることを彼らは理解していた。《神殺し》だと名乗る以

前に、神威は根本的に何か自分たちと違うのだ。

だが、それならば彼は一体何なのか——その答えは、終ぞ出ることはなかった。

「……やれやれ。まるで猛獣を手懐けてるような気分っスよ、全く」

我ながら言い得て妙な譬え方だなと、言って甘樂は深く長い息を吐き出した。

↓ ふたりの神殺し

「どう思う？」

どんな光をも通さない漆黒の髪と双眸が、まるで昼下がりの太陽を食むように不吉に影を匂わせる。

世界の半分近くを翼下に従えた、大帝国の頂点に君臨する皇帝アシリス十三世——もとい異魔<sup>イマ</sup>黒夢<sup>クロム</sup>という青年は今、普段の執務室の無機な机の前ではなく、王城の美しき中庭の青草の上に寝転がって雲が駆け抜ける蒼穹を仰視していた。

彼は黙って佇んでいれば温厚で逞しい親切な町人のように見えなこともない凡庸な顔立ちをしているが、微かに浮かべるその笑顔の裏には、何かどす黒い一物を抱えている。傍にいる人間にはつくづくそう感じさせる、奥の知れない人物だった。

「どう思っつて、どういうことだよ」

ぼつりと呟かれた独り言のような科白に呆れるように笑って答えたのは、黒夢よりもやや低音を取ったもう一人の声だ。その声自体は低いものの、その口調に含まれた稚い無邪気な響きは人に与える印象を幾分幼くしている。

黒夢の隣に頭の後ろで腕を組んで寝転がったのは、彼の親友である瑠伽<sup>ルカ</sup>という男だ。彼は曲がりなりにも皇帝という立場にいる黒夢に対して敬意を払う様子を微塵も見せず、それどころかまるでからかうように笑んでいる。

それ故に彼は黒夢の親友であり、幼馴染であり、そして相応の役柄を持つ官吏でもあった。

頑是なく笑う瑠伽は、黒夢と同じ——といっても色彩は些か薄い

が――闇色の長い髪と同色の鋭い眼を生まれ持っている。それも黒夢が彼に親近感を覚える理由ではあるし、たとえそれがなくとも、こうやって私的な時間とともに過ごすほど親密な関係ではある。勿論公的な場では形式上の敬体は使われるが、正直、黒夢にとってはこうして砕けた口調で談じている方が楽だった。

黒夢もからかうような瑠伽の笑みに答え薄く笑みを浮かべると、更に言葉を続ける。

「省略せずに言おうか。どうしたらいいと思う？」

「……尚更駄目じゃないか」

呆れた瑠伽の口調に腹を立てることもなく、黒夢は目を細めた。その答えを予期して言葉を紡いでいるためだ。その様子に、瑠伽はゆっくりと上体を起こして嘆息する。

「そもそも……“どうしたらいい”ってお前、何がだよ。開口一番それじゃ何が何だか分からんぞ」

「一つしかないだろ。どうしたらいいか迷ってることなんて」

「さてねえ。税の引き上げのことだったか、それとも最近困った街娼<sup>ガ</sup>どものことか？」

「……瑠伽」

肩を竦めて惚ける瑠伽。あまりにわざとらしい口調に、さすがの黒夢も咎めるようにその名前を低く呼ぶ。

横目で睨む黒夢に瑠伽はもう一度肩を竦めて、片目を瞑ってみせた。

「冗談だったの。勇者のことだろ？ まあ、俺は聖夜祭の日は仕事で出掛けていた訳でして、そのお綺麗な勇者さまとやらには一度もお目に掛かれていない訳ですけども」

「ああ、……そうだったっけか？」

「さてと、人をいいように扱き使って矜持高い男爵どのを捌きに――ああ悪い、裁きに行かせた暴君さまは何処のどなただったでしょうねえ？」

「生憎と近頃は忙しくてね。いちいち過去のことを覚えていられるほど暇じゃあないんだ」

「それは失礼いたしました、っと」

黒夢もようやく笑って身体を起こす。

皮肉のようにも聞こえるが、二人にとってはただの軽口の叩き合いだ。お互いさして気にしてもない。

一頻り笑い合った後、ふいに笑い声が止むと、妙な沈黙が訪れる中で黒夢と瑠伽は鋭い目つきを光らせ同様に周囲を見回した。その動作は素早く、まるで獲物を狙う肉食獣か――その肉食獣を警戒する被食者のようだった。つまりここから先は、“聞かれたくない話”だということ。

二人は周囲に誰もいないことを確認すると、お互い目配せを交わし、頷き合う。

「……それで？ 実のところ、どう思ってる？」

「その“魔王”とやらか？ 普段ならとんだ気違いだと笑い飛ばすところだがな。……案外、そうでもないらしい」

「らしい？ ——お前の意見じゃあないのか？」

「何せ俺は実物を見てないからな。目撃情報と過去の文献を照らし合わせてみただけだ。俺の意見なんて下手な推測に過ぎない」

「……なるほど。それで？」

声を潜めて談じる黒夢と瑠伽は、折々周囲に目を走らせながらその話題に興じる。内容はともかくも瞳をきらきらと輝かせて没頭する二人は、まるで綺麗な蝶を夢中で追い掛ける少年のようだ。

「黒夢。歴史に残る中で一番最近の魔王、そして史上最悪と謳われる魔王——と言われて、誰だか分かるか？」

「——“神殺しさま”、かな。名前までは知らないけど」

「御名答。ついでにいうなら名前くらい覚えとけ、お前曲がりなりにも皇帝だろ」

「当時八歳なんですが」

十五年前に処刑された伝説の魔王。神を殺すという空前の“偉業”を成し遂げてみせた魔物の王は、処刑されたその後も世に深い爪跡を残し、畏怖の念を以てその名を語り継がれることとなった。

思い出しながら、黒夢はふとその名前を覚えていないことに気付く。当時まだ子供だったことを考慮して反論してみるも、仔細は覚えていくせに名前だけ覚えていないというのはおかしい。そこまですぐ印象に残らない名前だったのだろうか。

「……何だっけ？ 名前」

「榊神威。神の名を持つ者」

惚けるように尋ねると、何のことなく瑠伽はさりと答えた。

——榊神威。黒夢は胸中で反芻する。決して平凡な名前ではない。それどころか、少し不思議な響きさえ感じる。のに、記憶を探ってもそんな名前はまるで出てこなかった。一体どういうことだろうか。

（——まあいい）

分からないことを延々と考え続けていても仕方がない。

切り替えの早い黒夢はかぶりを振ると、自信満々に胸を張る瑠伽に最初に抱いた疑問とは違うことを尋ねる。

「神の名を持つ者ってどういうこと？」

「そのままの意味だ。何か格好良いだろ？」

「……瑠伽の趣味か。何だ」

「何だってこたねえだろ。にしてもとんだ皮肉だな、その“神の名を持つ者”が神を殺めるとは」

瑠伽は言って、肩を竦めておどけてみせた。いつも通りマイペースな親友には最早苛立ちも感じないが、さすがに焦燥は胸をよぎる。いつものことながらに回りくどすぎるのだ。黒夢は再び周囲に視線をぐるりと向けて、何者もないことを認めると瑠伽の方へと視線を戻した。

「……それで？ その神殺しさまがどうしたって？」

「同じなんだよ」

またも迂遠な言い回しが返ってくると思いきや、あっさりとした物言い。肩透かしを食らった気分で黒夢は固まる。

といっても驚きの感情はあまり表に出さず、ただ唇を薄く開いたまま言葉を失っただけだった。

「……同じ？」

「ああ。知ってるか、その神殺しさまとやらはその文献によると黒髪の男らしいぞ。年齢にして十代後半」

「十代後半？」

「その年齢で“魔女”やら何やらを相手にしたんだから、かなり強い力の持ち主だったんだろうな。能力の詳細までは調べてこなかったが——まあどうせ、国立図書館なんかの本じゃ大したことも載ってないだろ」

世界最大規模の図書館をさらりと貶していることについては、二人とも気にする様子もない。

一般開放されている区域程度の歴史書ではあまり意味がないことは確認、そして実証済みだ。官吏の権限を使えばその奥までも入れるはずだが。

そんな黒夢の怪訝そうな表情を読んだのか、瑠伽は口の端を少しだけ吊り上げて笑ってみせた。

「何せスケジュールが詰まってるもんで、時間がなくてね。——それより、注目して欲しいのは年齢の方じゃない。容姿に関しての記述だ」

「……？ 容姿？ 黒髪の男なんだろう。それがどうした」

「黒髪は別段問題ない。黒い髪に問題があるなんつったら俺たちもまずいからな」

後ろで無造作に束ねた長い黒髪を片手で弄びながら、瑠伽は悪戯っぽく笑む。黒夢も伸びてきた前髪を上目で見上げた。それもそうだ。

「これは勿論、神殺しさまを見たという幸運な少数派の意見ではあるが——」

瑠伽はまるでその文献が手元にあるかのように、淀みなく話す。

ただそこで興味を誘うように一旦言葉を切ると、黒夢の目から視線を逸らし底抜けに青い空を仰いだ。

「その男は蒼い目、もしくは紅い目をしていたらしい」

一層低い音、まるで動物が唸る声だ。黒夢はぱちりと何度か瞬く。

「——“もしくは”？」

「ああ。どうやら目撃情報が違えてるみたいなんだ、しかも厄介なことに意見はほぼ半分に両断されてな。蒼い目だという奴が半分、紅い目だという奴が半分。——決着がつかん」

お手上げだともいうように肩を竦めて両手を上げる瑠伽。

どちらかが少数だというならばまだ説明のつけようもあるだろうに、それは見事にほぼ半分に割れているというのだ。しかも見間違えようのあるような似た色ではなく、“蒼”と“紅”。

どういうことだ。黒夢は首を僅かに傾け沈思した後、いくつかの仮説を持って、ゆっくりと口を開いた。

「……それらが別人である可能性は？　もしくは、何かを意図して組織された集団の偽証言、変装」

「前者はまずありえないだろう。あれだけの有名人なのに同時刻に別の場所に現れたという記述はないし、どちらも同じく魔物を従えていたという。魔王であることの証拠だろう。後者は、組織的な力ならば可能性はあるだろうと俺もずっと考えていたんだが——」

黒夢の意見に淡々と答えていた瑠伽が、突然言葉を切る。その顔に浮かぶのは苦い表情。黒夢には躊躇いのようにも思えた。

だが苦虫を噛み潰したような表情は一瞬で打ち消し、瑠伽は、黒夢に向けてごく自然に笑ってみせる。

「ところで黒夢、お前も聖夜祭の会場でその“魔王”と名乗った気違いとやらを見たんだよな」

「……お前、さっきから話題が飛び過ぎだぞ」

「そんなことくらい気にすんな」

底抜けに明るい声を出す瑠伽に、黒夢は眉を顰める。別にその意

図が全く汲めなかった訳ではない。むしろ、分かってしまいそうで嫌だったのだ。その突飛な空想とも思えるような発想が。

魔王。神殺し。黒髪。蒼い目、そして紅い目。黒夢の脳裏に浮かぶキーワードに関連性は認められている。

だからこそ、次の言葉が予期でき——だからこそ、聞きたくもなかったのだろう。

「それより、お前が見たその男の目の色っていうのは何色だった？」  
「——。蒼い目……、だったと思う」

信じたくない思い半分で、極力そのことを考えないようにしていた。

だが此処まで来てしまつては、今更思い違いでは済ませないだろう。髪の色。目の色、——一致している。

いや、でもまだ紅い目なんてことは聞いていない。縋るように黒夢は瑠伽の笑顔を眺めるが、その笑顔が曇る様子はまるでない。

「だろうな。灰麗や天武にも聞いたが、まるで同じことを言っていた」

「……だけど。まだ、それだと決まった訳じゃないだろう？」

「それがな」

一抹の可能性を否定するように黒夢は反論を上げるが、それをまた畳み掛けるようにして瑠伽が切り返した。

「その男を逃がした牢の看守——ああ悪い、今はもう馘首カビにされたんだったな。失礼、元看守含む数名の兵が、その口で確かに証言していた」

闇を孕んだ黒い双眸を細めて、瑠伽は数センチ分低い黒夢を見下

ろす。黒夢の目は冷たい。

それでも瑠伽は冷たい目から視線を外すことなく唇を薄く開くと、浮かべていた笑みを消して、はつきりと言いつつた。

「逃げた男の目の色は、確かに“紅”だったとよ」

↓ ふたりの神殺し（後書き）

まさかの主人公不在。

次回更新は今月の末か今年の終わりにか↑

活動報告の通り8月から消えますので、何とも言えないです。月末には出しますが、  
だからそれまでに書きだめなり更新なりできればなあ……と思います。

あくまで願望ですが。

↓ とある冬の日の昼下がり

逃げなきや。

逃げなくちや。

ただひたすらに石畳の上を駆ける。

逃げなくちや。

兄さんの言葉を胸中で何度も反芻する。

逃げなくちや。

冷えた空気が足を刺した。でも痛みに蹲ってる暇なんてない。

逃げなくちや。

でも一体、何処へ？ 心の中で反駁する。

それでも逃げなくちや。

でも一体——何から？ 後ろをちらりと振り返っても、追いかけてくる影なんか見当たらない。

広がるのは黎明の街。寂寥の色が滲んで下りた、朝露の冷たい帳の街。

兄さんと一緒に来たときは、笛の音が弾む愉快的な街並みが迎えてくれたのに。まるで、街そのものに帰れと言われているみたいだ。でも帰れない。もう帰れない。浮浪者の骸が街の片隅に転がる冬の夜明け。

——逃げなくちや。

走る。走る。石畳の上を。

影も足音もなく朝の街に降りた、暗く冷たい闇から逃げるために——。

「はーっ、本格的に寒くなってきましたねえ」

ばさりと白いテーブルクロスを広げて、甘楽が見事に晴れ渡った空を仰ぐ。

とある冬の日の晴れた昼下がり。冬もそろそろ半ばに差し掛かり、朝の厳しい寒気はだいぶ緩和されたものの、それでも十分すぎるほどに蔓延する冷気は容赦なく露出した肌を掠めていく。

「最近朝晩がぐっと冷え込みましたもんね。……こんな寒いのに手伝わせてごめんなさい、甘楽さん」

「あーいえいえ、そういう意味ではないですこちらこそごめんなさい。元はと言えば洗濯の担当である神威さんがいないのが悪いんすから」

浮かべる息は白く、冷えた空気が微かに笑った神名の喉を鋭く刺した。最近、本当に寒さが厳しくなってきたと思う。というか、どちらかというと身体が温度についていけない気がした。気候のずれた土地に來たせい、それか例年よりも気温の下降が急なのかもしれない。

しかし、もういちいち気にして騒ぐほどの寒さでもない。帝国領

地内の街角で細々と暮らしていた頃には多少の隙間風にも困らされたもので、外は凍えるほど寒くとも室内に入ればちゃんとした暖房が完備されているだけ有難かった。恵まれたものだと思いながら、神名は洗濯籠から白いシーツを引き上げて張り巡らされた洗濯紐に手早く掛ける。

「それにしたって、こんな寒い中でちゃんと乾くんスカね？ てか、乾く前に凍っちゃいませんか？」

隣で元来細い目を一層糸のように細めた甘楽が、ふと不安げに零した。何だかんだ恵まれていると言えど確かに外の冷気は酷く、一枚限りの薄いケットなど掛けた途端にでも凍り付いてしまいうだ。しかしその心配はないと、神名は僅かに表情を明るくしてみせる。

「その点については、心配しないで下さい。一応此処には冷気を遮断する魔法障壁が設置されてるんです。さっき作動させたばかりなので、まだ中に冷気が残ってますけど」

「障壁？ へえ。便利なものもあつたもんですね」

「魔法障壁って魔力を結構消費しちゃうんですけどね。それでもほら、その隅に魔力循環器も取り付けられていますし、すごく画期的な設計になっていると思います」

「ま、魔力……じゅんかん、き？ ですか？」

「はい。仕組みはともかく、魔力を使えるところだけリサイクルしているものと考えて頂ければいいかなと。高価なもので一般家庭には普及されていないんですけれど」

広いスペースの隅に存在感なく鎮座する、古ぼけた四角い箱のよくな不恰好な機械を指差し説明すると、甘楽はへえーと感嘆の声を上げた。実際、神名もこの間際に教えてもらったばかりで、実物を見たのはまだ二度目だ。

帝国城内でも一台だけ見た。玉座の間で、しかしまるで目立たない場所に設置してあったが。城で働いていた甘楽が知らないところを見ると、もしかしたら一般兵には知らされていないものなのかもしれない。どういう風に使われているのかまでは神名にも分からなかったが、それこそ帝国城内の、しかも玉座の間に設置されているくらいだ。何か重要な事柄に関係していてもおかしくはないだろう。

「そんなものを持つてるなんて、神威さんって随分なお金持ちなんですねえ。一体何処から稼いでくるんスか、あの人は」

「あ、いえ、此処にあるのはそういうのじゃないんです。普通に売り出されているようなものじゃなくて、十五年以上前に作られた……

…発明品、というか」

「発明品？」

興味深げに甘楽が覗き込んでくる。

言ってしまったから、自分がむやみに話していいものかどうかと神名は逡巡したが、甘楽の痛いほどの視線を感じて結局は口を開いた。

「昔、マークくんが此処で王として魔物を統治していた頃、此処に以前存在していた国——今はなき亡国リンドグラッセに、とても気の合うお友達がいたんだそうです。発想力が豊かで、魔法にも精通していた方だったと」

楽しげに語ってくれた神威の顔を思い出し、神名はそっと目を伏せる。

その口振りからは彼の人柄や高いその能力、それに神威とどれだけ仲が良かったのかは痛いほどに伝わってきた。本当に気の合う友人だったのだろうと思う。

「その方は、自らを発明家と名乗っていたそうです。それでよくおかしな発明品を作っては、マーくんのところを持ち込んできたみたいで」

そこまで語れば、甘楽も神名が何を言わんとしているか察したらしい。

二人は再び、暗がりにはつんと置かれた箱のような機械に目を移した。

「あの機械は、その方が作った発明品の一つだと言っていました。五年以上も前のことです。から、当時、魔力循環器なんてものは存在しません。ですから、あの機械はつまり……魔力循環器の“始祖”になります」

「へえ……すごい方だったんスねえ」

「すごいことです。ね。魔力の流れや性質を正確に把握していなきや出来ないことです。から。そもその仕組みを一から全て作ったんですもん」

すごい人が友達だったんだ、と甘楽はからかうように笑う。神威がこの場にいたらどういう意味だよとまた怒り出すだろうと想像して、神名も笑った。

「……それで。マーくんは今朝、亡国の話を聞いて、『あいつがそんなに簡単に消える訳ない』——ってそう言っ、その御友人を探しに行っちゃいました。確か、一番機械系の事業が発展している帝国に行くって言っ、てましたけど……あんまり、望みがあるとは言えませんかどね」

「あー、それで朝からいないんスカ。……ま、味方が多ければ“これから”も楽でしょうけどねえ。でも、それにし、たってまさか単身で帝国に乗り込むとは、随分な自信というか緊張感がないというか

……」

「頼もしい限りです」

神名はくすりと笑う。

それから洗濯籠に手を伸ばすと、染み一つない真っ白のタオルを拾い上げた。洗いたての冷たい布の感触もそれほど辛さを感じない。寒気が段々と和らいできたらしい。

「……でも、どうしてリンドグラスという国は、一夜にして消えてしまったんでしょう？　それも、この城だけをそのまま残して」

広がる荒野を眺めながら、ぼつりと疑問を零した。

此処にあったという国——消えてしまった国。

神名のような素人が考えたところで、まさか分かるはずもない。今まで十数年間、どんな頭脳を持った学者だって解決できなかった問題なのだ。大規模にわたる空間移動魔法。真夜中に国全体を襲った大地震。当時リンドグラスといがみ合っていた帝国元老院の陰謀。強大を誇った呪術師たちの共謀。魔女の集会跡<sup>サバト</sup>。現実的なものからおよそ突飛なものまで、さまざまな推測が人々の間で交わされたのだという。しかし結局どれも噂の域を出ず、今や定説となっているのは現実味の欠片もない『神隠し』説。

「建物も住人たちも一緒に消えたと言いますからねえ。その発明家の方みたく、神威さんのお友達も沢山消えてしまったんでしょう？　残ったのは城だけ——というか、むしろ神威さんだけみたいな」

「……マールくんだけ、取り残された……？」

甘楽の言葉を、神名も思わず口にする。それは、馬鹿な妄想と笑い飛ばせるほど大仰すぎる表現でもない気がした。

城。残った城は、他の誰のものでもない神威の城だ。そして更に

は、神威本人も確かに残っている。紛れもないリンドグラッセの住人であつたにも拘らず。

「……ま、俺の考えすぎかもしれませんけどね。それより神名さん、早く洗濯物を掛けてしましましょう」

「……そうですね。変なこと言つてごめんなさい」

「あ、頭を下げる必要ないですって！ 前から思つてたんですが神名さん腰が低すぎです、もっと堂々としていいんですってば！」

「え、あ、ごめんなさい」

だから謝らなくていいと諭されるが、そんなことを言われると余計頭を下げたくなる。腰が低いだなんて、初めて言われた。帝国にいた頃は頭が高いだの礼儀がなつていないだの散々に言われたために、神名には余計にそんなことを言われる理由が分からない。

「もう……沢山の候補者の中から選ばれた“勇者さま”なんだから、もつと胸を張つてもいいのに。——って言つても、神名さんは多分そのまんまなんでしょうけどねえ」

「う……すみません。で、でもそんな、黎の方が帝国貴族の方に頭下げてましたよ？ わたしなんか、公爵さまのお屋敷で暴れ回つたりしたこともありましたし」

「あー、その噂は聞いたことがあります。お酒を勧められたのを神名さんが断つたからって、公爵さまがケン力を吹っ掛けたとか」

「う……その、子供扱いされたのにわたしは勝手に逆上しちゃっただけなんですけど。お恥ずかしい限りです」

恥ずかしさで火照る頬を両手で押さえ、神名は目を閉じる。あれは確かに軽率な行動だったと思う。今同じことをされても抑え切れる自信はないが。

その時事を収めてくれたのも黎だった。いつも何処か足りない神

名のサポートをしてくれていたのだ。その度に毎回自分は子供だったと後悔する、のだが。

「わたしって本当子供で、何ていうか……此処の方たちはそんなことないって言うてくれますけど、すつごくわがままなんです。数日の間でも勇者でいられたのは、全部黎のお陰で」

「俺たち下っ端の間では結構人気あったんですけどねえ。お姿はほとんど拝見したことがなかったですけど、平民の出の優しそうな勇者さまだった」

「あ、ありがとうございます……」

俯いて小さな声でぼそと告げる。

そんなことは全然知らなかった。右も左も気取った貴族たちの皮肉ばかりだったので、恥ずかしいが純粹に嬉しい。

「それに、今普通に接していても思うんですけど神名さんって全然いい子じゃないスカ。ほら、さっきの話とか、頭もいいんだし。帝国のお偉いさん方なんて気にすることないっスよ」

「……ありがとうございます。甘楽さんは、優しいんですね」

「正直なだけっスよ。神威さんほどじゃないですけどね」

子供っぽく無邪気に笑う甘楽。しかし神名は、それが嬉しかった。長い間の念願だった勇者にようやくなれた神名にとって、此処に来ることになったのは当初は望まぬ事故だと言えた。けれど今ではそれさえよかったと思う。あの中ではまるで虚構で、自分の声など届きはしなかっただろう。今いるのが皮肉なことに討伐すべき魔王の城であつたとしても、それを不本意だと神名はもう思わない。

此処でこうやって家事に勤しむ生活も、悪くはないのだ。

「それじゃあ、そろそろ中に入りますか。神威さんも帰ってきてる

「かもしれませんしねえ」

「そうですね。お洗濯も終わったし、やっぱり暖房が恋しいです」

空になった洗濯籠を抱えて、笑いながら神名はドアの方へと足を向ける。

神威はもう、帰ってきているだろうか。

——本当に発明家の友人の見つけられるとは思っていないが、それでも、見つければいいと願った。

今や亡き国の滅亡の真相のためではない。事件の解決を望んでいる訳ではない。ただ、思ったのだ。今のこの幸せを、できることなら沢山の人で分かち合いたいと。

だから、発明家だという神威の友人も、一緒になって騒いだり笑ったりできればと思った。他にも、黎なんかも連れて。そうすればもっと楽しいだろう。帝国や何やらのしがらみに囚われたりせず。

(——あと、もう一つだけ望むなら、女の子のお友達が欲しいなあ……)

——しかし実際に叶ったのは、胸中でのみふと望んだ、最後のやさやかな願いのみだった。

「あー、この子な、家出てきたらしい。——っつーわけでしばらくうちで預かることになるからよろしくな。あ、甘楽と兵童のおっ

さんは指一本たりとも触れんじゃねーぞ」

とある冬の日の昼下がり。

昼過ぎにひよっこり帰ってきた神威が連れていたのは、すっかり年を取った気の合う発明家の友人などではなく、神名よりも更に一回り小柄な、さながら人形のように愛くるしい少女だった。

↓ とある冬の日の昼下がり（後書き）

まさかの主人公不在パート2。あ、いや、でも最後出てたか。

警告タグ付くほど放置していてごめんなさい（；、旦那）でもこれから間が空いてしまうと思います、けど来年には絶対戻ってきますので！

それに月末にはできるだけ更新したいと思います><

こんな作者ですが、よろしければこれからもお付き合い下さいませ！

↓ 氷の深窓令嬢（前書き）

お久しぶりです。

……覚えていたでしょうか。白邪です。  
受験を終え、ようやくの復活です。

パソコンの方は残念ながらまだ復活していないので更新速度はあまり速くはないですが、改めてよろしくお願いします。

↓ 氷の深窓令嬢

「五月七日ちゃん、っていうんだ！」  
ッユリ

歌うように跳ねる声音。

今までこの城で過ごしてきた間聞いたことがないほど、神名が声を弾ませる。

「めずらしい名前だね。いいな、かわいいなあ」

「ありがとう。でも、別にだからって五月生まれってわけでもないんだよ？　なんだか変な名前でしょ」

はぜる暖炉の火の前に、心地よい暖気のせいか、部屋の中はいつも以上に賑わっていた。

——いや、理由は多分、この暖気のせいなんかじゃないんすけどね……。

ちらりと暖炉の真ん前を陣取った二つの影をソファアールから一瞥し、神名が喜ぶのも当然のことだろう、と甘楽は一人頷く。

現在、既に団欒の間となりつつある大きな居間では、自分を含むいつもの四人に加えて、もう一人見慣れない少女が暖炉の火を囲んでいた。

「でもよかった、女の子が来てくれて。……って、ちょっと不謹慎かもしれないけど」

「あたしもよかった。あんなむさ苦しいオヤジばかりのところから抜け出せて」

「え、……でも五月七日ちゃん……こんなこと言っのってどうかと思うんだけど、マークン——いちおう、三十過ぎてる、みたいだよ？」

「いいの。男は見た目でしょ」

……しかし、それにしたって今度の来客はかなりしたたかしい。兵童の存在は最早最初から頭数に入られていないのか。

肩で揃えられたゆるやかに広がるプラチナブロード。空色に近い色素の薄い碧眼。それに健康的とは言えないが真珠のように透ける白い肌は、黙っていれば誰の目にも病弱な深窓の令嬢とでも映ったことだろう。

けれど。

「……彼女、帝国貴族の娘さんですよ？ ああ髪の色からして」「そうだな。つっても子爵だった父親はもう亡くなってるらしいが」「……それにしては……何ていうか、……したたかすぎやしませんか。彼女」

「あん？ いいだろ！ 何か問題か！？ いいだろ強気な女の子！」「解釈ちよつと違う！ 何であんたは女の子のことになるとそんなに適当なんスか！」

「適当じゃない！ 俺はいつだって本気だ！」「身の上をまるで気にしてないってことです！」

魔王城の新たな客分——水城<sup>ミズキ</sup>五月七日、というらしい——である少女は、花よ蝶よと育てられるはずの貴族令嬢とは思えないほどにしたたかだった。

狡猾だという意味ではそこの貴族令嬢たちも多分にしたたかかもしれないが、彼女の強さはそれとは明らかに類が違う。

こんな見も知らぬ怪しい男に誘拐（本人否定）されて事情も説明されずこんな怪しい城に軟禁（本人否定）され、そんな笑えない状況にも関わらずその城の他の食客と臆することなく会話する。自分ならばそんなことは絶対にやらない。逃げ出す。逃げ出せなければ部屋の隅っこで丸くなって思い付く限りの現世への呪詛を小声で撒

き散らす。だというのに、この少女は……。

そもそも、そんな名高い御家から家出してきたというのが、甘樂にはいまいち信じられないことだった。

「——大体、ですね。彼女の家出の理由は？」

「そんなもん俺が知るか」

「そろそろ蹴りますよ！」

……いや、一番非常識なのはむしろこの城の主なのだが。

行き場のない女の子ならば誰でも匿うというのか、と思わず甘樂は叫び出しそうになったが、それを言うとおっさりと肯定されそうな気がしたので何とか抑えた。もし何でもない顔で首肯されたら自分は今度こそ何も信じられなくなる。それだけは避けたい。

「いいだろ。俺を必要としてる女の子がいるなら事情なんて関係な」

「いなんてことはないですし大体神威さんが必要とされてるわけじゃありません。いい大人なんスからそろそろ現実を見据えて下さい」

「俺はいつでも現実を見てる」

「四十五度捻じ曲げた現実ですけどね。それを世間一般では明後日の方向というんです」

どうでもいいことだが、最近は何だか神威への突っ込みが対等というか、様になってきたように思う——全然嬉しくないが。

大体、まあ、神名の時のような事情ならばまだ許せる。あの件に関して民意を問えば誘拐としか答えが返ってこないのは明らかだが、しかし帝国側のやり口が汚かったのは事実だ。やむを得ない状況だったと甘樂は思っているし、元帝国の人間としてせめて自分だけはそれを罪として問わないだけの心は決めている。それに加担したことに關して後悔もしていない。

だが。

今回は、果たしてあの時のように“やむを得ない”事情だろうか？

「でも、五月七日ちゃん、御家族の方は？ 帝国には御家族がいるんですよ？」

「うーん……大丈夫じゃない？ 放っておけないような家族がいたら家出なんてしないし……大体、家出しろなんて言ったのうちの兄貴だし」

「え、そうなの？」

暖炉前で会話する二人の話が自分の関心の核心に近付いているような気がし、思わず聞き耳を立てる。

……そこまで気になるのなら自分で直接訊けばいいものとは分かっているが、しかし甘楽はともそんな気にはなれなかった。

まだまだあどけない少女とはいえ、相手は一応帝国貴族なのだ。反面こっちは怖いもの知らずの神殺しさまでも国一番の勇者でもなければ、いつそ帝国に反逆の旗を掲げた極悪人でもない。ただ、元帝国兵だというだけだ。一体それが何になるうか。むしろ貴族の権力を笠にこてんぱんに打ちのめされて終わりである。

「異父兄妹なんだけどね。でも一応、その手腕を買われて帝国官吏になった、……らしいから」

「か、官吏！？——らしい、って」

「仕事のサボりよう見たらあんまり信用ないけど」

「……すごい人なんだねえ」

何でもないような少女の声音に神名の寝惚けたような声で述べられる感想は、どこかズレている気がしないでもない。

反対に、二人の会話を盗み聞きしていた甘楽は思わず息を呑んだ。官吏は官吏でも帝国官吏といえば、その立場はなかなかのものになるはずだ。しかも、貴族が牛耳っている帝国社会では実力を買われ

て官吏に就く例なんて滅多にない。とすると、彼女の兄は相当の切れ者なのだろう。

だとすると……。それでは少女が家出した理由がますます分からなくなってしまう。兄に家出しろと言われた？ 支離滅裂だ。一体何故？ 収入もあり、彼女が幼いうちは安定しないかもしれないが立場もある。あえて家を出るような理由がまるで思い付かない。しかも、こんな寒い冬に、性急に。——そんなことを言うと馬鹿が調子に乗るので口には出さないが、神威が彼女を見つけないければ、最悪行き場を失くして凍え死んでしまっていたかもしれないのだ。大事に育てられてきた箱入り娘は、そんなことなど思い付きもしないかもしれないが。毎冬——特に寒さが厳しい夜の翌日は——浮浪者の骸が街の片隅に転がっているのを思い出し、甘楽は無意識のうちに顔をしかめる。……そんな死体など、彼女は見たこともないのかもしれない。

「でも、そんな人がどうして、五月七日ちゃんに家を出るなんて言ったの？」

「家を出ろっていうかね……逃げろってさ。あたしに言ったのはその一言だけで、説明を求めても首を振るばかりだよ。笑っちゃう」  
「……説明もされてないのに、五月七日ちゃんは家を出てきたの？」

今度は神名も本気で驚いている様子だった。大きな丸い目を殊更丸くしている。

逃げろ？ ——何から。

ともすれば、思わず笑い飛ばしてしまいそうな話だ。

切れ者……と言ったが、もしかすると法螺吹きか、夢想家か、それが相当深くに何か一物を持っている人物なのかもしれない。そうじゃないと逃げろなんてただ一言を實の妹に言い放つことはできないだろう。

——その兄に妹に対する情があれば、の話だが。

しかし、彼女の話聞いてる限り、軽口は叩くものの兄を忌み嫌っている様子は見られない。むしろそんな状況下で兄の言葉に従ったところを見ると、絶対の信頼さえ抱いているように見える。兄妹仲は決して悪くないはずだ。

だとしたら何故？ 逃げるとは、一体何から？ ますます分からなくなる。

「勿論、完全に納得はしてないけど。でも説明されないなら自分で推測するしかないし、あたしには兄さんしか家族がいないし……それに、兄さんは残念なことにアホだけど頭はいいから」

ただ一つ分かるのは、この少女が、普通にはないほど強靱な精神を持っているということ。

兄も異端だったのだろうが、そんな兄を持った妹も妹だ。……第一にまず言葉遣いが悪い。平民育ちのはずの神名の方が丁寧なくらいだ。アホとかサボるとか、家の長子である兄に対する態度さえ一般貴族の言葉とはとても思えない。

——勿論、甘楽にとっては、少し口が悪いくらいの方が親しみやすかったが。

本当に神威は何の疑問も持っていないんだろうか。一抹の不安さえ？ ……そんなことはない、信じたい、が。

「……なるほど。なかなか頭の切れる義兄らしい」

今まで奇妙なくらいに静まっていた傍らの男が、ぼそりと零した。どうやら聞き耳を立てていた甘楽を咎める者はここにはいないらしい——神威もまた、二人の会話を聞いていたようだから。

ただ、彼は少し堂々としすぎている。まるで悪行を悪行とも思わないような態度だ。

だがその点を突っ込む前にとりあえず、

「……今義理の兄って書いて兄って読みましたか神威さん」

「あん？ ……気のせいだろ」

「だったら今の間は一体何スか」

一体会ったばかりの少女に何をするつもりなのか本当に常に法に抵触しているような人だそろそろ帝国に突き出すべきかもしれない意味もなく胸中でひと息にそう吐き出し、それから甘楽はふと考え直す。

……別に、義理の兄弟になる方法の一つではないっスよね。

大体神威にはもう神名がいるだろう。と神名を勝手に生贄もとい犠牲に差し出し、甘楽は自分を無理矢理納得させた。

「で、それで、何ですって？」

「だから、頭のいい兄貴らしいって。なかなか言えたもんじゃねえぞ、実の妹に」

「まあ……そうでしょうけど」

だから何だと言うのだ。

またもや深い思考の海に沈みそうになって、甘楽ははたと気付く。

「……もしかして神威さん、彼女のお兄さんが逃げろって言った理由が分かってるんですか？」

「……大体な」

片眉を吊り上げ、神威は珍しく低い声で答えた。

いつもなら、そんな些細なことですえ自慢の種にする神威なのに。

——あまり嬉しい理由ではないらしいと、甘楽は直感した。

しかし、だからといってその理由を話してもらえないこととは訳が違う。

「まあ、でも……そんなことはどうでもいいだろ。とりあえず」  
「え、ちよつ、神威さんっ?」

早速追撃から逃れるかのように神威がソファーから立ち上がった。逃げられては堪らないと甘楽は慌てて腰を浮かせたが、神威はそんな甘楽を視線だけでとどめる。

「そうだ。甘楽、お前に頼みたいことがあったんだ。珍しく」  
「は?」

——珍しくつてわざわざ言わなくたってこつちだって分かっているのにきつとただの嫌味に過ぎないのだろう本当に最低な男だとそんな長々とした文句を一瞬のうちに考えながら、結局、半開きの口から出たのは意味を成さないそんな音だった。

頼みたいこと。……神威が自分に一体、何を。  
嫌になるほどいつもいつも、その言葉は命令でしかないのに。

「明日も俺出掛けてくるから、留守よろしく。——今日より遅くなる」

……しかし甘楽に拒否権というものが存在しないことは、火を見るよりも明らかだった。

——ひとつだけ、嘘を吐いた。

「こつちがお風呂場で、もう一つ向こうが娯楽室。わたしもあんまり使ったことないけど、色んなものがあるみたい」

夕暮れ時、五月七日は神名に城の中を案内してもらっていた。

神名は五月七日よりも三つ年上、つまり十六歳の少女だ。教会史に謳われる聖女のような、きれいな銀髪と緑眼の持ち主——というのが、彼女に対する五月七日の最初の感想。彼女も一応はこの城の食客らしく、驚くほどに親切で、初対面であまり素性の知れない五月七日にも疑いや嫌悪をかけらも抱くことなく接してくれるという奇跡的な優しさを持ち合わせている。帝国には——というか、五月七日の身边にはまずそんな人はいなかった。

しかしそんな彼女の優しさに反するように、神名に案内された城内は、まるで迷宮のような造りをしていた。

帝国のお城もなかなか迷いそうだとは思っていたが、この城は造りがさらに複雑で、どこもかしこも似通っている。その上、道を覚える上で特徴になりそうな調度品さえない。

何だか、この城は敵に攻め込まれることを想定して作られているみたい——五月七日は廊下の様子を一度見回してみte思った。それにしては娯楽室、なんて、この城の主はなかなかユーモアに富んでいるようだけど。

「えーっと……お風呂場の入口は一つしかないけど、もしかして混浴なの？」

「あ、ううん。違うの。大浴場は女子専用——つまり、野郎は部屋の備え付けで済ませとけて。マークくん曰く」

「なるほどね」

まだ会ってたったの数時間にしかないが、彼の人柄を考えれば領けた。——というよりは、彼の特殊な人格というべきか。無理が通れば道理が引つ込む。それをそのまんま体で表したような人だ。まあ、だからこそ五月七日は今ここでこうやって庇護してもらえているわけだが（お風呂は部屋ごとに備え付けられている時点で十分すぎると思うが）。

大体、この城の住人はみんな、接してみる限り驚くほどお人好しだ。

そもそもこんな広大な城なのに、住んでいるのはたったの四人なのだという。その事情は色々複雑であるらしく、そのほとんどはまだ話してもらっていない。しかし、五月七日も何となくは察することができた。何もない広大な荒野に建てられた古城。《神隠し》も《神殺し》も、まだ十三歳の五月七日が経験したことではないが。……彼らが一体何者かというのは、帝国の近況がよく物語っている。

五月七日の兄が突然逃げると彼女に告げたのも、そのことが深く関わっているのだろう。

強がりだというのは分かっているが、それでも五月七日は気丈に振る舞おうとする。誰さまのためでもない。自分のためだ。こんなところでなど弱っていられるだろうか？ 多分、兄はもっと辛い思いをしているだろうに。……思うと胸が痛むほど。

「あ。そうだ、あとほら、向こうには図書室が——」

「え、図書室？ 図書室があるのっ？」

「え？ あ、うん。わたしは一度しか入ったことないけど……」

止め処なく溢れてくる思考を強引に打ち切り、五月七日はぱっと顔を上げる。その突然の反応に驚いたように、神名はぱちくりと大きな目を瞬かせた。

図書室。それだけが——と、いうわけでもないが——五月七日がここで居候させてもらうことに対して抱いていた不安だった。

彼女の生家は元々帝国城に近く、同時に国立図書館にも近い。城には国の歴史や政治に関する文献が多く収められていたし、国立図書館は城の半分ほどにも値する敷地を持ち、世界有数の蔵書数を誇っていた。加えて亡父が読書好きだったこともあり、家にも父が遺した書物が彼の書斎に所狭しと並んでいる。

そんな恵まれた環境の中で育った五月七日は、自然と文字漬けの生活を送るようになっていたのだ。

したがって、本のない生活など、五月七日にはそれがどんなものなのか想像するのが難しいほどに縁遠く、そして耐えられないことだった。

「ど、どれくらい広いの？ 入ってみてもいい？」

「あ、うん、いいと思うよ——結構広いから」

兄のように頭はよくなくとも、元来勉学は好きな性分だ。

父が死んでからは家庭教師を雇うような余裕はなかったために随分と独学が増えたが、その際には本が役に立つ。小説、歴史書、伝記、図鑑、童話、自己啓発本、雑誌、教科書、新聞、哲学書、辞書——あるもの全てを読み漁った。時には偏った見聞も入りがちだが、そういう時には兄が偏りを抑制するような良書を薦めてくれた。本を読んでいる間は、時間を忘れられた。

躍り出す胸を抑えようとせず、五月七日は他の部屋——件の娯楽室や居間——よりも一回り大きな両開きのドアを押す。一瞬遅れ

てがこりと重々しい音を響かせ、ドアはゆっくりと開けていった。

「——うわあ」

吹き出してくる風を感じ、五月七日は思わず吐息する。

古い紙と木の匂い。時間が止まる感覚。静寂が占める白いページの隙間——

思い切り息を吸い込み、一步中へと踏み出した。

国立図書館の一室とほとんど変わらない広さ。背の高い本棚が一定の間を空けて整然と並び、大きく空いたスペースの真ん中には簡易な木製のテーブルと椅子も用意されている。いくつもの——何十にも亘る——本棚が鎮座しているせいもあるのだろうが、縦長の部屋は向こうの壁までまず見渡せないほどに広い。本格的な『図書室』だ。

「すごい……」

「五月七日ちゃんは、本、読むの好きなの？」

「うん。すっごく」

後ろからの問いかけに、五月七日は振り返らずに頷いた。

一体どれほどの蔵書があるのだろう。読んだことがないものどころか、聞き覚えのない題名の本だってあるに違いない。本棚には一見何の統一性もない背表紙が所狭しと並び、再び開いてもらえる日を待っている。一番上の段にしまわれた本なんか、きっと五月七日の背丈では届かないだろう。

「いつでも使っていていいと思うよ。……なんて、わたしが言うことじゃないんだけど……マークくんは多分喜んで開けておいてくれるから」

「ありがとう」

今度は振り返って微笑む。——これで、当分の心配はいらないだろう。

全く不安がない、と言えばそれは嘘になるが。

しかしそれでも勇氣は出た。こんなことで元氣づけられるなど、変な話と胸中では笑い飛ばすが。けれど、目を閉じればよくよく兄と訪れた国立図書館を思い出す。

「ごめんね、神名さん。それじゃあ他のところも案内してもらえる？」

「いいの？ 本、読んでもいいんだよ？」

「ううん。——それよりまず部屋に案内してもらわなきゃ、あたし多分図書室から帰る途中で迷子になっちゃう」

それは笑えないでしょ、と言うと頷きながらも神名は笑った。

「うん、それじゃ行こっか。五月七日ちゃんの部屋、わたしの隣だから」

五月七日は頷く。頷いて、神名の後に続き図書室を出る。

それにしたって何故もう既に部屋が用意されているのだろうと五月七日はふと思い、——考えるのをやめた。

世の中には考え過ぎない方がいいこともあるような気がした。

「あ、ごめんね、別に部屋の配置とか内装とかはマーくんの趣味とかそういうわけじゃないからっ」

「……神威さんの趣味なのね？」

しかし同時に世の中には考えないようにしていても相手から知られることもあるようだった。

「う、うつ……ごめんね、マーくんも悪い人じゃないんだけど……」

別に神名が貶されているわけでも何でもないのに何故か神名が頬を両手で覆いながら弁解し、それに五月七日は少しだけ笑う。

彼女は本当に優しい人なんだろう。心から。まっすぐすぎて、少し眩しいくらい。——そして、五月七日を拾ってくれたこの城の主も。

「……うん。神威さんって、ちょっと兄さんに似てる」

ただっ広い廊下を歩きながら、目を閉じて二人の面影を縫い合わせる。

——五月七日はひとつだけ、嘘を吐いた。

彼らには言わなかったけれど、兄はただ単に逃げると一言だけ言っただけじゃない。

もう一言だけ、逃げるなんてどうしてと駄々をこねて嫌がる五月七日に向けて、彼は優しく囁いた。

——“風邪、引くなよ”。

声を呑んで飛び出した街の片隅で、凍えかける五月七日に手を差し伸べてくれたこの城の主がどことなくその時の兄に似ていた気がしたから、五月七日は覚えず差し伸べられたその手を取ってしまったのだ。

不安なんて全くないと言えばそれは嘘になるけど、でも兄さんと同じ笑顔を向けてくれたこの人なら大丈夫だってそんな気がした。

だからここにいることを、決めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5348i/>

---

神殺しさまの謀略

2011年10月5日05時56分発行